



息錄

41 3 23  
內交

### 靜思錄序

友人舟橋水哉君、井瀨堂主人の爲めに、冬期在郷布教の餘暇を以て、余の過去二十餘年間の隨筆中より、長短の文二十篇を編集して靜思錄と題し、其原稿を郵致せられたりとて、堂主より轉寄し、之を刊行せんとの意思ありと云ふ。因りて一讀すれば、概ね曾て諸雜誌に掲載せしもの而已にして、別に新奇の論文等は更に有ることなし。況んや印度の事の如きは、輓近該地を跋渉せられたる諸大徳も少なからざれば、詳

明なる報告は之を其諸大徳に要求せざるべからず、今此録中記載の事は啻に遼東の白豕たるのみならず、徒に梨棗に災するの類たるを免かれざるべし。然れども片片たる二十篇も亦是れ余の日常閑靜思慮の結果に外ならず、而して幸に之を一冊子として有縁の人に示さんとの友誼に對して、固辭することを得ず、原稿を返すに及んで此語を作り以て其序と爲す。

明治四十一年戊申二月十日東京城西爪雪處に於て

碩果生 南條文雄識す

## 靜思錄目次

第一	武士道と佛敎	一
第二	五常の解	五
第三	水よく石を穿つ	二二
第四	因縁和合	二七
第五	繪に書いた餅	三九
第六	物語の移住	四三
第七	胎敎の要	五六
第八	七佛通戒の偈	六〇
第九	閻多迦	六八

目次

目次

第十 宗教とは何ぞ……………七四

第十一 言語學に於ける梵語の位置……………八三

第十二 歐洲梵語學略史……………九三

第十三 梵文無量壽經……………一〇二

第十四 佛施伽耶菩提樹片略史……………一〇六

第十五 佛涅槃年代考……………一一九

第十六 印度佛教の勢力……………一三六

第十七 從軍布教使將來の書籍……………一四二

第十八 布教の困難……………一四八

第十九 羊公の鶴……………一五八

第二十 笠原研壽君を憶ふ……………一六二

靜思錄

武士道と佛教

文學博士 南條文雄 著



世人常に言ふ佛教は慈悲を本とす、故に武士道に於て裨益なきのみならず、却て士氣を沮喪するの恐れありと、此は一を知りて二を知らざる皮相の見を以て言ふ者なることは、苟くも佛教の大綱要領のみなりとも聞き得たる者は、皆能く之を知る。即ち慈悲に對する智慧、攝受に對する折伏、攝取に對する抑止と云ふ語ありて、遂に一殺多生の理を談ずるに到る、已に因果の道理を確信し、煩惱の私心より發起する所の身口意の惡業を斷滅し、菩提の妙果を證得して、自利々他せんとする公心ある者は、其勇氣固より尋常人の及ぶ所に非ず。

本邦に於て佛教主義の法文の上に躍如たるは、無論聖德太子の十七憲法なり、其中

に實に左の條あり。

二曰篤敬三寶三寶者佛法僧也則四生之終歸萬國之極宗何世何人非貴是法人鮮尤惡能教從之其不歸三寶何以直枉。

六曰懲惡勸善古之良典是以無匿人善見惡必匡其諂詐者則爲覆國家之利器爲絕人民之鋒劍亦佞媚者對上則好說下過逢下則誹謗上失其如此人皆無忠於君無仁於民是大亂之本也。

九曰信是義本每事有信其善惡成敗要在乎信君臣共信何事不成君臣無信萬事悉敗。

此第九條の如きは華嚴經の信爲道源功德母云云の意に非ずや蓋し聖德太子終身の舉動は無量壽經に説く所と符節を合はすが如し此經は舒明天皇の時付惠隱をして宮中に講せしめたまひしより見れば其前代たりし推古天皇の時も已に之を讀誦玩索せし人ありし事疑なし經に曰く。

志勇精進心不退弱爲世燈明最勝福田常爲導師等無憎愛唯樂正道無餘欣戚拔諸欲刺以安群生功慧殊勝莫不尊敬滅三垢障遊諸神通。

是れ豈武士道の極意に非ずや加之佛教の輪廻轉生の説亦武士道をして二層其斷を強からしめしもの、如し即ち楠公兄弟の七生報國の申合せは今や人口に膾炙して之を知らざる者なきに到れりと雖も此思想の佛教に出でたることを知らざるものなきに非ず故に煩しきを厭はず左に太平記の一節を抄録すべし。

正成座上に居つゝ舍弟の正季に向て抑最後の一念に依て善惡の生を引くと云へり九界の間に何か御邊の願なると問ひければ正季からからと打笑つて七生まで只同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ正成よに嬉しげなる氣色にて罪業深き惡念なれども我も個様に思ふなりいざさらば同じく生を替へて此本懐を達せんと契つて兄弟ともに刺し違へて同じ枕に伏しにけり。

軍神と呼ばるゝ廣瀬海軍中佐の正氣歌にも、

嗚呼正氣畢竟在誠字嗚々何必要多言、

誠哉々々斃不已七生人間報國恩、

とわり又辭世にも、

七生報國、一死心堅、再期成功、含笑上船。

とあり、出師表に鞠躬盡力、死而後已とあるは全く過去未來を談せざる儒教主義なり、諸葛の死は遂に蜀漢の滅亡を見るに到れり。我が武士道は三世因果の佛教を得て、身は斃れても精神は依然たり、故に七生までも人間に生れて、本懐を達し、國恩を報せんと言はしむるに到れり。已に七生の報國を期す、此精神は則ち至誠の心なり。此心を神とし、此心を佛とす、此心即ち天壤無窮の皇祚を翼賛する、五千萬の臣子、忠孝義勇の大道心に非ずや。余は常に軍人と否とを論せず、此事を以て談柄とし、管に戰爭中の後援となすのみに非ず、將來ますます此道を明かにせんと欲する所なり。眞宗に於ては往相廻向、還相廻向の談ありて、信心決定の時已に其心は正定聚不退轉の位に住し、命終れば直に無量壽無量光の佛果に進み、穢國に還り來りて人天を濟度する事は、釋迦牟尼佛の化導の如しと云ふ。此信心の堅固なることは金剛の如しとす、我行精進忍終不悔の佛心即此信心なり、故に死を視ること歸るが如き決定心わらしむ、因て余は信す此を以て武士道を獎勵するに足るべきなりと。

第二 五常の解

- 仁 仁慈博愛 布施施惠
- 義 各自端守 勿犯道禁
- 禮 崇徳興仁 務修禮讓
- 智 一心智慧 轉相教化
- 信 言行忠信 表裏相應

戒常の通局と云ふことあり、不殺生と不偷盜と不邪淫と不妄語と不飲酒とを説きて五戒とすれども、それよりは仁義禮智信の五常の方が一切の人道を盡すが故に暫く不殺生の一戒を以て云へば、此れを以て一切の仁を盡さず、故に戒の方は殺生に局りての戒となる、然るに仁と云へば通じて常に一切の仁に背く所の惡を離れたる善なり、因りて無量壽經の五惡段は、單に殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒に局らず、通じて不仁、不義、不禮、不智、不信を指して五惡と云ひ、仁義禮智信を五善と云ふと申し傳ふるなり、然るに先年人ありて、五常の意義を簡明に言ひ願はせる佛語あらば、一句

又は二句つゝを節録して示せと請ひ來れり、其時咄嗟前記の二句八字を配當して答へ置きたり、固より此外にも種々適切なる語もあるべしと雖も、今先づ仁の字の下に録せし二句を玩味すべし。

仁慈博愛と布施施惠とは一連の語に非ず、仁慈と熟して仁を解するに慈を以てす、慈は愛なり、惠なり、老子は其第六十七章に左の如く言へり。

我有三寶、寶而持之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲、天下先慈故能勇、儉故能廣、不敢爲、天下先故能成器長、今舍慈且勇、舍儉且廣、舍後且先、死矣、夫慈以戰則勝、以守則固、天將救之、以慈衛之。

之を訓讀すれば「我れに三つの寶あり、寶として之を持つ（此一句は、持ちて之を寶とすとあると、持ちて之を保つとあるとの異本あり）、一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先きとならず、慈なるが故に能く勇、儉なるが故に能く廣し、敢て天下の先きとならざるが故に能く成器（人民と云ふが如し）の長たり、今慈をすて、まさか勇ならんとし、儉をすて、まさか廣からんとし、後たることをすて、まさか先んせんとすれば死せん、それ慈、以て戰へば則ち勝ち、以て守れば則ち固し、天即ち天理ま

さに之を救はんとす、慈を以て之をまもればなり」となる。此老子の七十四字は、實に玩索する程其妙味を覺ゆるなり。此中の慈故能勇の四字は仁者は必ず勇あり、勇者は必ずしも仁あらずと、論語憲問篇に出づる孔子の語とも對照すべく、又無量壽經に佛の殊勝の實行を説く中に、左の語あり。

無有虛偽諂曲之心、和顏愛語、先意承問、勇猛精進、志願無倦、專求清白之法、以惠利羣生。

之を訓讀すれば「うそいつはりへつらひまがれる心あることなし、和らかな顔と愛すべき語をもちて、こゝろに先きだちて承け問ひ、勇猛精進にして、志願倦むことなし、専ら清白の法を求めて、以て羣生を惠み利したまひき」となる。慈母の愛子に於けるも全く此語の如し、母の嬰兒を養育するに當りて、一點の虛偽諂曲心なく、唯和顏愛語あるのみにして、先意承問の一句は、大學の「赤子を保んずるが如し、心誠に之を求めば、中らずと雖も遠からず、未だ子を養ふことを學び而して後に嫁ぐ者あらず」とある一節を以て解釋すべし。即ち嬰兒の啼泣に對しては哺乳懷抱して、子の爲めにを忘れ、安眠休息をも忘れて、生長せしむる所の慈愛の情は、誰か之を忘却する

に忍びんや、宜なるかな大舜は五十にして父母を慕ふこと、以上仁慈の二字に就て感ずる所を述ぶるなり。

次に博愛の二字は、韓愈も原道の始めに「博愛これを仁といふ」と云へり、今此仁慈博愛の語ある無量壽經は、後漢と西晋との中間にありし三國の時、曹魏の嘉平四年壬申(神功皇后攝政五十二年、西曆二百五十二年)に天竺の康僧鎧の譯せしものにして、原道の作者韓愈は唐の代宗大曆三年戊申(孝謙天皇神護景雲二年、西曆七百六十八年)に生れて、穆宗長慶四年甲辰(淳和天皇天長元年、西曆八百二十四年)に死せしことなれば、無量壽經の翻譯よりは、凡そ五百七十年の後に死せしを以て見れば、或は佛經に此語あるを知りしには非ざるか、若し知らずとせば、暗合と謂ふべきなり。博愛の二字は宗教即ち道德の大用にして、其全體は即ち仁慈なり。

其次に布施惠の一句を附加す。此は恩惠を布施すると云ふも可なり、恩は惠なり、澤なり、愛なり、即ちめぐむ、うるほす、いつくしむ、あはれむ等の訓あり。此恩惠、恩澤、恩愛を博く他人に布施することは、固より容易の業に非ず、然れども仁は二に从ひ人に从ふ文字にして、其一人を自身とすれば、其他を總括して他の一人とすべし、然る

時は古人の謂ふ所の己れを恕するの心を以て人を恕し、人を責むるの心を以て己れを責めて、過ちを寡なくし、交りを全ふことを得べしと思ふなり。孔子曰く「仁遠からんや、吾れ仁を欲すれば、こゝに仁至る」と、又仁は人の安宅なり」とは孟子の語なり、况んや佛の金言に仁慈博愛、布施惠の語あるに於てをや。

次に義の下には、各自端守と勿犯道禁との二句を録出せり。此二句も一連の語に非ず。先づ各自端守の一句は實に玩味すべき語なり、君臣も父子も夫婦も兄弟も朋友も、面々各々に自分の守るべき事を端正に守るを以て、人事の宜しきを得たる者と謂ふべし。義は宜なり、一言一行も、自らを利し、他を利し、自他を兼ねて利することを修習し、自らを害し、他を害し、自他を兼ねて害することを遠離せざるべからず。無量壽經の異譯たる平等覺經と大阿彌陀經には、此の一句の意を明かにする一段あり、左の如し。

佛言く、若曹(なんぢ)がともがら、まさに善を作すべき者は、云何なるか、第一の急なる、まさに自ら身を端しくすべし、まさに自ら心を端しくすべし、まさに自ら目を端しくすべし、まさに自ら耳を端しくすべし、まさに自ら鼻を端しくすべし。



し、まさに自ら口を端しくすべし、まさに自ら手を端しくすべし、まさに自ら足を端しくすべし、能く自ら檢斂して妄りに動作することなかれ、身心淨潔にして、善と俱に相應し、中外約束して、嗜欲に隨ふこと勿れ、諸惡を犯さず、言色常に和して、身の行ひまさに専らなるべし、行歩坐起動かず、作事所爲、まさに先づつら／＼思慮して之を計るべし、才能を揆度し、圓規を觀瞻し、安定にして徐ろに之を作すべし、事を作すこと倉卒にして、豫めつら／＼之を計らざれば、之を爲すこと諦かならずして、其功夫を亡ふ、敗悔後に在りて、唐苦おほいなる苦み、身を亡ぼす、至誠忠信にして、道を得て絶去すべし。

右の一段は無量壽經には全く缺けて、類似の文をも見ず、各自に端守すべき道を、日用の行事に就て訓誡したまふことは佛説尸迦羅越六方禮經の如き、最も其詳かなるものなり、即ち東方は父子、南方は師弟、西方は夫婦、北方は親屬朋友、下方は主従、上方は法教師と信徒との關係に就て、法教師には六ヶ條、其外は皆五ヶ條つゝの訓言あり、之を以て父母は子を責め、子は父母を責むるの具と爲すべからず、各自に父母に對する時の心得、子女に對する時の心得として、之を守るべきなり、此れは大學の

語を以ても、其意を得べきなり、左の如し。

詩に云く、穆々たる文王、おゝ緝熙にして敬して止まると、人の君としては仁に止まり、人の臣としては敬に止まり、人の子としては孝に止まり、人の父としては慈に止まり、國人と交はりては信に止まる。

明の智旭の四書藕益解の大學直指に之を解釋して曰く、

文王は一人のみ、臣下に對するときは名けて君とし、商紂に對するときは名けて臣とす、王季に對するときは名けて子とし、武周、武王と周公に對するときは名けて父とす、見るべし、身は是れ本にして、對する所は皆末なり、明德は一理のみ、臣下に對するときは名けて仁とし、君上に對するときは名けて敬とし、父母に對するときは名けて孝とし、子孫に對するときは名けて慈とし、國人に對する時は名けて信とす、見るべし、其極を用ゐざる所なし、二の極なければなり、極は即ち至善、至善は即ち明德の本體なり、此れは文王自謙の處、中に誠あれば外に形はるゝ處、皆格物致知以て其意を誠にするに由るが故に、能く此くの如し、故に各自に正しく其分を守りて、道の禁制を犯すこと無くんば、即ち好し、佛道の禁

とは何んぞ一言にして之を言はば、諸惡莫作なり、苟くも斯語を服膺して、義理に違はざる様に注意すべし。

第三禮の下に、無量壽經の崇徳興仁、務修禮讓の二句を録出せり。此二句は仁と義との下に録せし、仁慈博愛と布施施惠、各自端守と勿犯道禁の集句とは、其撰を異にして、却て智と信との下に録せし、一心智慧、轉相教化と、言行忠信、表裏相應とに同じく、二句八字は一連の佛語なり。尙ほ此二句の前に最も服膺すべき九句三十六字あり、因りて前後の十一句四十四字を録出し、且つ之を延べ書きして、其文意を辯すべし。

佛所遊履、國邑丘聚、靡不蒙化、天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國豐民安、兵戈無用、崇徳興仁、務修禮讓。

佛の遊び履み給ふ所は、國も邑も丘も聚も、化を蒙むらざるはなし、天が下は和らぎ順ひ、日も月も清く明かに、風も雨も時を以てし、災ひも厲ひも起らず、國は豊かに民は安く、兵も戈も用ゐるとなく、徳を崇め仁を興し、務めて禮讓を修むと訓讀すべきなり。即ち心地觀經に、若し此經典所在のところは、即ち佛ましますこととす、とあれば、今此五常の下に録出せし佛語を體讀體認して、眞實に之を實踐躬

行する者あらば、それこそ佛の遊び履む所なり。故に一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興る道理なるが故に、一國も一邑一丘陵の上に居る者も一聚落の者に到るまでも、其徳化を蒙らぬものはなしと、佛教の化益の著るしきことを總論して、それより微細に其化益の條目を擧げてあるのが、天下和順以下の八句なり。其第一句の天が下和らぎ順ふとあるを、漢と吳との二譯、即ち平等覺經と大阿彌陀經とは、天下太平と譯出せり、平和にして從順なれば太平なること知るべし。第二句の日も月も清く明かとあるを、漢吳の二譯には、日月運照倍益明好と譯出せり、日月の運照ます、明かにして好しとなり、天下の人心常に和順なれば、心中にやましき所なきが故に、清淨潔白なることは青天白日の如く、磊々落々たることは光風霽月の如くなるべし。第三句の風も雨も時を以てしとは、漢吳の二譯には、風雨時節ありとありて、五風十雨と云ふが如く、五日に一風、十日に一雨と、たとひ實地には其通りに行かずとも、君子の徳は風、小人の徳は草、草之れに風を加ふれば必ず偃すとある、論語顔淵篇の孔子の語の如く、又大旱の雲霓を望むが若く、時雨の降るが若しと、孟子梁惠王篇にあるが如くなる時は、精神界の氣候順當なるが故に、謂はゆる

共業の所感として、大風の家屋を覆へすことや、大雨より洪水となること少なくなる道理なり、第四句の災ひも厲ひも起らずと、第五句の國豊かに民安しとは、漢吳の二譯には人民安寧にして、強は弱を凌がず各其所を得て、惡歳疾疫なく、病瘦者なしとあり、實に衣食足りて禮節を知ることなれば、禮の用は和を貴しとするともありて、君臣上下苟くも和順なれば、此等の好結果を見るべく、同心協力して、國家はますます豊かに、人民はいよいよ、安慰の道を得るなり、第六句の兵も戈も用ゐることなくとは、漢吳の二譯には、兵革起らず、國に盜賊なく、怨吳には冤枉あることなく、拘はり閉ざさるゝ者あることなしとあり。

第七八の二句は、徳を崇め仁を興し、務めて禮讓を修むとあり、漢吳の二譯には、君臣人民歡喜(吳には喜踊)せざるることなし、忠慈至誠にして、各自ら端しく守り、皆自然に(吳には然の字なし)國を守り、雍和孝順にして、歡喜せざるることなし、有無相與へ、恩を布き徳を施こし、心に歡びて與ふることを樂み、皆相(吳に相の字なし)敬愛し、財を推し(吳に財の字なし)義を讓り、先きに(吳に於先の二字なし)謙讓(吳に謙遜に作る)し、前後禮を以て敬事し、父の如く子の如く、兄の如く弟の如く、仁賢ならざることなく、和順

禮節、都べて違ひ諍ふことなく、快善極りなしとあり、漢吳二譯の梵本は魏譯のとは大に異なる所ありしことを察知すべし、唐宋二譯には悲化段の全分を闕くことは、今時傳ふる所の大經の梵本と同一なること、常に説くが如し。

徳の字の訓を擧ぐれば、實に下の如し。一には福也、二には升也、三には惠也(以上玉篇)。四には恩也、五には又徳は得也、自ら生じて天に得るの徳あり、躬に行ふて心に得るの徳あり、説文に升也、徐が曰く、内ち心に得るを徳と曰ふ、升り聞ふるを徳と曰ふ、又諡法に、士民を綏んじ柔かにするを徳と曰ふ、諫争して威あらざるを徳と曰ふ、義を執り善を揚るを徳と曰ふ、又州の名(以上字彙)、六には功也、周語に大徳を建つと云ふ、七には猶利(むさぼる)のごとき也、又(周語に)下も地徳に非ずと云ふ、八には猶教のごとき也、又禮の内則の注に爾か云ふ、又四時の旺氣也(以上小補韻會)、以上の訓釋を包含して、一言に徳の意義を解釋せば、性修の二徳ありと雖も、金錢を以て買ふことも、腕力を以て奪ふことも、共に不可能なる、其人の價値にして、之を尊崇して、仁慈博愛の心を興起し、禮讓を實修することを務むるは五常の第三たる禮の教旨なるべし、論語里仁爲美に孔子の語あり、曰く、能く禮讓を以て國をおさめば何かあらん、能く禮

讓を以て國をおさめずんば禮をいかん。朱註に曰く、讓は禮の實なり、何か有らんとは難からざるを言ふなり、言ふことゝは、禮の實ありて以て國をおさめば則ち何の難きことかこれあらん、然らざれば則ち其禮文具はると雖も、亦且つ之をいかんともすることなし、而るを况んや、國をおさむるに於てをや、此意を推せば、一身を脩むるも、一家を齊ふるも、其本は誠意正心なるときは、華嚴經の信は道の元、功德の母たりとの語をも併せ考へて、眞實無妄に禮の實たる謙讓の徳を修養すべきなり。第四智の下には、一心智慧轉相教化の二句を録出せり。此は無量壽經の下卷に他方の佛國に比して善を勧めたまふ佛語の中の第一段に、先づ此の土の善を勧めたまふ文は左の如し。

汝等於是廣植徳本、布施惠、勿犯道禁、忍辱精進、一心智慧轉相教化、爲徳立善、正心正意。

汝等こゝに於て、廣く徳本を植え、恩を布き惠を施し、道の禁を犯すなかれ、忍辱精進にして、心を一にして智慧ありて、うたゝ相教化し、徳を爲し善を立て、心を正し、し意を正しくせよ。

と訓讀すべきなり、此中の第三句を仁の下に、第四句を義の下に録出し、今は第六第七の二句なり、先づ初に廣く徳本を植えよとは廣く善事を行へとのこと、其次の四句は、分明に六波羅蜜多、即ち六度を勧めたまふことゝ見らるゝなり、因りて恩を布き惠みを施せとは、檀那波羅蜜多、即ち施度にして、布施の行なり、今日の慈善の事業に當る、道の禁を犯すなかれとは、尸羅波羅蜜多、即ち戒度にして、持戒の行なり、今日の修身に當る、忍辱は、瞋提波羅蜜多、即ち忍度にして、忍辱の行なり、今日の忍耐に當る、精進は、毗梨耶波羅蜜多、即ち進度にして、精進の行なり、今日の勉強に當る、一心とは、禪那波羅蜜多、即ち禪度にして、禪定、又は靜慮の行なり、今日の沈思に當る、智慧は、般若波羅蜜多、即ち智度にして、智慧の行なり、今日の知識に當るが故に、前の五、即ち慈善と修身と忍耐と勉強と沈思との五を道徳を開きたるものと云ふことを得べし、一心にして智慧あらば、展轉して相互に教化せねばならぬ、此れが智の能なり、教化の二字は、自信教人信と自行化他の二語の中にも用ゐられてあり、此に由りて徳を爲し善を立て、心意を端正にせよと勧めたまふ、若し能く是の如くならざれば、正智に非ず、邪智なり、方今智育は進歩するも、徳育之に伴なはざれば、往々教育ある

者にして詐偽等の罪惡を犯す者あるに到る、實に慨歎の至りなり、其邪智放逸の情態を示されたるは、左の如き、適切なる佛語あり。

父母の恩を惟はず、師友の義を存せず、心常に惡を念ひ、口常に惡を言ひ、身常に惡を行ひ、曾て一の善もなし、先聖諸佛の經法を信せず、道を行じて度世(即ち轉迷開悟の益)を得べきことを信せず、死後に神明更に生ずることを信せず、善を作して善を得、惡を爲して惡を得ることを信せず。

右は知恩報徳是れ正道と云ふことを知らずして、不孝不義の舉動を敢てし、身口意の三業皆惡ばかりにして、未だ曾て一の善念も善言も善行も無く、唯不信懷疑にして、空論高談自ら欺き人を欺くが如き者の心事を寫し出して、掌を視るが如き感あらしむる經文なり、邪智の言語に發動する者を、妄語、綺語、惡口、兩舌とす、行誡上人全集下編に「口のいましめ」の文あり、其全文を録して、上人の遺誠を服膺せんとす。

口は物申すためにつきたる道具なれば、たれもよくものは申すなり、ばいのよめ叱るも口なり、小供のわやく申すも口なり、萬歳才藏のおかしげなることいふも口なり、ものまね、こわ色みな口なり、淨るり、歌謠も口にて云ふ、豆藏はなし

家、軍書、講釋みな口をはなるゝものなし、音聲五音に乗じてものいふ、善きこと、あしきこと、正しき事、よこさまなる事、らちもなき無駄言まで、皆この口より出づるなり、されば同じ口をさくなら、よき口をさくべし、あしきにくまれ口をさくべからず、善きことを申せば人のためとなり、世の爲めとなる、あしき口をたかけば人に惡まれ、世にしかる、恐るべきは口の位なり、むかし人の申せしをきけば、四百四病は口より入る、百千の過失は口より出づると申すは、さまゝのくふものは皆口をわてに入れるなり、あまりゝゝにいぢきたなをやれば、腹を損じ、臟腑をいたむ、食物は口にて加減すべし、口あればとて矢鱈に食ふべからず、ものいふことも口にかげんすべし、口あればとてやたらにしやべるべからず、けふは此にて御談義はやめ、南無阿彌陀佛、古人の句に、

○物いへば口ひる寒し秋の風

第五信の下には、言行忠信、表裏相應の二句を録出せり、此も無量壽經の下巻に出でたる佛語にして、現在一世の行を勧めたまふ一段の經文は左の如し。

宜自決斷、端身正行、益作諸善、修己潔體、洗除心垢、言行忠信、表裏相應、人能自度、轉

相拯濟精明求願積累善本。

宜しく自ら決断して、身を端しくし行ひを正しくして、ますますの善を作し、己れを修め體を潔くし、心の垢を洗ひ除き、言行忠信にして、表裏相應じ、人能く自ら度して、うたゝ相拯濟し、精明に求願して、善本を積累すべし。

と訓讀するなり。此一段の中、第一句は次の十句に冠して其綱領を擧げたるものにして、次の十句は其條目とも見るべきなり。周易の繫辭にも、「以て天下の疑を断す」とありて、断は決なり、安心決定と云ふが如く、雜阿含經第四十五卷には、「此思惟を作し已りて決定の智生ず」とも説かれて、自ら己れが分を思量して決断の上より、身を端正にし、行ひを正肅にして、いよ／＼ますます善事を作すとを務め、己れを修めよとは修身にして、體を潔くせよとは廉潔にして汗れたる行ひを爲さぬことなり、かくの如くにして心の垢を洗ひ除けとのたまふ、無量壽經の上卷には左の如き文あり。

其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。

それ衆生ありて、この光に遇はんものは、三の垢消滅し、身も意も柔軟にして、歡喜踊躍し、善心こゝに生せん。

と訓讀し得べし。光明智相とありて、光明は智慧の相なりとあれば、眞實に佛光の照護を得たらんには、貪慾も瞋恚も愚癡も、此等の三の垢は消滅し、身の行ひも意思までも、圭角が取れて圓滿の域に達するを、身意柔軟と云ふ。そこで歡喜踊躍とよろこびいさんで、善心の生ずるまでが聞法の利益なり。三毒の煩惱と常に喩へたるものを今は三垢と喩へてあり。此の心の垢を洗ひ除くに用ふべき石鹼と喩ふべきが、言行忠信、表裏相應の二句なり。明治二十三年余始めて北海道に到りし時、到る處毎に此石鹼を使用すべきことを勸めて、演説々教法話を試みしに、數年の後、再び該地に赴きし時、富豪の人々集まりて、余に謂て曰く、先年の石鹼は已に消費し盡せり、更に新しきものを與へよと、其時余は答へて曰く、言行忠信、表裏相應の八字の石鹼は、千萬年を経て、千萬人に使用さるゝとも、消費し盡くさるべきものに非ず、眞に不生不滅、不増不減なる金言なりとて、復た繰り返し演説を始めし事を記憶す。孔子も子張の行はれんことを問ひしに答へて、「言、忠信、行、篤敬、ならば、蠻貊の邦と雖も行はれん、言、忠信ならず、行、篤敬ならずんば、州里と雖も行はれんや」と云はれたり。言行は人の耳目に視聽さるゝが故に表なり、心中の幾微の未だ言動に發せざるは裏なり。

中庸にも言はずや、喜怒哀樂の未だ發せざるこれを中といふ、發して皆節にあたるこれを和といふ、中は天下の大本なり、和は天下の達道なり、中和を致して、天地位し、萬物育すと旨い哉斯の語、人能く自ら度するとは、自利なり、自行なり、自信なり、うたた相拯濟すくひすくふするとは、利他なり、化他なり、教人信なり、自利々他、自行化他、自信教人信、苟くも此語意を實行せんとする者ならば、未だ學びずといふと雖も、余は子夏と同じく之を學びたる人と謂はんとす、今の時も此實行者は、蓋しこれわらんも、余は孔子と同じく不幸にして我れ未だ之を見ずの歎あるを免かれざるなり、因りて精一分明に欲求欲願して、佛意に契當する様に、一言一行も不忠不信に傾かざることに注意して、日夜に此語を事とすれば、自然に善本を積累して、大なる過ちなきに近かるべし。

### 第三 水能く石を穿つ

明治四十年二月十五日の夜釋尊入滅の昔を懐ひ、謹んで佛遺教經を讀み、左の一段を録出して有縁の人を警覺せんとす。

汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則ち事として難きものなし、このゆゑに汝等まさに勤めて精進すべし、譬へば小水の常に流れば、則ち能く石を穿つが如し、若し行者の心しばし懈たり、廢すれば、譬へば燈を鑽るに未だ熱せずして息めば、火を得んと欲すと雖も、火得べきこと難きが如し、是を精進と名づく、此は佛が弟子に對して、精進勉強の功徳を説きて、懈怠懶惰を誡めたまふ文なり、比丘とは、梵語にして、男の出家したる者のこと、勤めて精進すれば、事として難きものなしとは、例の精神一たび到らば何事か成らざらんとある朱子の語と同意なり、因りて予は明治九年の七月に、英國に留學の途中、紅海と地中海との中間の蘇士の渾河を通過して、左の七言絶句を賦したり。

精神一到事皆成、  
無水之間舟可行、  
二十餘年疏鑿業、  
盡從烈氏寸心生、

佛蘭西人レセツプ氏の計畫に依りて、二十年間もかゝりて、遂に水の無かりし處に疏水工事の出來たるは、全く此人の方寸の決心より成就して、今は廣大なる舟も通過する様になりたる者なり、京都と大津との間の疏水工事も同じことにして、中々

反對者もありたれども、關係者の精神の決擇一つにて出來上がりたりしなり。されば汝等は勤めて精進せよと勸めて、其壁に小さき流れの水にても、夜も晝も常に流れ居れば、遂に石を穿つが如しと、穿つとは穴をあけること、大谷派の講師五乘院實景と云ふ學者の歌に、

石を射る矢にはあらねど窪めるは

年をふる家の軒の玉水

此れは支那に昔し李廣と云ふ人ありて、其父親が山の中にて虎に噛み殺されたるより、弓矢を以て山中を見廻はり居るに、遙か向ふに虎が見へたる故、矢を放ちたれば、誤らずに中りたり、それ故かけより見れば、虎に能く似た石にてありき、これ李廣の孝心が貫徹して、其石に矢が没したりとありて、貫徹したりと云ふ古事なり、それを今歌の中に讀み込みて、其様なる石を射る矢にては無きが、やはり石に窪みのあるのは、全く久しき年月を経歷したる古き家の軒下の石なれば、雨の降る毎に、玉水とて屋根から落つる雨垂の水が、いつも同じ處に落ちるより、遂に窪みが出來るなりと云ふ歌の意なり、此を勸學の歌とすれば、一日に一字學べば三百六十字云々と

童子教にもある如く、又

怠たらず行けば千里のはても見ん

牛の歩みのよしおそくとも、

とある徳川家康公の歌をも思ひ合はせて見るべきなり。又蓮如上人御一代記開書には左の御法語あり、

一、いたりてかたきは石なり、至てやはらかなるは水なり、水よく石を穿つ、心源もし徹しなば菩提の覺道何事か成せざらんといへる古詞あり、いかに不信なりとも聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候間信をうべきなり、只佛法は聽聞にきはまることなりと云云。

第一條に就いて品川の正徳寺の前々住職南園老師の法語に、

堅き頂上は石なり、やはらかき頂上は水なれども、雷下の石は水のため、穴があくではないか、世の中の學者になるも、金持になるも、此方の心組次第や、まして聞かせたいが如來聖人の御胸一杯なれば、聽く氣にさへなれば、如何に愚なる者にて、信心の得られぬ筈は無きぞと仰せらるゝなり、



## 第三 水能く石を穿つ

とあり、然るにもしも行者の心に懈怠ありて、遣りかけたる事を中止して廢業するならば、丁度燧を鑽りて火を求むるに、未だ熱せざるに息むれば、火を得んとするも、火を得ること難きが如しと譬へて、懈怠を誡めたまふ。此の教に順ひ、誠めを守りて、勉強するは即ち精進なりと、經文に之を結べり。

元亨釋書に釋の明證の傳あり、先年友人中山理賢氏は佛門立志編を編輯して左の如く之を紹介せり。

明證は何の處の人たるを知らず、十歳にして出家し、元興寺に入り、法相宗を修學す、性魯鈍にして玄理に通曉すること能はず、心頗る退屈を生ず、一日竊かに寺を出で去らんとす、たま〜雨大いに至る、證之を樓廡の下に避け、蒼滴の階に滴り、階石爲めに凹處を生ずるを熟視して、乃ち猛然として自ら省みて曰く、水の至輒なるも、落ち去り落ち來りて休まざることを多年なれば、能く至堅の石を穿つ此の如し、余昏愚と雖も能く勤苦精進ならば、學何んぞ成就せざらんやと、乃ち房に還りて所業を勵み、夙夜懈らず、爲めに寢食を減するに至る、此れより學大に進み、名を南都に輝かし、貞觀六年僧都に任せらるゝと云ふ。

理賢曰く、世の修學の子弟を見るに、利根の者は、其才を頼みて勤めず、鈍根の輩は、退屈して之を廢す、何んぞ誤れるの甚しきや、若し夫れ利根にして而も勉めば、此れ所謂虎に翼するものなり、他の鈍根者と雖も、能く勤めて惰らずんば、却りて利根にして惰りて勤めざる者に勝るや、明かなり、韓愈曰く、業は勤むるに精ふして嬉しむに荒ひと、上人即ち其人なり。

## 第四 因縁和合

馬鳴菩薩の大乗起信論に四種の方便を略説する第一を行根本方便と云ふ、之を解する文に云く、一切の法は自性は無生なりと觀じ、妄見を離れて生死に住せず、一切の法は因縁和合して業果失せずと觀じて、大悲を起し諸の福徳を修し、衆生を攝化して、涅槃に住せざるを謂ふ、法性は無住なるに隨順するが故に」と云へり、華嚴宗の祖師たりし唐の賢首大師法藏の疏に、「生死に住せざるは智なり、涅槃に住せざるは悲なり」と解せり、悲智雙行して自利利他圓滿し、自覺覺他覺行窮滿の域に達したるを佛陀と云ふ、單に覺者と譯すれども、固より自他窮滿の三義を含藏するが故に、單

ろ多合の故に翻せずと云ふ玄奘の五種不翻の例に云ふが如くに、梵音を存して佛陀と云ひ、略して佛と云ふなり。嘗て試みに竊かに大學の三綱領を取り來りて、佛陀の三義に配當し、佛教初入門の人々に示せしことあり、明德を明かにするは自覺なり、民を新たにするは覺他なり、至善に止まるとは覺行窮滿なり。蓋し至善に止まらざれば自身の虚靈不昧なる性具の明德を明かにすること能はず、自身の明德を明かにせずして他人の各自の明德を明新ならしむること能はざるは勿論なり。此れは唯一往の配當なりと雖も、佛陀の二利圓滿の妙境界は極善最上の法を自得したるものにして、至善の極處に止住する者として、自覺々他を明々徳と新民とに合せて熟考すれば思ひ半に過ぐるに過ぎることあるべきなり。但し前に引きたる起信論は大乘の法門を聞きて信を起したる菩薩の發心の相を示す文章中の一節なり。菩薩は具さには菩提薩埵と云ふ、梵音を寫したる文字なり。譯して覺有情と云ふ、即ち覺に志す有情と云ふことなり。唐以前の舊譯には大道心衆生と譯す、此大の字は常に菩薩摩訶薩と云ふ時の摩訶薩埵を大士とも大有情とも譯するが故に、菩薩の譯語の道衆生と、摩訶薩の譯語の大心衆生とを合せたるものなるべし。菩薩に種々の階級あり、

今一字一句にても大乘の法門を或は讀み或は聞く者も、其身の位置に貴賤と貧富と智愚と賢不肖と長幼と男女との如き區別あるに關せず、其心は一分已に菩薩の位に入りたる者と謂ふべき歟。語に曰く、心焉に在らざれば、視て而して見へず、聽きて而して聞へず、食ふて而して其味を知らずと云へり、無形の心菩薩地に入りて、而して後に有形の身體亦其言行を忠信にすることを得て、表裏相應したる道徳者となることを得べきなり。故に今讀者と共に因縁和合の四字に就て研究し得べき道理を説明して、何事にも應用し、切々儆々として積善の道を盡さんと欲す。諸友幸に其言の淺近と其文の蕪雜とを恕し、鄙意の在る所を洞察して、實踐躬行せば、必ず魚を得て筌を忘るゝの樂地に達すべし。

〔因縁和合して業果失せず〕とは、一切の事物の有様なり、此道理を會得して其の位に素して行ふ者を君子とすべし。是を大悲を起して諸の福德を修し、衆生を攝化して涅槃に住せざる大悲の行者、即ち慈善者とするなり。吾人未だ全く妄見を離れて生死に住せずと云ふが如き頓悟の位地にも達せずして、反て此等の事業に従ふ者は、甚だ其分を知らざるが如しと雖も、之を能くすと謂ふには非ず。願はくは之を學ば

因縁の因は果に對するの言にして、原因結果の道理なり、此因果の道理を説明するに付きて、三世因果と云ふ名目出で來れり、即ち法苑珠林卷七十の十三枚に云く、經に言く、過去の因を知らんと欲せば、當さに現在の果を觀るべし、未來の果を知らんと欲せば、當さに現在の因を觀るべしと、又法苑珠林九十一卷にも此經文を引きて前の觀の字を看に作れり、大藏一覽卷五の卅一枚に云く、但今果を推して前因を立て、復た前因を以て今果を明すと、又同卷の卅四枚に、偈に云く、前世の事を知らんと欲せば、今生に受けたる者はなり、未來の因を知らんと要せば、今生に作せる者はなりとあり、縮刷大藏經霜帙第十冊にある日蓮上人の開目鈔下卷には、心地觀經云、欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因とあり、此經語を熟讀玩味すべきなり、抑因果應報の道理は佛陀の證明する所にして、古往今來不增不減なり、故に善因善果惡因惡果の別あり、因に業因の熟語ありて、果に果報の熟語あるなり、即ち法華經の方便品には、先世善惡業の句あり、廣百論釋論には、先づ能く善惡の二業を造作して、後に能く苦樂の兩果を領受すと云ひ、大乘義章には、行は無量なりと雖も、要は唯

善と惡となり、善惡の二業は能く報を得るが故に、無記は報なし是故に説かずとあり、善惡の記別すべきことなきものを無記と云ふ、善惡を有記とするなり、又瓔珞本業經には、是故に善果は善因より生じ、惡果は惡因より生ずとあるは、善因善果惡因惡果の語の本據と謂ふべきなり、過去と現在と未來との三世を以て、遠く生前と死後と此身の一世とに配當して、因果を撥無するの邪見者多し、然れども時無別體依法而立と云ふて、時と稱すべき別體のものなし、唯他の事物に依て時の區別を立つるなり、猶釋尊一代の内にては、三十成道の日より八十八滅の夜までを轉法輪の時とするは説法と云ふ一事に依て立てたる時の區別なり、又一々の經の初めに一時とあるは、華嚴經なれば三七日間なり、阿含經は十二年間なり、方等經は八年間なり、般若經は二十二年間なり、法華經は八年間なり、涅槃經は一晝夜なりと云ふが如し、其中を細分すれば、正しく一經の説時に局りて一時と云ふが故に、年月日時分秒の一々をも一時と云ふことを得べきは、何の時何の處を問はず同一なり、然れども過未無體現在有體と云ふ名目ありて、過去と未來とは現在の活動なし、活動なきが故に過去と云ひ未來と云ふべき時なしと云ふが如きは、不條理なる言論なり、邪見者

自ら沈思熟考すとも、能く其生れ出でたりし年月日時を記憶し得るや、恐くは能はざるべし。若し然れば如何してか其生年月日を戸籍に明記し得るや、他なし、父母兄弟等の年長者の言を信じて疑はざればなり。若し我が生日は已に過ぎ去りたり、而して我能く之を記憶せず、但し此の如き日に生れたるに非るべしと云ふ者あらんに、然れば汝の生日は果たして何れの年月日なりしやと問はんに、同じく之を記憶せずと云ふなるべし。我偶記憶せずと雖も、人能く之を記憶せば、如何んしてか過去の時を抹殺することを得べけんや。嘗に生れたる日時のみならず、二三歳或は四五歳の幼時も、成長の後に一々之を記憶する者ありや、恐くは全く無しと云ふことを得べきなり。故に此等の時の關係を觀察するにも、近きより遠きに及ぼせば其惑を解き得ることは容易なり。是の如く吾人は現在の結果を觀察して過去の原因を推知し、又現在の原因を觀察して未來の結果を前知し得るなり、而して現在結び得たる果報不幸にして其意に適せざれば、其之を致せし原因を案じて之を再びせざることに注意し、且つ現在の思想行爲に就きても反省沈思して其道に非ざるを知れば、其果を結ばざる前に於て速かに其根源を斷絶することを勉めば、天をも怨み

ず、人をも尤めず、心廣く體胖かなる誠意の君子と謂ふべきなり。是れ固より一朝一夕にして達し得べき地位に非ず、造次顛沛行住坐臥、心を此に用ゐ、善を擇んで固く之を執る者にして之を能くすべきなり。

吾人は已に昨日のありしこと、今日の現に在ることを知るが故に、明日のあるべきことを知るに非ずや、之を推して生前の生ありしこと、今生の在ることを知り、亦以て死後の生あるべきことを推知し、死に臨んで狼狽周章せず、安心立命の域に住して、始終を全くせざるべからず。折角今日までも幸ひに生存せしなれば、明日も來月も來年も無事に健康を保ちて生存せんと欲するは固より吾人の好む所なり。然るに飲食を節せず、起居を慎まず、身心を過勞するが如きことあらんには、其不時の夭折或は疾病の果を感ずることは明かなり、之に反して適度の生活を以て身心を保持する時は、羸弱滯柳の質なりし身體も無病健全となり、却て長壽を得ることありとは、曾て八十六歳にして歿せられたる香山院龍温老師の書して某氏に與へられたる、少言少欲少勞心云々の訓言に準じて考ふるも尤も明白なり。近來世人皆理論に長じて因果の理法を辨ずることは間然する所なしと雖も、其實行に到りて

は或は言行相違の例なきに非ず此の如くば寧ろ黙するに如かずと思ひたることも屢なりしなれども今や尤に做ふの擧に及び此記をなしたり因縁和合の四字の中に於て因は果に對すと云ふよりして因果の理法を辯せしなり

因あれば果あるは無論なれども因を助けて果を得しむるの縁なかるべからず因縁ありて果を感ずるに到りても和合せざれば其好結果を見ることは出来ぬものなり此縁と云ふにも俱舍論等には六因四縁と云ふこともあれども今は左様なる細論に涉らんとには非ず普通の四縁と云ふべきものを擧げて讀者の注意を促さんと欲するなり

因みに起信論の著者を馬鳴と云ふ此は梵名の阿濕縛婆沙と云ふ語意を譯出せしなり即ち阿濕縛は馬なり婆沙は音なり鳴き聲なり大藏經の中に馬鳴菩薩傳一冊あり明藏漆字函第七に在り姚秦の時鳩摩羅什婆の譯せし所なり鳩摩羅は童なり什婆は壽なり即ち譯して童壽と云ひ常には梵名の前後を略して羅什と云ふ唐代の玄奘義淨と對抗すべき舊譯家の巨擘なり其傳は梁の慧皎の高僧傳を始め歴代の藏經目錄に在り馬鳴菩薩傳の終に曰く

〔月氏〕王審かに比丘〔馬鳴〕の高明勝達に導利弘深にして辯才の說法は乃ち非人類をも感ずることを知り將に諸の群惑を悟さんと欲し七匹の馬を餓えしめ六日の旦に至り普く内外の沙門異學を集め比丘に說法を請へり諸の聽くこと有りし者は開悟せざると莫かりき王此馬を衆會の前に繫き草を以て之に與へたりしに馬涙を垂れて法を聽き食を念ふの想無かりき是に於て天下乃ち恒に非ざるを知り馬其音を解せしを以ての故に遂に號して馬鳴菩薩と爲しきと云へり往年某學人某僧に謂て曰く馬鳴は梵音を寫せし文字にして其梵名の正音はマーミンなり故に泰西の學者は常に羅馬字を以て此正音を寫し出だすなり然るに日本の僧徒は之を知らず此二字を讀むに吳音を用ひてメミヤウと云ひ之に加ふるに馬其音を解せし杯と云ふ話を附會するは笑ふべしとて大に某僧を警覺せられたりと云ふ然れども大唐西域記にも馬鳴の梵名を出だして唐譯馬鳴と註し又羅什の譯せし傳文の中には前に擧げしが如き文あれば和漢の佛者の私に附會せし説に非ざること、馬鳴は梵音を寫

したる文字に非ざることは明かなり。然ればマーミンとは此二字の清音又は唐音なり。泰西人の支那に在て漢字を學びし者は固より此音を寫し出だすことは明かなり。故に泰西人は別に之を梵語の正音なりとは謂はざるべし。唯泰西人の謂ふ所は事々物々皆其正を得たりとするの弊或は此に至りたるやも計り難きなり。此は某僧の傳話を聞きし迄なれば誤聞あるやも知れざれども思ひ出だせし儘此に附記して、此等の事をも輕率に人語を信せず、必ず其根原を正して而後に發言すべきことを示すなり。馬鳴は大乗起信論の舊譯家梁の眞諦も、新譯家唐の實叉難陀も同一の譯語を用ゐたり。此菩薩の著書の明藏中に在る者は七部あり、一には事師法五十頌、宋の日稱の譯、二には大莊嚴經論十卷、羅什の譯、三には大乘起信論、梁の眞諦の譯、四には同論、唐の實叉難陀の譯、五には大宗地玄文本論、八卷、陳の眞諦の譯、六には佛所行讚經五卷、北涼の曇無讖の譯、七には十不善業道經、宋の日稱の譯なり。此中梵本を得しは唯一部なり。佛所行讚經是なり。其梵本の寫本は佛蘭西國巴里府の國立圖書館と、英國劍橋大學の圖書館とに、各一部あり。余は明治十四年九月亡友笠原研壽氏と共に獨

逸國伯林府に開きたる萬國東洋學會に列なり。六日間滯留の後、轉じて巴里府に到り、其全文を寫し、英國に歸りて直に劍橋大學の寫本を借り得て校讀し、歸朝の際馬博士の懇望、默止し難く、遂に其儘博士の許に残し來れり。今は梵文も英譯も出版せられてあり。

佛經の初めには六成就と云ふことありて、如是は信成就なり、我聞は聞成就なり、一時は時成就なり、佛は主成就なり、住王舍城耆闍崛山中とか在舍衛國祇樹給孤獨園とかは處成就なり、與大比丘衆萬二千人とか千二百五十人とかは衆成就なり。此中初の信と聞とは暫く閑きて、時と處と主と衆との四成就に就て考ふべきなり。已に所說の法門の因あれば能說の經は何の時と何の處とを擇ばずして說き示さるべきなり。然るに説くべき時の來らざる間は説くべき處あれども説かれず、又説くべき處なければ時あれども説かれざるなり。時と處とは自ら活動するものに非ず、况んや原因を助けて結果を得しむるの助縁たるに適當ならざるものに於てをや。然れども已に説くべきの教主ありて時を得て、亦處をも得たらんには其の利益廣大なり、それすらも說者の教主ありとも、聽聞するところの大衆なければ其の功なし、

大衆ありとも説者なければ其の益なきことは同一なり、此れ固より見易きところの事實なり、故に經の初めに必ず此四縁を並べ擧げて、阿彌陀經を説くべき時あり、説く所の主たる佛あり、説くべき所の處あり、聞く所の衆たる千二百五十人の大比丘等ありと示し、時機純熟の結果は、爾時に佛主は長老たりし舍利弗衆の總代即ち對告衆に告げたまはくと標して、正しく佛の説法の言語を録し、其終りたる所の好結果を經に記して曰く、「佛此經を説きはりたまふに、舍利弗及び諸の比丘、一切世間の天人、阿修羅等、佛の所説を聞き、歡喜信受し禮を作して去りぬ」とあり。

此等はもとより見易きことなれば、雖れも疑はざるべしと雖も、何事にも應用して之を考察するに非ざれば不可なり、時の一大助縁たることを證明すべき一話あり、即ち日本外史の末卷にも出でゝあることなり、元和元年の夏大坂落城の日、徳川家康は其子義直と頼宣とを本陣の後に置けり、故に遂に此日の戦に會すること能はず、頼宣は家康の所に赴き、之を遺憾とする情を陳べられたり、此時本多正信側らにありて、郎君年少前途尙遠し、未だ以て深く憾みとするに足らずと慰めたり、頼宣奮然として曰く、豈復た十四齡あらんやと云へり、此一言は凛然として尙生氣ありと

云ふべきなり、已に主たる味方あり、又敵衆あり、而して身も亦戦地に在りながら、其戦時に會すること能はざる、一縁の缺乏よりして、千秋の後までも歴史上に南龍公十四齡の遺憾を聞くに非ずや、嗚呼時なるかな、時なるかな、時の利用は大なるかな、已に因を助けて果を結ばしむる縁ありとも、和合せざれば因縁純熟に非ざるなり、孟軻氏曰く、「天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかず」と、和合の貴ぶべきは百事皆然りとす。

## 第五 繪に書いた餅

秀存百話の第六十五條に

「九州雲溪云く聖道門の御法は繪に書いた餅の如く、聞いたばかり見たばかりで食せられぬなり」

とあり、余は一往は聖道門の御法はとある次ぎに、我等に取りてはの七字を加へ入れ度く思ふなり、左なくば聖道門の人々の怒りに觸れて、入らざる瞋恚の煩惱を起さしむること無きにしも非ざるべし、併し此雲溪師は眞實に右の通りに思ひ居ら

れたる事なるべし此人は文字に疎き所ありて、或る時本山より何事をか申し達せられたる趣意書を朗讀せんとせられしに、讀み下し難き文字あり、其時師は聊かも狼狽せずして、此の様な六つかしきものは先づこうして置いて、有り難き話を聞かせやうと云て、趣意書は遂に讀まずして法話をせられしに、聽衆は皆満足したとの逸話もあり、其外にも同師に就ての無我なる有様を想像すべき逸話頗る多し、余の幼時郷里に在りし日、年末に當り四隣の餅つきの聲の聞える時に兒童の呼びし聲は、今尙耳底に残れり、即ち隣に餅搗く杵の音、耳へは入るが口へは入らぬと呼びたり、今日の兒童は左様なる鄙しき言語を發する者は無き歟。大垣の餅搗きの音を聞きし最後は明治三年にして、明治四年正月十四日の朝、父母の膝下を辭し、越前の人となりたる故に其後の事は知らざるなり、兎も角も我等に取りては、聖道門自力の教は、隣の餅搗きの音を聞くか、又は繪に書いた餅を見る様にて、此れではとても満腹は出來ざるなり、自ら適當の食物に由りて満腹の出來たる者は、其説明は別段に作る心配は無し、自ら味ひ得たる所を云ふのみ、即ちうまかりた満腹したと、満足の言語が最上の勸め言なり、それも已に好き嫌ひの定まりたる者にはやはり勸める事

の困難もあるべきなれども、未だそれ程に心の定まらざる幼年の子女に對しては、慈母の一言は誰の言語よりも信用せらるゝなり、雲溪師が趣意書を讀まずとも、有り難き話を以て聽衆を満足させたのも、繪に書いた餅は、聞いたばかり、見たばかりで食せられぬ、今は我等の食し得べき菩提の資糧は、唯此の本願名號なりと、辯をも飾らず、聲をも改めず、自得のまゝを述べられたるものならんと思へば、實に其信念の堅固なること、修養の圓熟なることを、隨喜するばかりにして、前には我等に取りてはの七字を加へ入れたかりしも、之はやはり取り消すことを善かるべけれど思ふに至れり。

明治三十九年十二月二十二日發行の中外日報に、面白き話あり、固より他山の石なれども、亦以て我等が無上寶珠の名號を賜はりたる信心の玉の徳をも發揮すべしと思ふが故に、之を左に抄録す。

無盡藏尼は六祖が涅槃經の要所々に就いて妙義を語るに驚いて、何んでも非常の大學者と想つて、經卷を持つて來て、一々質義を始めた處が案外なる哉、妙義を知つて居る六祖は、文字と來ては薩張り明き旨で不得要領じや、



## 第五 繪に書いた餅

其處で尼さんが曰くには、字でさへ識らぬ癖に、ドーして妙義が解りますかと不審半分、輕蔑半分で遣り込んで見ると、六祖の曰くには、諸佛の妙理は文字に關するに非ず、文字なんかは眞理に關係はないぞと喝破した。

此大氣焔を聞いて、無盡藏尼驚いて、以て喫驚仰天、忽ち腰を抜かして仕舞つた。サー茲じや世間の奴等は文字が眞理の様に想つて居る、文字が眞理で經文を誦んで成佛するなら、ホン喰蟲は皆佛になるぞ。

右は禪家の語調である、併し乍ら法然上人(全集三六七頁以下)にも右の如き問答あり、玩味すべきなり。

ある時間ふて曰く(東宗要に勢觀上人の問とあり)智慧のもし往生の要事となるべくは、正直に仰せを蒙むりて修學を營むべし、又唯稱名不足あるべからずば、そのむねを存すべく候、唯今の仰せを如來の金言と存すべく候、答て曰く、往生の業はこれ稱名といふ事釋文分明也、有智無智をさらはずといふことは、また顯然也、然れば往生のためには稱名足りぬとす、學問を好まんと思はんよりは、唯一向念佛して往生をとぐべし、彌陀觀音勢至にあひたてまつらん時、い

## 第六 物語の移住

づれの法文か達せざらん、かのくにの莊嚴、晝夜朝暮に甚深の法門を説く也、但し念佛往生のむねを知らざらん程は、これを學すべし、もしこれを知りなば、いくばくならざる智慧を求めて、稱名のいとまを妨ぐべからず。

ある時間ふていはく、人多く持齋を勸む、この條いかん、答へての給はく、尼法師の作法は、もともしかるべしといへども、當世は機すでに衰へたり、食すでに減じたり、この分際をもて一食せば心ひとへに食事をおもひて念佛しづかならじ、菩提心經にいはく、食菩提をさまたげず、心よく菩提をさまたぐといへり、そのうへは自身をあひはからふべきなりと。

當今は聖道門の法は繪に書いた餅なり、たとひ持齋するとも、心偏へに食事と思ひて念佛靜かならず、況んや他の行業をや、唯須からく己れの分を思量すべし、新年を祝するに餅あり、故に雲溪師の語を紹介して、併せて此語を作る。

に此題の講案一篇あり。即ち西曆千八百七十年(明治三年)六月三日に倫敦の學士院に於て演述せられたりと云ふ。此は世諺や物語の今日歐米の國々に行はれあるものも、其源は印度より流れ來りたるもの多しと云ふ事の一例を示されたるものにて、其流傳の際に其土地の風俗人情に適する様に少々の變化は免かるゝこと能はざるも、其趣向は一貫してかはること無き有様を示す爲めの講義なり。予曾て一二の學校に於て之を談話せしに、學生々徒皆共に面白しと云へり。因て今之を抄譯せんと欲するなり。慧燈大師の法語に、「行くさきむかひばかり見て、足もとを見ねば踏みかぶるべきなり。人の上ばかり見て、我が身の上のことをたしなまずば一大事たるべき」と仰せられ候とあり、拳々服膺すべきなり。此篇の物語を讀む人は、必ず此法語を記憶しおくべきなり。

「雞卵の孵へされぬ前に雞の數を算ふるな」と云ふは、能く人の知る所の諺なり。而して多分は此諺の原因を佛蘭西人ラフォンテン氏の著せし一の面白き物語に歸するものゝ如し。此佛人の物語に依れば、ペルレットと云ふ婦人が、其頭の上に牛乳の桶を載せ、其住みし村より町へ行く途中にて、晝間の夢の中に想ふには、今此牛乳を

高價に賣りて百の雞卵を買ひ、其雞を賣りて一匹の豚を買ひ、之を肥滿させ、又之を賣りて牝牛と犢とを買はんに、其犢は雀躍して其足を蹴上げるならんとて、覺えず其眞似を爲したるに、憐れなるかな桶は頭より落ち、牛乳はこぼれ、其富は全く去れり。唯殘る所は家に歸りたる後に、其夫より受くべき鞭打を免がれんと思ふ願ひのみなりしと云ふ。

此物語はラフォンテン氏の創作なりや、はたソクラテースが晩年に獄中に在りてイソップの物語を詩句に書き出だせし例に倣ひたるには非ざる歟。ラフォンテン氏は千六百六十八年に其著述せし物語六冊を出版せり。此等の冊中の物語は多くイソップ等より取り來れり。千六百七十八年に此六冊を再版し、更に新物語五冊を増加せり。千六百九十四年に到りて又一冊を増加して新版を發行し、此詩人の全集成れり。前に擧げたるペルレットの物語は、千六百七十八年に發行せし詩集の第七冊に於て、始めて世に公けにせられたり。此再版の自序に於て左の如く云へり。此等の新物語の主意を何れより取り來りし歟を説明することは必要に非ず。唯感謝の意味より一言すべきは、此等の新物語の最大多數は印度の聖人ビルバイ氏の

恩を蒙りたることは是なりと。ラフォンテン氏既に爾か云へり、故に吾人は印度の文學の中に於て、牛乳桶を頭に載せしヘルレットを見出し得べき歟の搜索に着手すべき權利を有すること明かなり。抑梵語の文學は甚だ物語と昔話とに富めり。此點に於ては他に匹敵し得べき文學なきなり。特に動物物語の根原は印度に在りと云ふを得べきなり。佛門の聖教の中には、物語は最も著明なる部分を形ち作り、佛門の説教師は公衆に對し、無教育者や、無告の者や、卑賤の者に對して、吾人が今尙小兒に對して話するが如くに、物語や、世諺や、譬喩を用ゐて教化せしなり。但し此等の物語と譬喩との中、多分は佛教以前に現存せしものなるべしと雖も、聽衆を警覺するに必要なる時には、之を増加せしことは疑ふべからざるなり。恰もソクラテースが自身の議論を強からしむる爲に、物語を作り出だせしと同一の事實なるべし。兎も角も佛教は此道德小説と云ふべき文學の一派に、新奇著明なる制裁を與へたるものなり。耶蘇紀元前第三世紀に於て、已に確定せられたる聖教の中に其の所得て、今日に到るまでも其所を失はざる者多し。印度に於て佛教の衰運に傾きし時より、婆羅門教徒は其敵敵たる佛教徒の遺業を要求して、教育の目的を以て佛教中の

有名なる物語を用ゐるに到れり。即ち梵文の物語集の中、最も著るしきものをバンチャタントラと云ふ、直譯すれば五卷書と云ふ書名なり。此書及び其他の書より抜萃せし物語集をヒトーパデーシャと云ふ、友慈勸訓と云ふ程の意なり。此書は一般梵學者の能く知る所の奇書なり。以上の二部は共に英獨兩國に於て出版され、英獨佛其他の國語の翻譯もあることなり。

吾人の第一に答辯すべき疑問は、此等の物語集の年代なり。梵語文學史の中に於て常に難關とする所は此年代なり。然れども幸に五卷書の年代は、上古の波斯語の翻譯の在るに依りて定め得べきなり。此譯は耶蘇紀元後五百五十年頃に成りしものと云ふ、併し乍ら此れとても剋實すれば、今日予が所持の五卷書に類したる一部の物語集が、其時必ず現在せし事と云ふことを得べき而已。今日の書が其の時既に現存せしと云ふことを主張することは出来ぬなり。

梵文書籍の年代の事は、總て本文の如し。故に支那に於て東漢より宋元までに譯せし佛經の同本異譯の多きことも推して知るべきなり。

若し五卷書の梵文物語の中に就て、ラフォンテン氏の物語を搜索すれば、牛乳賣り

の婦人が雞卵の孵へされぬ前に雛を算へし物語は見出さゞれども左の物語に出遇へり。

某の處に一人の婆羅門ありて住めり。名をスヴブハーグクリバナと云ふ。生來の畜畜者と云ふが此名の意なり。乞食して多分の米を集めたり。此は佛教徒の行を思ひ出さしむるなり。食し畢りて残りし米を鉢に盛り、壁の木釘に掛け、臥牀を其下に置き、終夜熱心に其鉢を見て、左の如く思慮せり。嗚乎彼鉢には米は實に盈滿せり。今此處に飢饉あらば、此米を賣りて慥かに百ルピー(五十圓)を得べし。此金を以て牝牡の山羊を買ふべし。此山羊は六ヶ月毎に羊兒を産すべし。因て余は山羊の全群を有すべし。然る時此山羊を以て數頭の牝牛を買ふべし。此牝牛が犢を産むや否や余は其犢を賣るべし。然る時牝牛を以て水牛を買ひ、水牛を以て牝馬を買ふべし。牝馬が駒を産む時は、余は多數の馬を有すべし。此馬を賣る時は多額の金を得べし。此金を以つて四翼ある家を築き得べし。然る時一人の婆羅門、余が家に來り、大なる嫁粧を以て其美麗なる女子を余に妻すべし。此妻は一人の男兒を産むべし。余は其名をソーマシヤルマヌと呼ぶべし。此兒已に生長して父の膝の上に踊り得べき時、余は書物を手にして、庭の後に坐すべし。余が讀書の際、兒は余を見て母の膝より飛び下り、余が膝の上に踊らんとして、余に向て走り、馬蹄に近過るまでに來るべし。余は十分に怒りて、小兒を取れ、彼を取れ」と余が妻に向ひて呼ぶべし。然れども妻は家事に混雜して、余が聲を聞かざるべし。然る時余は起ち上り、余が足を以て此様なる蹴りを彼女に與ふべしと、此を思慮する同時に、其足を以て蹴りしに鉢は破れたり、米は總べて其頭の上に落ち來り、全く其身を白くならしめたり。故に曰く、未來に向いて愚かなる計畫を作す者はソーマシヤルマヌの父の如くに全く白くなるべしと。

次に友慈勸訓に載する物語を出せり。此五卷書の物語と比較して、印度に於て已に二様にせしことを知るべきなり。

余は直に友慈勸訓よりの物語を讀むべし。此物語は少しく改作せられてはあれども、其趣向は同一なり。友慈勸訓は五卷書及び其他の諸書より撰集せし書なりと自白す。而して此物語は五卷書よりは他書に従ひしものなるべし。兎も角も空中に城を築きし人の話を傳説するには如何程の自由の在りし歟を見るべきなり。其物語は左の如し。

デーヴィーコッタ(天女城)と云ふ都府に、デーヴシャルマヌと云ふ婆羅門ありて住めり。大なる時正(春分又は秋分)の祝宴に於て、一皿に満たる米を得たり。彼はそれを取りて、陶器商の店にまで行きたり。其處に陶器は満ちてありし、さて暑氣に打勝たはて、彼は店の隅に横たはり、假寐することを始めたり。其時彼の米の皿を保護すべき爲めに、彼は彼の手に杖を持って、下の如く考へ始めたり。今此皿の米を賣らば、十カウリ(錢貨)に用ゐる貝の名を得べし。然る時に此處に於て壺と皿とを買ふべし。幾度も資本金を倍したる後に、非常に富みたる者となるまで檳榔子と衣服とを賣買すべし。然る時に四人の妻を娶り、其四人の中の最も年少き最も美麗なる者を最愛の者と爲すべし。然る時に他の妻は非常に怒りて争ふことを始むべし。併し乍ら余は大に怒りて杖を執り、彼等に善き答懲を與ふべしと。此を言ひし同時に其杖を投げしに、米の皿は微塵に碎け、店の壺は多く破碎されたり。陶器商は聲を聞きて店にまで走り出で、壺の破れたるを見て、婆羅門に十分の罵言を與へて、店より逐ひ出だせり。故に曰く、未來に向ひての企を喜ぶ者は、壺を碎きし婆羅門の如く悲境に出遇ふべしと。

此の友慈勸訓の物語を前の五卷書の物語と比較すれば、同じく印度の物語に

して、種々の異同あり。第一に婆羅門の名の相違。第二に自家と他家との相違。第三に山羊牛馬と壺皿檳榔子衣服との相違。第四に一妻と四妻との相違。其他前には子の名を挙げ、後には地名を示す等對讀して其相違を知るべし。

婆羅門を絞乳女に變せしにも拘はらず、ラフォンテン氏の物語の原種は此處に在りと云ふことは、誰れも疑ふ者は無かるべしと假り定めらるゝなり。然れども、如何に其物語が印度より佛蘭西までの道路を旅行せし歟、如何にサンスクリットの服を脱して、現今の佛語の輕き服を著せし歟、如何に愚かなる婆羅門が再び急性なる絞乳女として生れし歟。

各國の言語は變化し、技術の製造は消滅し、帝國は興りて復た亡びし同時に、此單一なる小兒の話が生存して、大東の學校と泰西の養育所に於て、其尊敬の位置と、抵抗なき權力を保つことの長壽は、驚くべき事なるべし。然れ共、最も疑心深き者も、敢て之を疑問し得ざるまでに、善く證明されたる長壽なり。此等の話の通過せし處には、余輩はその旅行免狀を有するなり。印度より歐洲に來りし通路の國々に於て、其國

語に譯出せられしを云ふなり。大東より泰西へ此等の印度の物語の移住の話は實に驚くべきなり。此等の物語の多分よりも、一層驚くべく且つ有益なる話あり。珍奇なる種子を廣く世界に播き散らせし如くに、印度の幽閑なる村に於て、一千年ならず、二千年も以前に、説かれたる賢き言語と、佛教徒及び婆羅門教徒より、異教徒及び偶像崇拜者より借りたる書籍より、殆んど世界外の智慧の最も要用なる教訓を、此耶蘇教國に於て、第十九世紀に當りて、吾人は最初に吾人の小兒に教へて、尙ほ神と人との前に最も價ありとする小兒の靈魂なる、其土地に千百倍の果を結ぶと云ふことは、信せらるべき事なりや、立法者も、哲學者も、此等の小兒の爲めの物語の作者の如くに、廣く深く且つ永久に其感化を感せしめし者は無きなり。併し乍ら、彼作者は誰なりしや、吾人は知らざるなり。彼の名は人種の恩人の多分の名の如くに忘れられたり。吾人は唯彼は印度人なりし事と、或人は彼を嘲弄して「黒人と云ふ、而して彼は、少なくとも二千年前に生活せしと云ふ事とを知る而已なり。吾人が始めて此等の物語は印度を本源とせしと、印度より歐羅巴にまで移住せし事を聞く時は、如何に左様にあり能ふ歟を疑はしむるは必定なり。然れども此印度

歐洲移住の話は、印度歐洲の言語や神話や傳説の移住の如くに理論上の事に非ずして、其實は歴史上の事實なり。且つ又大東及び泰西に於て決して全く忘却せられしと云ふ事も無きなり。一々の翻譯者は其寶物たる物語を傳ふるに當りて、如何にして此に出遇ひし歟を示すべき事に注意せし者の如し。印度歐洲の古話と物語との本源と流傳とを取扱ひし種々の著者は、各自の價値に於て別々に取扱ふべき二三の問題を混雜せし者あり。

アールヤン(印度歐洲人種の總稱、高加索種と稱する者是なり)人種が人種學以前の社會を分離せし時に、其普通の文典と辭書との外に、後世の歴史に迄起り來りし印度人と波斯人と希臘人と羅馬人とセミチック人と日耳曼人とスラヴオニツク人とが普通に分有する所の神話と傳説とも各自に持去りし歟と云ふ事が第一の疑問なり。同一の名と同一の性質を有する或る神が印度と希臘と獨逸とに在る事は最早否決すること能はざる也。又印度人と希臘人と羅馬人とに知られたる或勇者也、亦其名と其歴史とに依りて同一の本源を指示し得べき事は、今日にては眞價ある學者の許す所なり。勇者は多分神の變化なるが故に、同一の神を崇敬する國民が

亦半神や勇者のみならず、後世の思想の程度に於ても、變化と幽霊との傳説をも保存せし事は、事實に於て甚だ驚くべき事に非ざるなり。然れども昔話や決定したる道徳上の目的の物語も亦其最も早きアールマン人種の遺産の一分なりし歟と問ふ時は、前の疑問よりは一層未定の疑問となるなり。

此より後に、原書には八頁餘の微細なる議論あれども、今は之を略し、直に西曆紀元後七百五十四年より七十五年までの間に成りしと云ふ亞刺比亞語の翻譯の物語を譯出する事左の如し。

一人の宗教者ありて毎日商人の家より牛酪と蜂蜜とを受け來れり、十分に之を食し了りて、殘る所を壺の中に入れて、部屋の隅の釘にかけ、壺の滿つる様に望み居れり。さて一日杖をその手に持ちて、臥牀の上に凭れてありしに、壺は其頭の上に吊られてありし、其時牛酪と蜂蜜との高價の事を考へて、獨語して曰く、余は壺に在るものを賣りて、其價を以て十匹の山羊を買ふべし。五ヶ月毎に各一匹の羊兒を生むべし。加之羊兒も妊孕に堪ゆるや否や又兒を生むべし。因て久しからずして大群の山羊を得べしと。其計算を續けて、二年の後には、此度合にては、四百匹以上の山羊を得

べき事を見出せり。彼は曰く、此時間の終に、四匹の山羊を一匹は牡牛又は牝牛に配當して、百匹の黒き家畜を買ふべし。然る時余は土地を買ひ、家畜を以て之を耕へし、且つ耕地と爲すべき勞働者を雇ふべし。さて牝牛の乳と余が土地の産物とを賣りて、五年を経ざる内に余は大幸福を得べし。余が其次の事務は立派なる家を建て、多數の奴婢を雇ふ事なり。而して余が建築も成就せし時には、余は見出し能ふ所の最も美なる婦人を娶るべし。此妻は適當の時に於て母となりて余が所有財産の相續人を余に望すべし。此兒は年齢の進みし時に得られ能ふ所の最も善き教師を得べし。さて其學問の進歩が余の公平なる期望に適するならば、余が彼に與へし苦心と費用とに充分に酬ひ得べし。然れども若し余をして失望せしむる時は、余が此處に持つ所の笞は、余が彼をして怒りたる父の不愉快を感せしむべき機械なるべしと。此等の言と共に杖を持つ所の手を壺の方へ舉げて、其壺を破碎せり。而して其中の物は其人の頭と面との上に流れ下れりと云ふ。

此物語を以て亞刺比亞人は兒童の教育を心懸けし事を知るべし。印度の物語は二種共に其妻を或は蹴り或は打つ事なりしを、右の如くに改めて其國風に

順ひし事なるべし其他も對校して其異同を知るべきなり。

## 第七 胎教の要

近來智育、德育、體育の三育を喋々して、未だ胎育の要を説く者多からざるは遺憾の至りなり。抑人の母胎に在るや、母氏の氣性を稟くること必せり、故に人の母たるべき女子は、一般に平生の時に其心志を堅固にして、良妻賢母たるに耻ぢざる注意なかるべからざるなり。身體壯健にして、智識を擴充するの日に當りて、早く一定不變の道理を會得して、徳性を養成し、智ありて徳なきが如き時弊に流れず、女子の本性を失はずして發達進歩せば、獨り其一身を全くするのみならず、幼にしては父母兄弟の心を安んじ、婚嫁しては舅姑の心を慰め、夫婦を扶けて其家を保ち、遂に子女の教育をも全くするに到ることを得べし。蓋し母氏の幼兒に於けるや、懐胎の日より其氣性に感染せしむべき直接の關係あり、父たる者は此十月間は唯間接の關係あるのみ、然らば則ち幼少より不正の聲色を見聞せず、純良の女徳を養成するに非ずんば、何に由りてか一朝人の妻となり、人の母となるに及んで、胎兒に善良の氣を稟

けしむるが如き好結果あらんや、宋の朱熹は小學の稽古篇に記して曰く、

太任は文王の母にして、摯の任氏の中女なり。王季娶りて以て妃とす。太任の性は端一誠莊にして、惟れ徳これ行ふ。其文王を娠むに及んで、目に惡色を視ず、耳に姪聲を聴かず、口に教言を出ださず。文王を生んで明聖なり。太任は之に教ふるに一を以てして百を識る。卒に周の宗となる。君子は太任は胎教を能くすることを爲すと謂ふ。

と云へり。太任の性質は端一誠莊にして、徳行の令女たりしなり。故に耳目常に惡色姪聲を視聴せず、口も亦敖慢の言を用ゐず、何に况んや、譎詐虚妄の語を以て、自ら欺き他を誑惑することあらんや。此の端一誠莊徳行の母氏にして、始めて能く明聖なる周の文王を生めり。胎内教育の實効は、此一事を以て推究するも、其關係の大なること知るべきなり。

古今東西の史傳を案じて、聖賢豪傑の生育の次第を察するに、概ね賢母の子たらざる者甚だ少なし。此れ胎教の已むべからざる所以なり。分娩の後と雖も、幼兒は一般に父を恐れ懼かり、母に懐き慕ふものなり。曲禮に曰く、



幼子には常に誑くことなきを視す、立つに必ず方を正ふして傾き聴かず。と云へり、慎まざるべけんや、女四書と云ふものあり、其一を女誡とす、漢の曹壽の妻班昭の著なり、其二を女論語とす、唐の宋某の女、宋若昭の著なり、其三を女孝經とす、唐の陳邈の妻鄭氏の著なり、其四を内訓とす、明の成祖皇帝の后仁孝文皇后の御選なり、此中の女論語の訓男女章に曰く、

大抵人家皆男女あり、年既に長成せば、之を教ふるに序あり、訓誨の權は實に母に専らなり。

と云へり、又女孝經の母儀章に曰く、

大家の曰く、夫れ人の母たる者は、其禮を明かにするなり、之を和するに恩愛を以てし、之に示すに嚴毅を以てし、動きて禮に合ひ、言必ず經あり、男子六歳なれば、之に數と方の名とを教ふ、七歳なれば、男女席を同ふせず、食を共にせず云云。とあり、今日の幼稚園や、家庭教育にも、此注意なかるべからざるなり、又女孝經の胎教章に曰く、

大家の曰く、人は五常の理を受け、生れて性あり、習ふや善に感すれば、則ち善な

り、惡に感すれば、則ち惡なり、胎養に在りと雖も、豈教へなからんや、古は婦人の子を妊むや、寢るに側たゝす、坐するに邊よらず、立つに跛せず、邪味を食はず、左道を履まず、割め正しからざれば、食はず、席正しからざれば、坐せず、目に惡色を視す、耳に靡聲を聴かず、口に傲言を出ださず、手に邪器を執らず、夜は則ち經書を誦し、朝には則ち禮樂を講ず、其生るゝ子や、形容端正、才徳人に過ぐ、其胎教此の如し。

とあり、此は前に引く周の文王の母の話と併せて考ふべきなり、此中に左道を履行せずと誠むるも、謂ふ所の一定不變の道理、即ち善惡因果の眞理を確信するに非ざれば、往々其邪行に陥り易きが故なり、故に詩書禮樂を講習し、坐作進退の行儀を正しくして、胎兒の模範となるべき起居あらざるべからざるなり。

以上の行ひある母氏を眞の賢婦とすべし、釋迦牟尼佛は優婆塞戒經に説いて曰く、一には心を盡くす、二には懈たらず、三には意を終ふ、四には疾く作す、五には賓客を待つ、六には舍を淨くす、七には愛語す、八には教へて童僕を招く、九には財を護る、十には早く起きる、十一には食を設けて淨潔にす、十二には忍んで教誨

を受くる。十三には諸の悪事を覆ふ。十四には疾病の男女を看ること等し。是れを賢婦とするなり。

と宣へり。有縁の令姉、潛心熟慮して、慈教の意を實踐躬行せらるべきなり。

## 第八 七佛通戒の偈

明治元年戊辰の十二月余西京に在りて香山院龍温講師の通戒偈の講義を筆記せしことあり、其録一冊今尙座右に在り、後又威力院義導嗣講の此偈の講談一冊を得たり、因て此偈の藏中諸經論に出でたることを知るや久し、九年八月英國に到りて獨逸人シユラギントワイト氏の西藏佛教誌を得たり、西曆千八百六十三年即ち我文久三年癸亥發兌の本なり、其第十六頁の次に一枚の挿紙あり、其中に西藏文字を以て謂ふ所の法身偈と通戒偈との梵音を寫し其下に附するに西藏語の譯文を以てせり、又法句經の原文を得て此偈のパーリ文をも知ることを得たり、十七年五月歸朝の後オルコット氏の佛教問答を讀みしに其第八十一條の答にパーリ語の通戒偈を出して英譯を附しあるを見たり、マクスミューラル氏の法句經英譯にも此

偈の譯あり、加藤正廓氏譯述の法の道芝の表紙の裏に載する所のものは是なり、十九年の夏余帝國大學の文科に於て此偈の梵文の各語を分解して字界字縁、八轉六釋、名詞代名詞動詞の區別をも細密に講述せしことあり、爾來各處に於て佛教を演説するの際常に此偈の梵英漢文を擧げて其大意を述し、又往々需に應して三語を書せしことも尠しとせざるなり、且つ此偈を以て佛法の大意を示すことは烏窠禪師と香山居士白樂天との問答に於て明かなり、此事たるや已に陳腐に屬するが如しと雖も曾て閱藏の日其典故を鈔出せしことあり、因て煩しさを厭はず左に之を延書せん。

佛祖統紀第四十二(縮刷藏經致字第九冊八十六枚左)唐の穆宗長慶二年の下に云く、中書舍人白居易杭州に知たり、往きて道を烏窠禪師に問へり、師曰く、諸惡莫作、衆善奉行と、居易曰く、三歳の孩兒もまた恁麼に道ふと、師曰く、三歳の孩兒も道ひ得ると雖も、八十の老翁も行ひ得ざるなりと、居易其言に服し禮を作して退けりといへり。

佛祖歷代通載第二十一(縮刷藏經致字第十冊百二十七枚左)唐の穆宗壬寅の下

に云く、是年白居易中書舍人より出で、杭州の刺史と爲れり、烏窠和尚の道徳を聞き、駕を枉げて之を見たり、時に烏窠は長松の槃屈して蓋の如くなるに因りて遂に其上に棲止せり、居易問ふて曰く、禪師の住處は甚だ危険なりと、師曰く、太守の危険尤も甚だしと、曰く、弟子位江山を鎮す、何の險か之れ有らんと、師曰く、薪火相ひ交はり、識浪停まらず、險に非ざることを得んやと、又問ふ、如何なるか、是佛法の大意なるやと、師曰く、諸惡莫作、衆善奉行と、居易曰く、三歳の孩兒も也、た恁麼に道ふことを解すと、師曰く、三歳の孩兒も説き得ると雖も、八十の老翁も行ひ得ざるなりと、居易欽歎して去れり、是れより數之に従ふて道を問へりといへり。

又支那譯諸經律論中に此通戒偈の譯文凡そ十一種あり、其譯出の年代に順ひ序次を作すこと左の如し。

第一に法句經卷下(縮刷藏經藏字第六冊下)皆之に倣へ、百一枚の右述佛品法句義第二十二に云く、諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛教、といへり、此は我神武天皇紀元八百八十四年、西曆二百二十四年(以下單に我紀元のみを擧ぐべし)、故

に西曆を知らんと欲せば皇國の紀元より六百六十年を減除すれば即ち得る、神武天皇は西曆紀元前六百六十年に位に即きたまひたることを併せて知るべきなり、に、吳の天竺沙門維祇難等の譯せしなり、其類文は出曜經第二十五(藏六の三十枚左)惡行品第二十九の文、此は神武紀元(下同)千五十八年の頃姚秦の竺佛念の譯せしなり、又大智度論第十八卷一の百十四枚左般若相義第三十の文、此は千六十二年の頃姚秦の鳩摩羅什の譯せしなり、又北本大般涅槃經第十五(盈五の七十三枚左)梵行品第八の一の文、此は千八十三年北凉の曇無讖の譯せしなり、而して義林章二の本三十枚右に之を引用せり。

第二に增壹阿含經第四十四(辰三の三十三枚右)に云く、於此賢劫有佛名爲迦葉、出現世間、爾時彼佛亦二會聖衆、初會之時四十萬衆、第二會時三十萬衆、皆是阿羅漢、二十年中無有瑕穢、恒以一偈以爲禁戒、一切惡莫作、當奉行其善、自淨其志、是則諸佛教、二十年中說此一偈以爲禁戒、宋元明三本無此二十以下十二字、犯禁之後更(三本作便)立制限、といへり、此は千四十四年の頃符秦の曇摩難提の譯せしなり、麗藏并に開元錄及び至元錄には千五十七年東晋の瞿曇僧伽提婆の譯と

なすと雖も、宋元明の三本に載する所の晉の道安の序に依れば曇摩難提の譯せしこと明かなり。

第三に四分律僧戒本(列七の六枚右)に云く、一切惡莫作、當奉行諸善、自淨其志意。是則諸佛教、此是迦葉如來無所著等正覺說、是戒經といへり。此は千六十三年の頃姚秦の佛陀耶舍の譯せしなり。其類文は同譯なる四分律比丘戒本(列七の十二枚右)及び四分比丘尼戒本(列七ノ十九枚左ノ文等ナリ)。

第四ニ十誦比丘波羅提木又戒本(張七の四十九枚右)に云く、迦葉佛如來無所著等正覺爲二萬比丘前後圍遶、說是戒經、一切惡莫作、當具足善法、自淨其志意、是則諸佛教といへり。第四句の則の字を高麗藏本には名の字に作れり。此は千六十四年の頃羅什の譯せしなり。其類文は十誦比丘尼波羅提木又戒本(張七の五十六枚右)の文、此は千八十年の頃宋の長干寺法顯の集り出だせしなり。又摩訶僧祇律大比丘戒本(列十の八十八枚右)に云く、迦葉佛如來應供正徧知爲寂靜僧略說波羅提木又一切惡莫作、當具足善法、等といへり。此は千七十六年に東晉の佛陀跋陀羅の譯せしなり。又摩訶僧祇比丘尼戒本(列十の九十四枚左)の文、高麗藏

本には略說の略の字を最初の二字に作る。此は千八十年の頃東晉の法顯と覺賢即ち佛陀跋陀羅との譯せしなり。又彌沙塞五分戒本(張二の七十六枚左)に云く、迦葉如來應正徧知爲寂靜僧略說波羅提木又一切惡莫作、乃至是則諸佛教といへり。第四句の則の字を宋元明の三本には名の字に作れり。因て此第三の異譯を細別すれば是則、是名の二種となるなり。此は千八十三年の頃宋の佛陀什等の譯せしなり。又五分比丘尼戒本(張二の八十七枚右)の文、此は千八百十二年梁の建初寺明徹の集めしなり。

第五に十住毗婆沙論第十(曇八の四十九枚右)四十不共法中難一切智人品第二十二に云く、佛先十二年中、說一偈爲布薩法、所謂一切惡莫作、一切善當行、自淨其志意、是則諸佛教といへり。此は千六十五年に羅什の譯せしなり。

第六に南本大般涅槃經第十四(盈七の七十四枚左)梵行品第二十の一に云く、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教といへり。此は千八十四年の頃宋の慧嚴等泥洹經に依りて北本涅槃經に添加せし經中の文なり。此譯文最も能く世に行はるゝ者は他なし。大徳の引用せしに由ること明かなり。即ち天台智者大師の

第八 七佛通戒の偈

法華經玄義第二の上呂九の十一枚左に云く、又七佛通戒偈云、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教、四趣相性即是諸惡、人天相性即是衆善、自淨其意即有析體淨意是二乘相性、入假淨意是菩薩淨意、入中淨意是佛界相性云々、といへり。天台は千二百五十八年に入寂したまへり。

第七に瑜伽師地論第十九(來一の八十七枚左本地分中思所成地第十一の四に云く、諸惡者莫作、諸善者奉行、自調伏其心、是諸佛聖教、といへり。此は千三百七年の頃唐の玄奘の譯せしなり。

第八に同論第八十一(來五の一枚右攝釋分の上に云く、諸惡者莫作、諸善者奉行、善調伏自心、是諸佛聖教、といへり。義林章一の本三十枚右に之を引用せり。

第九に阿毗達磨大毗婆沙論第十四(收一の六十二枚右雜蘊第一中智納息第二の六に云く、如世尊說、諸惡莫作、諸善奉行、自淨其心、是諸佛教、といへり。此は千三百十六年の頃玄奘の譯せしなり。

第十に根本說一切有部戒經(寒五の八十四枚右に云く、一切惡莫作、一切善應修、遍調於自心、是則諸佛教、乃至此是釋迦如來等正覺說、是戒經、といへり。此は千三

百七十年に唐の義淨の譯せしなり。其類文は同譯なる根本說一切有部苾芻尼戒經(寒五の九十三枚右)に云く、一切惡莫作、乃至是則諸佛教、此是迦攝波如來應正等覺說、是戒經、といへり。

第十一に法集要頌經第三(藏六の百十八枚左罪障品第二十八に云く、諸惡業莫作、諸善業奉行、自淨其意行、是名諸佛教、といへり。此は千六百四十年の頃宋の天息災の譯せし文なり。

以上の十一種、或は第四の是則と是名とを分ちて二種とすれば十二種の異譯の外にも、細に大藏經を検閲すれば尙多少の異同を見出だすことなきを保せざるなり。讀者諸君若し此他に異譯或は類文の在る所を知り給はば願はくば之を報道せられたし。

上來擧ぐる所の異譯を束ねて四類とすることを得べし。左表の如し、表中點を施すものは其前行の文字と同一なることを知るべし。

第一	諸惡莫作	諸善奉行	自淨其意	是諸佛教
第六	、、、、	衆、、、	、、、、	、、、、

第八 七佛通戒の偈

第九	、、、	諸、、	、、心	、、
第二	一切惡莫作	當奉行其善	自淨其志意	是則諸佛教
第三	、、	、、諸	、、	、、
第四	、、	具足善法	、、	、、
第五	、、	一切善當行	、、	、、
第十	、、	、、應修	遍調於自心	、、
第七	諸惡者莫作	諸善者奉行	自調伏其心	是諸佛聖教
第八	、、	、、	善、自	、、
第十一	諸惡業莫作	諸善業奉行	自淨其意行	是名諸佛教

第九 閻多迦

和融誌第拾卷第貳號に、ブレイフィアー氏のサンスクリット文學と題する一篇の原譯二文ありて頗る興味を感じたり、其中に佛の本生談たる閻多迦を迦葉尊者の著ならんと想像せらるゝとあるは果して然るや否やを知らずと雖も、此閻多迦又は

閻陀伽と音譯し、本生、生處、生傳、生と義譯するものは九部法の第六にして、十二分教の第九なり、今其原書の現存せるものはパーリ語のみにしてサンスクリットの本は未だ之あるを聞かず、支那譯には小乘經の中に佛說生經一部五卷あり、西曆紀元二百八十五年に當り、西晉三藏竺法護の譯せし所なり、縮刷藏經宿五の廿二丁左より五十五丁左までに出づる、其中に集められたる談話は、佛說那賴經より佛說譬喻經まで其數五十五あり、其第五十五の譬喻經の中に首達と惟先との名を擧げて、其結文に左の語あり。

佛告諸學者、其首達者則吾身是、惟先者今現阿彌陀佛是。

此の如き語は定めてパーリ語の原本には無かるべきも、兎も角も小乘經に阿彌陀佛の名あることは餘程珍らしきことなり、竺法護はいかなる原書を譯せしものなる歟を詳かにせずと雖も、或はサンスクリットの原書より譯せしには非ざる歟、此支那譯を現存のパーリ語の原書又は其英譯と對照せば、面白き發見を得ることあるべし。

パーリ語の原書の已に刊行せられたるもの、中に就て丁抹人 Foushill 氏の校訂

五閑多迦 原文及英譯 千八百六十一年刊行

二閑多迦 同 千八百七十年

十車閑多迦 同 千八百七十一年

十閑多迦 同 千八百七十二年

閑多迦全集原文のみ四冊 (未完)

其第一冊 千八百七十七年

第二冊 千八百七十九年

(三四の二冊は刊行の年を知らず)

同英譯 英人 Rhys Davids 譯

第一冊 千八百八十年刊行

又支那譯の大乗論の中に、聖勇菩薩等の所造と稱する菩薩本生鬘論一部十六卷あり、趙宋の慧詢等の譯する所なり、縮刷藏經卷五の一丁右より四十六丁右までに出づ。此論の梵本はパーリ語に非ず、サンスクリット語なり、和蘭人 Kern 氏の校訂

せし第一冊は、北米ハーグロド大學の東洋學叢書第一冊として、同大學の梵語教授 Lammie 氏の刊行せしものあり、此第一冊に三十四の本生談ありて之をパーリ語原書の既刊せられたる全集四冊と對照して、二十一の題目を並書せる表あり、其次第は頗る前後せり。

パーリ語原書の中には閑多迦の數は凡そ五百五十ありと云ふ、其中に於て多數の動物の話ありて多言の龜の話の如きは尤も人口に膾炙するものなり、即ち友誼ある二羽の鳥に運ばれて空中を行き聲を發せざる約束を忘れ、大地に墮落して命を失へりと云ふ話なり、此は信義を教へ、忍耐を教へ、沈黙を教へて、多言を誡めたるものなり、然れども動物の話の外にも面白き話あり、其一を擧ぐれば左の如し。

佛の前生に大藥師と名けたる賢人たりしことあり、時に一人の女人ありて、其幼兒を携へて賢人の池に來り、先づ其兒を洗ひ、之を衣服の上に置き、自ら水に入りて、浴す、其時鬼女、藥又女又は夜叉女、食人鬼は此幼兒を食はんとして、女人の形に變じ、其母の許しを受けて暫く其守を爲し、遂に之を持ち去る、母は追て其鬼女を執ふ、然るに鬼女は大膽にも、此は我が實子なり、汝は何處より得たかと、諍ひつゝ、賢人の法

院の前を通過す、賢人其聲を聞きて其裁判に服せよと命じ、地の上に一直線を畫き、鬼女には幼兒の手を持たせ、其母には足を持たせて、線を越へて幼兒を牽き寄せたる者こそ此兒の親なれと宣告せり。然れども之を牽き始むるや否や、母は幼兒の苦痛を見るに忍びずして兒を放ちて涕泣せり。賢人乃ち傍人に問ふて曰く、誰の心が幼兒に對して慈悲深きや、子を生みたる者歟、生まざる者歟、傍人皆曰く、母の心こそは慈悲深し。賢人曰く、然れば何れを幼兒の母とするや、兒を手にする者か、之を放ちし者か、皆曰く、放ちし者こそは母なり。賢人曰く、然れば他の女は賊なりや、皆曰く、我等は之を明言すること能はず。賢人曰く、彼は實に鬼女なり、兒を取りて之を食はんとする者なり、皆曰く、何を以て之を知るや、賢人曰く、彼の兩眼は瞬せずして赤く、恐怖を知らず、憐愍を有せず、故に吾之を知ると。それより其女賊に向ひて曰く、汝は誰なるや、彼曰く、我は鬼女なり。賢人曰く、何が故に此兒を取り去りしや、彼曰く、之を食はんが爲めなりと。賢人彼を誡めて曰く、愚女、汝は過去の罪業に由りて鬼女と生れ、今尙其罪業を取てするやと、五戒を授けて之を放還す。幼兒の母は賢人の萬歳を歎呼し、幼兒を懷抱して去れり。

右は英譯を讀むに隨ひて之を直譯せしまでにて、之を潤文して此面白き話を廣く世に紹介せられんことを希望すると同時に、右に類似の一話ありて對照すれば、自然に風土人情の異同をも察知し得べきなり。即ち舊約全書第十一卷列王紀略上の第三章第四段に出づる所羅門王の裁判是れなり、其支那譯を延書すれば左の如し。時に二の妓女ありて王に詣り、王の前に立てり。一婦曰く、我が主よ、我此の婦と同じく一室に居り、我彼と偕に室に在りて子を生めり、我子を生みし後三日、此婦も亦子を生めり、我儕同じく在り、我二人より外、他人の我儕と偕に室に在るなし、夜間此婦の子死せり、其誤りて子の上に臥せるに縁るなり、爾の婢寐ぬる時、斯婢夜半より起き、我が子を我が側らより取り、之を己れの懷に置き、其死子を以て我が懷に置けり、朝時我起きて我子に乳哺せんと欲すれば、視よや、子已に死せり、天曉に及び、我諦かにして之を視れば、我が所生の子に非ざるを知るなり。彼婦曰く、否、活者は我子、死者は爾の子と、此婦曰く、否、死者は爾の子、活者は我子と、二婦是の如く王の前に言ふ。王曰く、此婦云ふ、活者は我子、死者は爾の子と、彼婦云ふ、否、死者は爾の子、活者は我子なりと、王曰く、劍を我に攜へよと、遂に劍を王の前に攜入。王曰く、活子を判分して二と



爲し、半は彼婦に予へ、半は此婦に予へんと、誠に活子の母たるもの、己れの子に縁りて愁腸烈ぶるが若し、乃はち曰く、我が主よ、活子を以て彼婦に予へよ、斷じて之を殺すなかれと、彼婦曰く、爾に屬せざるべきものは、亦我に屬せず、寧之を判分せんと、王答へて曰く、活子を以て此婦に予へん、斷じて之を殺すことなしと、蓋し此婦誠に其母たればなり、以色列衆、王鞠する所の擬を聞く、衆是に於て王を畏る、王に神の智慧ありて以て擬するを以てなり。

英譯の附註には所羅門を以て佛世尊に先だつこと一百餘年なりとして、閻多迦の話は此猶太國の話を印度化したるものと爲せるが如し、一は鬼女と女人の諍とし、一は二の妓女の諍とす、又一は單に幼兒の手足を執へて、方に任せて之を牽き去れと裁判し、一は劍を以て之を二分して與へんと宣告す、其他も對照して知るべし。

## 第十 宗教とは何ぞ

近來宗教哲學又は宗教學術の名を以て、各宗教を研究するにつきては、各自の興廢盛衰の次第を證明すべき材料を集むることを以て、第一着手とするは無論なり、然

れども先づ宗教と云ふもの、分限を定めざれば、何程の事實を集めて、其材料とすることを得べきかを知るに由なし、此れ宗教の定限又は宗教と云ふ語の定義は如何と云ふ問題の起りたる所以なり、此れは泰西の學者に於て、近年頗る之を講究する人あり、因て今其要を取り、聊か鄙見を加へて、試みに之を演述せんとす。

何をか宗教とするやと云ふ問に答ふることは、殆んど何をか人とするやと云ふ問に答ふると一般に、頗る容易なるが如しと雖も、再往之を考ふれば却て不容易なることを見出だすべし、抑言語の意義の評定と更正とを以て見識を確定するを哲學即ち識學と稱し、又古來普通の名稱に追加したる新定義の前後次第を歴叙するを哲學史と稱するもの、如し、然るに古來泰西に於ては、宗教と云へば一概に一神又は多神を立て、之を信奉するものとのみ思ひしに、佛教にては兎も角も造物者たる神の沙汰なしと雖も、亦多數の人民は之を信奉して、謂ふ所の安心立命の地位に達す、故に佛教は到底宗教と云ふべからずと云ふ者あるに到る、然れども造物神の有無を以て宗教の分限を定むることは、畢竟古來の名稱に附加せし意義の狭きより起りたるものにして、恰も自ら門戸を閉ぢて、他人の入り來らざるを怪むが如き

には非ざる歟。

今茲に宗教と云ふは羅句語のレリギオ、英語のレリヂオンと云ふ語を意譯するものなり、因て此羅句語の意義を解釋するに三種あり、即ち字學と歴史と獨斷となり。

第一に字學的の意義とは、基督教のシセロと稱讃せられたる神學者及び語言學者のラクタンティウス(西曆三百二十五年頃に死す)は、結ぶ又は維持すると云ふ意味のレリガレ(Religare)より出でたる語なりとす、而してシセロ(紀元前百零六年に生れ四十三年に死す)が集むる又は擇ぶと云ふ意味のレレゲレ(Religere)より出でたりとする古説を廢棄せり、即ちラクタンティウスは吾人は神を尊敬すべき約束を以て生れたる者と云ふ解釋を下して、シセロの諸神の禮拜に關する物を注意して手に取る所の人をレリギオシと云ふとある説を用ゐざるなり、然れどもフェストウスもシセロと同一の語原を擧げて曰く、妄信に陥らずして諸神の禮拜に於て作すべきこと、略すべきこと、の選擇を爲す者をレリギオシと云ふと云へり、セントアウグスティン(三百五十四年に生れ四百三十年に死す)は兩説を互用し、現今の

神學者は兩説を並用して、宗教と云ふ語の意義には約束と選擇との二義共にありと云ふに到れり。

言語學より之を判すれば兩説共に通用し得べきが如しと雖も、シセロの説は羅句の語法に準するが故に取て以て正とすべし、而して文字學上の此語の最初の意義は、尊敬又は注意と云ふの外なしとなり。

第二に歴史的の意義とは、羅馬人の未だ希臘哲學にも基督教にも遭遇せざる以前は、此語を單に注意と謹慎と尊敬と恐懼との意に用ゐ、それより轉じて狐疑と知覺との意となり、遂に進んで神に對する内心の尊敬と禮拜又は供物の外面の儀式までをも指すことゝなれり、然れども此内心の尊敬の情は何れの邊より起りたるやと云ふ點に到りては多く意を用ゐず、唯思考と再思と猶豫との意義を以て満足し、希臘哲學を研究せざる以前は神の禁する所の事は不正なり、神の命令する所は正當なりと云ふが如き細密の情感はなかりしものゝ如し、カッシオドルス(五百六十二年に死す)は信の意義を以て此語を用ゐしとなり、以上は羅馬人の自國の語として用ゐし時代の意義なり。

さて此レリギオーと云ふ語が基督教の域内に移されて後は之を用ひし神學者と哲學者は之を他邦の語即ち譯語として其意義を定めたり因て兩約全書に於ては如何なる意義を以て此語を用うる歟を檢查することは自然の順序なり但し舊約全書には此語を用ゐたるところなし新約全書には唯三ヶ處あるのみと云ふ

其第一は使徒行傳第二十六章第五節にして漢譯にては昔奉我儕極嚴之教爲喑啞人とあり和譯にてはもし證を爲んとせば彼等は素より我が曩に我儕の教の中に於て最も嚴しき所に違ひたるバリサイ人なりし事を知れりとあり羅甸語の古譯なるヴルゲートにはレリギオーと云ふ語を用ゐて希臘語のスリースケイアと云ふ語を譯す此希臘の原語は外面の諸神の禮拜と云ふ意義の語なり英譯には無論レリヂオンと譯せり

其第二は使徒雅各の書第一章第廿六廿七の兩節にして希臘の原本には名詞と形容詞とあり因てヴルゲート即ち羅甸譯にもレリギオーとレリギオスの二語を以て之を譯出す即ち名詞は前に同じく宗教上の禮拜と云ふ義にして形容詞は宗教的又は宗教者と云ふ程の意なるべし支那譯にては二節共に虔恭の文字あり和譯

にては爾曹のうち誰か若し自ら神に事ふる者(形容詞)と意ひて其舌に辯をつけず自ら其心を欺かば其事ふること(名詞)は徒然なり神なる父の前に潔くして穢れなく事ふること(名詞)は孤子と寡婦を其患難の中に眷顧また自ら守りて世に汚されざる是なりとあり英譯にはレリヂオンとレリヂアスとを用うることを知るべし

其第三は使徒保羅加拉太人に贈れる書第一章第十三十四の兩節の希臘の原本にはユダイズモスの語あり因て羅甸譯にはユダイズムスと譯せり但し英譯にてはヂユースレリヂオンとあり漢和の二譯には共に猶太教とあり

右の外に使徒行傳第二十五章第十九節の希臘の原本には諸神を畏れることの意義ある別語を用ゐたり因て羅甸譯にはスベルステイタイオーと云ふ適當の語を以て譯出せり千六百十一年の英譯にも同じくシュバルステイションと譯す然るに千八百八十一年の改譯には却てレリヂオンと譯せり漢譯にては惟論彼衆畏諸鬼之已道云々トアリ和譯にては惟かれらは鬼神を敬ふ己が道とパウロが生けりといふ既に死し一人のイエスとに就て爭論をなし彼を誣へしのみとあり

之を要するに新譯全書にてはレリギオー又はレリヂオンを以て宗教上の信と禮

80 拜との法則を示すものにして、基督教西漸以前の此語の意義はもはや用ゐられざるなり。

第三に獨斷的の意義とは前の字學的と歴史的との意義とは甚だ相違して、神學者又は哲學者の一個人の説明なるが故に、此の如きの意味なりしとも意味なりとも云はずして、却て此の如きの意味なるべしと云ふが如き傾向あり。即ち今時の哲學上の雜誌類には人々各自に宗教の意義を定めんとするものゝ如くにして、異義百出底止する所を知らず、宗教は知識なりと云ふ者あれば、無識なりと云ふ者あり、宗教は自由なりと云ふ者あれば從屬なりと云ふ者あり、宗教は欲望なりと云ふ者あれば、無欲なりと云ふ者あり、宗教は靜慮なりと云ふ者あれば、嚴格に神を禮拜することなりと云ふ者あり、詩人は詩を以て自身の宗教とし、畫工は自身の宗教は畫なりと云ふ、殆んど佛經に謂ふ所の摸象の喩を讀むが如し、此等は一々に其當否を評論すること能はず、已に字學的歴史的の意義すら之を以て其取纏めをなすことは不易なり、况んや人々隨意に之を主張する者に於てをや、此等は其人に一任するの外なかるべし、且つ一個人の同一著書中に於ても前後異様の見解あること少な

からざれば、今は之を詳かにするに違わらず。

さて古來歐洲に於ては、唯猶太教と基督教との二教を取て、超性教なり、默示教なりとして、宗教の意義を定め、其他の宗教は一般に道理教即ち自然教なり、非默示教なりとせり。然れども宗教史を研究する者に於ては此等の區別は全く無用なり、たとひ右の二教の外の教祖は超性默示の教を説かんとは要せざれども、其徒弟よりは之を尊崇して、遂に其教祖の言行に於ては、更に難問をも起すべからずと云ふに到ることは、殆ど一般宗教の傾向なり、然るに比較宗教學者は固より自他宗教の區別を問はず、一般に歴史的に之を研究するなり、是を以て往々自教のみを知りて他教を知らざる者の爲めに妄評を受くることあるを免かれず、有名なるフイヒテ千七百六十二年五月十八日に生れ千八百十四年一月二十七日に死すを無神論者なりと云ふ者ありし時に、フイヒテは左の如く云へり。

汝の神は一切の樂を與へ、一切の幸と不幸とを人類に分附する者なり、此れ彼神の實性なり、然れども彼樂を要求する者は宗教を有せず、且つ宗教に堪へざる所の五官と肉體の欲ある人なり、第一の眞實の宗教の感覺は我等の内心の

欲を切斷するなり、故に我等の欲を満足せしむる所の神は賤むべき者惡しき者なり、如何となれば彼は人類の零落と道理の衰滅とを助長すればなり、此の如き神は實に久しき前に已に真理の口に依て處刑せられたる此世界の君なり、彼等の呼ぶ所の神は我が爲めには非神なり、彼等は眞の無神論者なり、而して我は彼等の非神を眞神の如くに承認せざるが故に、彼等は却て我を無神論者と呼ぶなり。

此語頗る味あり、以て妄信者を驚かせしなるべし、然れども三世因果の理法を以て根基とする佛教の、已に宗教として世に用ゐらるゝ以上は、宗教の定義も別に考ふる所なかるべからずとて一説あり、一言以て之を蔽へば、曰く、宗教は經驗なりと云ふの外なし、尤も此は無論のことなれども、此經驗は固より感覺と受得と理會と命名とに依て成り立つものすと云ふ、此説には同意者も不同意者も共に頗る多しと聞く、此れを佛家に謂ふ所の五蘊の中第一の色を除き、餘の受と想と行と識との四蘊に配當し、且つ其他の名目をも取り來りて、彼此對校して之を研究すれば頗る面白き事ならんと思ひし故に、今は聊か其發端として之を辯述すること此の如し。

## 第十一 言語學に於ける梵語の位置

言語學は言語の歴史を研究する所の學術にして、嘗に言語の意義を知るのみに止まらず、進んで各語の起源と本末の關係とを分明にして、其前後次第を辯解し、從來現存の歴史上に未だ見ざる所の、人民の思想、又は其言語の系統をも、知り得べき事實を見出だすに到れり、蓋し人類ある所には必ず言語あり、而して言語には必ず各自證顯する所の理義あることは言を待たずと雖も、宇内の廣き、人民の多き、言語の種類も其數固より多し、夫故に古來印度人は印度語を以て世界各種の言語の根原なりと云ひ、泰西にては希伯來語を以て原語なりと主張せしこともありたれども、共に各地の交通も容易ならざりし時なれば、偶牽強なり、附會ならんと云ふ者も、十分に反對説を主張すること能はずして止みしことなるべし、然るに百餘年前に於て、英人の印度に到りし者の中に、サーウイリアム・ジョンズ氏を始め、二三の學者は、千七百八十四年に、印度カルカッタ府に於て、亞細亞學會を設立し、此學會は今尙現存せり、明治二十年二月中余は二日間其會館に到りて、梵文佛經の寫本を校讀

せり)印度の古語なるサンスクリット語を研究して、始めて上古の波斯語を始め、歐洲各國の言語と共に同一の原語ありて其語より出で來り、各地に於て年月を経るに隨ひ許多の異同を見るに到りたるも、言語の系統を論ずれば、歐洲語は希伯來語には關係なくして、却て印度の古語との關係は母子とは言ふべからざるも、同胞なりと云ふことは、疑ふべからざる事實を見出すに到れり、因て此れを言語學史中に特筆大書して、始めて文學世界の言語の分類を確實にすることを得たりと云ふなるべし、其後言語學を修むる大家は、獨逸、英、佛の各國に輩出して、梵文の古寫本を校正して出版する人もあり、又翻譯に註解を加へて發兌する人もあり、文獻辭典を始め、文學上の歴史をも編集するに到りて、印度古代の宗教と學術と文學とを研究するの材料をも頗る得易きに到れり、此れ他なし、言語學に於て梵語の功用の大なることを表すの確證なり。

抑世界各國の言語の中に於て、最古の形を其儘に存すと云はるゝものを支那語とす、此語は語原のみを用ゐて、名詞、形容詞、動詞、副詞に同一様の語を用うることに頗る多く、此等は唯文字の位置、或は前後の關係に依て其意味を詳かにするものなり、何

れの語も此の如き時期を経たるものなるべしと雖も、今試みに明明明明の四字あらんに、之を明かに(副詞)明かなる(形容詞)明を(名詞)目的格明かにす(動詞)と讀むことをも得べし、又明よ明々なる明よとも云ふべし、又明々よ明々よとも云ふを得べし、又明々なる明を明かにすとも云ふべし、明は明かに明かなる明なりとも云ふべし、畢竟日本にて訓讀すればこそ、吾人には其意を知ることが得れども、若し前後の關係を見ざる時は、たとひ支那人と雖も四個の明の字果して名詞動詞等の四種の區別あるや、又は三種二種の區別のみなるやを判定することは難かるべし、唯慣用に依て不便を感せざるべきも、他語と比較すれば支那語は言語の歴史中にては最初の形を保存するものと云ふことなり、此は現今の言語學家の常に謂ふ所なり、即ち言語を三大種類と分つ中の第一の種類にして、一綴語(Monosyllabic)又は隔離語(Isolate)とす、即ち語原種類なり。

次に第二の種類は結附語(Aglutinate)又は結合語とす、此中には印度以西と支那とを除きたる亞細亞洲各地の語と、亞米利加洲の土語を合藏すと云ふ、案するに此種の語は前の明の字を四個重ねたるを日本讀みにする時の如く、明かにと讀めば副詞

なり、明かなると讀めば形容詞なり、明かなること、讀めば名詞なり、明かにすと讀めば動詞なり。此中に於て明かと云ふだけは四語皆同一にして、唯其下に結び附けたる所のにか、にすとかなるとか、なること、か云ふものを以て、其區別を示すが如きも一例とすべし。其他名詞の格を顯す爲めに加ふる所の豆爾遠波の如きも、此次に擧ぐる所の第三種類の屈曲語の語基と語尾との關係に比すれば、自ら親疎遠近の別ありと云ふ。但し此第二第三の二種類の同異を判するには、近くは國語、遠くは朝鮮蒙古西藏等の語をも研究して、梵語并に歐洲語と對校せば、或は意外の結果を得ることもあるべし、今は因みに講述することなれば之を略す。

次に第三の種類は屈曲語 (Inflection) なり、是を言語の最上級とす。此中には謂ふ所アールヤン族とセミテイック族との言語を合藏す。其中に於てアールヤン族と稱する言語の歴史を研究するに於て、梵語の功用の著しきことを略述するを以て本題の主眼とす。已に前にも云ひしが如く、歐洲に於ては久しく希伯來語を以て人類の原語なりと假定妄信して、其關係を證明せんが爲めに、第十七と第十八との二世紀に於ては、頗る學者の腦力を勞費せりと云ふ。然るに當時に在りて始めて之を排撃

せしはライブニッツ氏なり。氏は西曆千六百四十六年に生れ、千七百十六年に死せり、而して漸く千七百八十年前後に到りて、實地に印度の古文學を研究するの道成就せり。是に於て印度人の梵語を以て人類の原語とする説をも併せて排撃し、言語の分類を確定して、梵語と古波斯語と希臘語と羅旬語と獨逸語と西歐語と北歐語とを比較して、合してアールヤン族と呼ぶに到る。此アールヤと云ふ梵語は尊貴なる、或は貴族のと云ふ形容詞にして、即ち言語中の尊貴なる族類と云ふ義なり。古來印度人は此語を以て美稱とし、遂に其國の四姓中の初め三姓の人の通稱とせしこととは吠陀にも見ゆ。然るに今は歐人各自の語も同一種類なりと鑑定せしを以て、印度歐洲族、又は印度日耳曼族の稱を廢して、此美稱を用うるに到れりと云ふ。但し此アールヤと云ふ語の起原、并に用法は、英國牛津大學教授マクスミューラル博士の言語學講義第一冊二百七十四頁以下に詳かなり。

是の如く梵語文學の發見よりして、種々の學術文藝にも影響を與へたることは枚舉に遑わらず、中に就て言語學上の功用は、従前は語原の明かならざりし言語も、文法の詳かならざりし文章も、彼此對校すれば之を分析解剖するに於て思ひ半に過

きたる者抄しとせざるなり、此れ僅々百年間にして歐米の學者社會に二三千年前の古印度文を校閲して、婆羅門教と佛教との異同を論じ、印度哲學六派の次第を詳かにし、ラーマヤナとマハーバータとの如き大詩史をも誦讀して、支那日本の學者の曾て見聞せざる印度の事をも知り得るに到れる所以なり、文運の進歩は實に驚くべきなり、支那は固より別類言語の國なり、故に印度文の如きも一度其語に譯出したる後は、其原文を讀む人なく、唯自國の文章に注意することを勉むるの餘り、往々譯文を潤飾加刪して却て原文と背馳するに到らざるも、或は省略に過ぐるの類なきこと能はざるが如し、本邦古來其支那譯に依て、印度の事を知り得るのみ、故に若し其支那譯の文中に原文と差異する所あれば、譯文を去りて原文に就かざるを得ざることは無論なり、唯憾むらくは本邦に傳ふる所の支那譯文の原本と稱すべきものは、支那に於ても今は見出だされ得ず、本邦に於ては、僅かに阿彌陀經と般若心經と金剛經と普賢行願讚との四部の梵本の傳來あり、但し此等は已に一支那譯と對校せしに、支那の譯經に従事せし三藏法師等の注意は實に亦驚くべき者にして、原文と譯文との間だに未だ會て甚しき差異あるを見ざるのみならず、

五種不翻等の法則を守りて、其事を容易にせざりしは、今日一介の諸生の、辭典に依て洋籍を譯し、自ら欺きて遂に人をも欺くの比に非ざることは一目瞭然たり、此等の事業は歐洲の學者も驚歎して已まざる所なり、其上余は往年印度より英佛に傳へたる所の梵文の寫本を謄寫し、又は板本を購求して、其支那譯あるものは之を對校せしに、從前譯文の明かならざる所も、原文を得て譯者用字の本意を知り得て、校讀の間には殆んど三藏法師の譯場に陪して、親く相提携するの想あらしむるに到ることなきにしもあざりしなり、

然れども和漢の佛書中に字界字縁と云ふことは語原と語縁とことなり、蘇漫多聲とは名詞、代名詞、形容詞の總稱にして、其中に具する所の男聲、女聲、非男非女聲とは男性、女性、中性のことなり、一言聲、二言聲、多言聲とは單數、兩數、多數のことなり、體業具爲從屬於呼の八轉聲とは主格、目的格、具格、與格、奪格、物主格、於格、呼格のことなり、又底彥多聲とは動詞のことにして、十羅聲とは現在と第一第二第三の過去と第一第二の未來との直說法、并に可成法、命令法、懇望法、約束法の十種の法のことなりと云ふが如きは歐洲言語學者の編集せし梵語文典に依て始めて明了にすること



を得たり、而して此中八格の區別の如きは梵語と古波斯語と全く其撰を同くし、三數は梵と波と希臘との三語同一なり、三性は梵と波と希と羅匈と獨逸と及び他の同族の語と大同小異なり、此等の關係を明かにして書中の語を分解し、又は文章の段落を剖析する時は、二三千年前の印度の古聖賢の心中所證の法門をも分明に知ることを得るは、或は別類の支那語に翻じたる譯文に依るよりも容易なることを見出し得ることあり、此等のことは曾て般若心經、阿彌陀經、金剛經、法華經、楞伽經、金光明經、普曜經等の梵文を支那譯に對校せし時の感情を陳するなり、其外支那に於て未だ曾て譯せざる印度の宗教及び哲學諸派の古梵書の如きも、已に出板せしもの尠しとせず、固より印度哲學の材料は佛書のみに限らざることも準じて知るべきなり。

今梵語の功用を示すに付き、同族なる獨逸と英との二語を以て對校して一例を擧げ、以て本節の局を結ぶべし。

隋の時に當りて、印度の達摩笈多の譯せし金剛經の直譯一卷あり、大藏經中に在り、能斷金剛般若波羅蜜經と題す、其始に半三十比丘百の六字あり、此れ梵語原文の次

第に依て支那字を配當せし眞の直譯なり、之を姚秦の鳩摩羅什婆と元魏の菩提流支と陳の波羅末他(眞諦)と唐の玄奘と義淨との各自に譯出せし金剛經の義譯に對校すれば、千二百五十人とせり、因て隋譯の比丘の二字は他譯の人の一字に當れり、而して半三十百の四字は千二百五十の五字に相當す、是に於て先づ三十百と云ふ數量を定めざるべからず、此三十は若し滿數を指すならば、三十百は三千なり、而して其上に半の字あれば千五百と云ふ數を表するに似たり、然るに義譯は一樣に千二百五十とすれば二百五十の差あり、因て慈雲律師の門下に成れる梵文阿彌陀經義釋には梵文の異本ならんと判定せり、然れども梵語の形を見れば然らざることを知るべきなり、即ち此三十は滿數の三十に非ずして半數の十三を云ふなり、此れは支那日本の語を以て考ふれば了解し難し、是に於て英語の十三と三十とを取り來りて梵語も亦然りと云ふの外なし、梵英二語共に十三も三十も三の數を示す語前に在りて、十を示す語は後に在り、而して二語を合成して一語とす、和漢の十と三との二字を連用して熟語として、三の字若し滿數の十の字の下に在れば半數の十三となり、上に在れば滿數の三十となるが如き類に非ざること、左の表を見て知

和漢		梵語		英語	
和	三	三	Tri (Trayas)	Three (Thir)	
漢	十	十	Dasan	Ten	
			Triyo-dasan	Thir-teen	
			Trih-sat	Thir-ty	

右の如く十三も三十も三前十後なれども、判然たる別語にして、曾て混用せしものなし、混雜すべしと思ふは和漢語の思想なり、梵英語に於ては其區別判然たり、因て梵本の半三十百の三十は、三度重ねたる十と云ふ次第の満數の三十には非ずして、三を加ゑたる十と云ふ次第の半數の十三なり、故に三百は十三百、即ち千三百なり、其上に半を加へて千二百五十の數を表することになるは如何と云ふに、百を十三度重ねれば千三百なれども、其十三分の一分は其半分不足なりと云ふことを表して、半千三百と云ふ、之を副詮すれば半百不足の千三百と云ふことなり、半百は五十なるが故に、千三百の中に五十不足すれば千二百五十なり、此等の語法は頗る煩

しきことなれども、此を上古の語法として一概に抛擲すべからざることあり、例せば梵語同族の獨逸語に於ては、現今同様の語法あり、即ち獨逸語に於て九時半と云はんとするれば半十と云ふ、此は半時間不足の十時と云ふ意なるべし、是の如きは却て獨語を以て梵語を解き明かせしものなりと雖も、亦以て同族語たることを證明するに於て争ふべからざる事實なり、此他梵語は一千七百零六個の語原を定めて、其中の母音變化の有無と、其前後に加ふる語縁の有無ありて、名詞動詞の語基を形ち作り、此れに語尾を加へて性と數と格と、又は人稱と數と時と法との區別を表する等の、完全細密の規則を有するが故に、古波斯、希臘、羅甸、獨逸等の同族語の文法起原を解するに於ても、言語學者の必要として常に研究する所の古語なりとす。

### 第十二 歐洲梵學略史

明治十二年の夏余英國に在て印度文學雜誌を草し、博士マクスミューラル氏の言語學講義を抄譯して、歐人の梵語學を修せし略史を記せしことあり、其後尙續て此雜誌を草し、本邦に郵送せしこと一年餘なりしと雖も、其草稿は何處に没せしや復

見聞せず、而して行李底別に完全の草稿なるものは固より無し、時々之を思ひ、頗る遺憾を覺ゆるなり、然るに西京に在る某氏、余に要するに歐米に於て梵學の原始、并に之に従事せし人名、同學者翻譯經論の統計、及び梵學の形况等を報すべきを以てせらる、依て往年草、せし印度文學雜誌第一第二の二號に掲げし事實を取捨し、間々管見を加へ、傍ら某氏に答ふるの料となさんと欲す、

サンスクリット語は即ち古來本邦に於て梵語と呼ぶ所の語なり、此語は遅くとも西曆紀元前三百年比、我孝安天皇の世にはもはや印度人一般の爲めには古語となり、別に此語の轉訛せし方言俗語を話せしこと、本邦上古の語の今日の俗間に用ゐられざるが如くなりしなるべし、

歐人の始めて印度の語及び其文學あることを知りしものは希臘人なり、即ち有名なる亞歷山得爾大王は紀元前三百二十七年を以て印度を伐ちしに、其一行の者或は其後人の記せし希臘羅句語の書に擧ぐる所の印度の人名并に地名は皆純粹なる梵語なり、但し未だ梵語學を始めし人はあざりしなるべし、

其後西曆紀元後千六百六十年、我後西院天皇萬治三年比、即ち佛蘭西王路易第十四

世の代に到りては、梵語文學の現存することが歐洲一般には知られずとも、印度に在りし歐人中、別して基督教の傳教徒には知れてありしなり、但し此徒の中には誰が歐人にして始めて梵語學を修せし人なりと云ふことは難し、已に千五百五十九年には印度に在りし基督教の傳教徒は、婆羅門教徒の改宗せし者の助を得て、印度の神學理學の書をも研究せり、其後も傳教徒には随分梵語學者あり、千七百七十六年より八十九年まで印度に在りしパウリヌス、アサント、パールトロミーオは、千七百九十年に羅馬に在て其編集せし梵語文典を出版し、數年の後重ねて大文典を刊行せりと云、此人の文典は其後嚴に評破されたりと雖も、創業者の苦心は或は守成者の意外にも出づることあるべきが故に、其功は固より没すべからざるなり、然りと雖も歐洲梵語學と名づくべき歐洲一般の學者をして梵語學に就くを得しめし次第は左の如し、

今を距ること百餘年前西曆千七百八十四年、即ち我天明四年甲辰の歲に當り、サー、ウイールリアムデヨンス、ウイールキンス、カレ、フオルスタル、コレブルーク等の諸氏の盡力に由て、印度カルカッタに於て亞細亞學會を設立せしに依て、始めて廣く婆

羅門教徒の古語たるサンスクリット并に其文學を知るの道を開きたり、其後數年の間に諸氏の梵書を英語に譯せしもの三部あり。千七百八十五年にウイルクィンズ氏は、ブハガヴドギーターと名づくる婆羅門教徒の理學書を譯し、千七百八十七年に同氏はヒトーパデーシャと題する讀本を譯せり、此本は正宗分を四段に分ち、友を得る(の利)、友と分離する(の害)、戰(の害)、平和(の利)、と云ふ題にて種々の話を舉げ、古詩を引きて面白く書きし本なり。千七百八十九年にウイリアム、デヨンス氏は、シヤクンタラーと題する淨瑠璃本を譯せり、此本は有名なるカーリダーサの筆に成る者にして、シヤクンタラーと名づくる婦人の指環紛失の始末を演せしものなり。右三部を歐洲梵學者最初の譯書とす、此後年を逐ふて梵文の原書并に其翻譯書の出版は、印度并に歐米各國に於て頗る盛なり。仍て今時は其原書及び譯書の版本の數は未だ其確數を得ずと雖も、固より百を以て算すべきなり、所謂四吠陀の如きも梵本は殆んど皆已に出版成れり、其翻譯も已に成れる者數部あり、但し此の如く出版せし原本も譯書も多くは是れ婆羅門教徒の書にして、梵文佛書は原譯共に其數甚だ少なく、出版の時代も他の梵書に比すれば頗る後に位す、今思ひ出すに任せ梵本

并に其譯書の出版者及び其年代を擧ぐることに左の如し。

第一 普曜經又は方廣大莊嚴經の梵本 印度人ラーヂェーンドララーラ、ミトラ校訂、千八百五十三年我嘉永六年より、七十七年我明治十年に到り、印度カルカッタに於て刊行す、校訂者の英譯あり、別に此經の西藏譯を佛蘭西語に譯せし本あり、佛人フコー氏譯出、千八百四十八年より四十九年に到り、巴里に於て刊行す、我嘉永元年二年に當る。

第二 文殊師利現寶藏經又は大方廣寶篋經の梵本 印度人サトヤヅラタ、サマスマラミ校訂、千八百七十三年我明治六年印度カルカッタに於て刊行す。

第三 阿彌陀經の梵本 英國牛津大學校博士マクスミューラル校訂、千八百八十年我明治十三年倫敦に於て刊行す、校訂者の英譯あり。

第四 大雲請雨經の梵本抜鈔 英人ベンドール鈔出、同年同處に於て刊行す、鈔出者の鈔譯あり。

第五 金剛經の梵本 博士マクスミューラル校訂、千八百八十一年我明治十四年牛津に於て刊行す、校訂者の英譯は東方聖書第四十九冊中にあり。

第六 無量壽經(異本)及び阿彌陀經(再刊)の梵本 博士マクスミューラル及び南條文雄校訂、千八百八十三年我明治十六年牛津に於て刊行す、校訂博士の英譯あり、同上。

第七 般若心經及び尊勝陀羅尼の梵本 校訂者前の如し、千八百八十四年我明治十七年牛津に於て刊行す、校訂博士の心經の英譯あり、同上。

第八 法集名數經の梵本 笠原研壽校訂、博士マクスミューラル及びグエンツェル氏に依て、校訂者の死後、千八百八十五年我明治十八年牛津に於て刊行せらる。

第九 佛所行讚經の梵本 博士コウエル校訂、千八百九十三年我明治廿六年牛津に於て刊行す、校訂者の英譯は東方聖書第四十九冊中にあり、同冊中に文學博士高楠順次郎の支那譯觀無量壽經の英譯あり。  
右の外印度及び露國に於て刊行せし佛經の梵本數部あり、方廣大莊嚴經、百緣經等の全部、入楞伽經、金光明經等の一部分なり。

以上は佛經梵本の出版を經し者なり、此他梵本より直に歐語に譯せし者は法華經

の翻譯二部あり、第一は佛蘭西語の譯なり、佛人ブルヌフ譯出ス、千八百五十二年我嘉永五年に巴里に於て刊行す、第二は英譯なり、和蘭人ケールン氏譯出ス、千八百八十四年我明治十七年牛津に於いて刊行す、右の外支那譯の佛經より英語に譯せしもの、英人ピール氏の譯出のみにても金剛經、阿彌陀經、佛本行集經、佛所行讚經、法句經、法華經、普門品等の數部あり、此中抄譯のものあり、若し夫のパーリ語の佛典三藏に到りては、余他日別に演述記載するとあるべし、律藏全部の原書も已に出版せり、古來和漢の佛教家にはサンスクリットとパーリとの相違を知りし人なきに似たり、此二語殆んど大小乗の相違を表する者の如くにして、印度以南に弘傳する佛教徒の三藏は皆パーリ語を以て書せるものにして、此語を以て書する所の佛書はサンスクリットを以て書せる佛書に比すれば大に読み易し、和漢の佛書に汎爾に梵語と呼ぶもの、或は上古のサンスクリットと、夫より出でし所の摩揭陀國の方言と呼ばるゝパーリ語とを併せ呼ぶもの、如し、即ち法の字の梵語に曇摩と達磨との二様の書法あり、尤も舊譯家に曇摩を用ゐ、新譯家ニ達磨を用ゐるもの、如し、パーリ語にてはドハンマ Dhamma と云ひ、サンスクリット語にてはドハルマ Dharma と云

ふなり。

猶歐米人の梵語を學ぶに極難を覺えざる一理由あり、即ち梵語の文法は大體希臘、羅旬、獨逸等の文法に同じくして、唯微細なるを加ふる而已、例せば梵語の名詞に八轉聲と云ふ格の區別あるも、羅旬には六(具)と於とを欠く、希臘獨逸には五(具)と從と於とを欠く而已なるが如し、因て歐洲梵學者は夙に梵語文典を編集發行せり、即ち英人の手に成りし者は千八百五年にはコレブルーク氏同六年にはカレー氏同八年にはウイルキンズ氏同十年にはフオルスタル氏同二十年にはヤテス氏同四十年にはウイルソン氏の文典、同六十九年にはモニエル、ツイルリアムス氏の小文典、此本の和譯散斯克小文典三冊は明治十年十二月に我大谷派本願寺教育課の藏版として發兌せり、同七十七年には同氏の大文典の第四版を發兌せり、獨逸國にては千八百二十七年と三十二年と三十四年とにポツプ氏其文典を刊布し、千八百五十二年と五十五年とにペンファイ氏モ其文典を發行せり、此外千八百七十九年米國のウイトネー氏も委き文典を出版せられたり、是より先き千八百七十年にマクスミューラル氏も其文典の第二版を發兌せられたり、其第一版は千八百六十六

年に成り、之を獨逸語に譯せしものは六十八年に發行せり、又千八百八十六年と千九百一年とにマクドナル氏の文典の發行あり。

以上英米獨逸三國の間に已に十四個の文典作者ありし、此外尙佛蘭西、埃地利、露西亞等にも文典家あるなるべし。

又梵語辭典の版行成りし者は、ウイルソン氏の梵英辭典の第三版は千八百七十四年に印度カルカッタに於て發兌せり、是より先きモニエル、ツイルリアムス氏の英梵辭典は千八百五十一年に發行し、同氏の梵英辭典の新版は千八百九十九年に牛津に於て刊行す、此外ベンファイ氏の梵英辭典は千八百六十六年に倫敦に於て刊布し、ホルター氏の英梵辭典は三冊にして、千八百七十七年と七十九年と八十一年とに各一冊を印度カルカッタに於て發兌す、尙歐洲梵語學歴史中に於て最も大功ありとする者は獨逸人二名、即ちポイトリンク及ロート二氏の編集せし梵獨大辭典なり、全部大本七冊、千八百五十五年より七十五年に到る二十一年を経て刊布成れり、此は魯西亞政府より出版の費用を給せり、即ち同國の首都聖彼得堡に於て發兌せり、尙ポイトリンク氏は其後右の大字典を抄略して小字典を出版せり、マク

ドネル氏の梵英辭典は千八百九十三年に牛津に於て刊行せり。右の如く歐人の梵語學に勉むることは實に東洋人の意想外に出づる所なり、今日歐米各國の大學校には率ね梵語博士ありて梵語文學の一學科あり、是れ比較言語學と比較宗教學との爲めに梵語を學ぶことは最も缺くべからざる業なるが故なり、尙他日更に記する所あるべし。

### 十三 梵文無量壽經

明治十二年十二月余亡友笠原研壽と英國オクスフォードに在て梵語文學を學習せし際始めて梵文大經の寫本一部を見る、此れは英國倫敦に在る亞細亞學會の藏本なり、其傳來の緣由を尋ねれば、印度の東北尼波羅國より將來せしものと云ふ、此國より西洋に傳はりし佛經の梵本は其數頗る多し、英佛二國の内四五ヶ處に於て各同文の寫本を藏することあり、此經の如きも其一なり、即ち右の倫敦の寫本を謄寫せし後に牛津と劍橋との二大學校の圖書館に各一部あり、佛蘭西國巴里の國立圖書館と、同府の亞細亞學會とに各一部あるを見るを得たり、因て五部の寫本を校

合譯讀せし際、支那十二代の異譯の中五部の現存する者と比較して、全く梵文の異本なることをも知るに到れり、已に五部の寫本を歐洲に於て見寫し、其後印度甲谷他にて一部と、又河口慧海氏將來の寫本をも校合することを得たるは大幸なり、と雖も、此七部は元來同一の梵文を異時に異なる筆者の寫せしものと云ふまでにて大異同なし、或は五存七缺と稱する中の七缺の支那譯中の一部の爲めの梵本なりしならんとも臆定することを得べしと雖も、五存の異譯の中には文々句々の梵漢合璧と云ふ程に符合する所は甚だ希れなり、唯一部の大綱即ち彌陀成佛の因果と衆生往生の因果を明すことは同一なり、固より寫本のことなれば傳寫の誤あるは免かること能はざる所にして、第二十一願即ち具卅二相の願成就の文の如きは康僧鑑の譯文の如く、今の梵文にても第二十二の願成就の文と觀勢二菩薩の名を擧ぐる段との次に在りと雖も、其第二十一の因願の文は七部の寫本に皆之を脱せる等のこともあり、此因願の文の脱落したることは、西藏語の大經の譯文に照して彌々判然たることを覺えたり、此西藏譯こそは吾人の得たる梵文と頗る符合するものゝ如し、但し予未だ西藏語を解せず、予が學友なる獨逸人ゲンツェル氏曾て予

が爲めに西藏譯より讚佛偈及び願文を英語に譯して示せしに依て、之を判じ得るなり。因みに西藏譯の三藏は版本にて全部倫敦の印度事務省の圖書館に在り、我が眞宗大學にも殆んど全部を藏せり、其中多くは梵本より譯し、遺教經の如きは支那譯より譯せしものなることは其目錄に依て之を知る。

是の如き理由なるを以て、固より吾人の得たる梵文大經は必ず正しくして、之と合せざる支那譯は不正なり、杯と云ふべきことにあらず、吾人が言はんと欲する所は殆んど其反對に出づるなり、即ち後世今日まで寫傳せし梵文の大經も、往々支那譯に依て其脱誤をも見出だし得たることあり、况んや五存の支那譯中にては翻譯の年代の前後を以て次第を立つれば、第一後漢の時支婁迦讖の譯せし平等覺經と、第二孫吳の時支謙の譯せし大阿彌陀經とには、共に因願を合して二十四願とする邊は一致せりと雖も、其他に異同多し、次に第三曹魏の時康僧鎧の譯せし無量壽經と、第四李唐の時菩提流志の譯せし無量壽如來會とは、固より同本異譯なるを以て、因願を開きて四十八願とする所は同一なりと雖も、此亦子細に比し來れば具略なきに非ず、况んや第五趙宋の時法賢の譯せし大乘莊嚴經の如きは、因願の數三十六な

り、其他前の四譯と其說相の合せざる所多からずとせざることなれば、到底印度に於て或は三種或は五種或は十餘種の梵文の異本ありしことなるべし、此れも同時代同地方に此多數の異本のありしことなれば、或は疑ひなきに非ずと雖も、若し支那譯五部の年代の相距ること、譯經三藏の生處の同一ならざるより考ふれば、畢竟上古口傳の經説を後世書に筆したる時、已に各人各處に於て此事に従ひしより、遂に同一の經説に異本の多きを見るに到りしものなるべし、但し假令異本にもせよ、已に大經の梵文の異本なり、故に余輩に於ては從來依用の支那譯大經を研究するに於て、此れを以て他の異譯を参考せし精神を以て之を参考すれば、其益あることは枚擧に遑あらず、因て吾人匪勉此梵文を校訂して、遂に明治十六年五月末に到り、英國に在て刊行することを得たり、其時は笠原は已に肺病に罹りて歸朝し、東京に在りしを以て、余は直に一本を寄せたりと雖も、同年七月十六日を以て歿せしが故に、此刊本を見るを得ざりしなるべし、此刊行の爲めに更に梵本を校訂せしは、博士マクス、ミューラル氏と余とにして、刊行者は牛津のクラレンドン印書局なり、此局は其地の大學校に屬するものにして、明治十四年に梵文金剛經を刊行し、其後大



小般若心經法集名數經等の梵本を出版したり。

## 第十四 佛陀伽耶菩提樹片略史

明治十七年六月十九日印度カルカッタ博物館監督英國ドクトルアンデルソン氏本邦社寺古寶物巡覽の爲め、其妻及び京都府屬員山田虎太郎氏と共に我本山に到る。本山は役員和田圓什、三那三能宣等の諸氏をして之を涉成園に接待せしむ。文雄も亦其後に從ひ款語すること二時許話次偶印度佛陀伽耶菩提樹の事に及ぶ。アンデルソン氏云く、今を距る四五年前余親しく佛陀伽耶に到り、上古の菩提樹の土中より掘出だされしものを得たり。釋迦牟尼は正しく此埋没せし樹下に坐して等正覺を成じ給ひしなり。今時生植する所の樹は後年に植え繼ぎしものなり。此古樹の小片三個あり、一は錫蘭島の佛寺に、一は緬甸國の佛寺に寄附し了れり。今度殘る所の一個を日本の一大佛寺に寄附せんが爲めに持ち來れり。聞くが如きは京都に一寺あり、今堂宇の建築に著手せり。宜く其寺に寄附すべしと、余甚だ其寺を見んと欲す。文雄云く其寺は即ち我大谷派本願寺是なり。請ふ兩堂の作事處を見よと、遂に三

那三氏と共に導ひて作事部所轄の地を遍觀せしむ。此間アンデルソン氏決然として文雄に謂て云く、然り此れ果して聞く所に背かず、此堂成るの日、輪囷當に人目を駭かすべし。余將來の菩提樹片を以て永く此寺に寄附せんとす。他日子來り話せば樹片を附與すべしと、乃ち別を告げて去れり。越えて同月二十六日文雄赤松連城、加藤正廓二氏と共に、約を踐んでアンデルソン氏を圓山也阿彌の寓樓に訪ふ。偶町田久成、寺田弘二氏も亦來會し、印度の佛教に關する古迹の事を問ひ、大に異聞あり。而してアンデルソン氏云く、今年十二月印度に歸るの後余が輓近刊布する所の著書を贈致すべし。其中に往年發見せし古菩提樹の事をも詳記せり。又此事は英人カニンガム氏の著はせし古事學報告等に最も詳なりと云ひて、遂に約の如く右の樹片を文雄に附屬せり。アンデルソン氏又云く、余已に三個の菩提樹片を錫蘭、緬甸及び日本の佛教徒に寄附す。固より往年發掘せし古樹の全分は、在カルカッタ博物館に保存して、余の監する所に係ると雖も、此の如く他人に附與することは、在印度英國政府の許可を経るに非ざれば能はざることなり。請ふ注意して保存あるべしと云へり。區々たる小樹片なりと雖も、已に古事學者の鑒定する所にては、釋尊最初成道

の時の菩提樹の遺片なりとす、然るときは金剛座上の畢鉢羅樹なり、植物學に用うる羅旬語の名目はフィカスレリヂオサにしてフィグ即ち無花果樹の一種なり、本邦に生植する所の菩提樹とは異なりと云へり、嗚呼三千年の後にして、之を十九年間印度に在りし英人アンデルソン氏日本に將來し、七年有半英國に留學せし眞宗の末弟南條文雄に附屬し、我大谷派本願寺に寄納するも時運の然らしむる所なりと雖も、此れ亦希遇と謂はざるを得ざるなり、唯久しく地下に埋沒せしものなるを以て全く腐蝕す、其長さは凡そ五寸九分なり。

今因みに佛陀伽耶菩提樹に關する記事を諸書より鈔出し、參考に供すべし、唐僧玄奘、西域記卷八云、

戒賢伽藍西南行四五十里、渡尼連禪河、至伽耶城、城西南五六里、至伽耶山、溪谷杳冥、峰巖危險、印度國俗稱曰靈山、伽耶山東南有二峯、堵波、其南有二峯、堵波、東渡大河、至鉢羅笈菩提山、唐言前前正覺山、西南行十四五里、至菩提樹、菩提樹垣正中、有金剛座、金剛座上菩提樹者、即畢鉢羅之樹也、昔佛在世、高數百尺、屢經殘伐、猶高四五丈、佛坐其下、成等正覺、因而謂之菩提樹焉、莖幹黃白、枝葉青翠、冬夏不凋、光鮮無

變本文を見るべし、此下無憂王と設賞迦王との菩提樹を剪伐し、焚燒せし等の因縁あり。

英人カニングム氏古事學報告卷一に云く、

有名なる菩提樹は今尙現存すと雖も、頗る朽腐す、即ち一の大なる幹と、西に向ふ三の枝とは、尙綠なりと雖も、其他の枝は皮なくして腐蝕せり、又此樹は必ず屢植え繼ぎせられしものなるべし、如何となれば現今のピツバル(即ちピツバラ)樹は、四邊の郷里の平地よりは、少なくとも三丈も高き平なる塲處に在るが故に、(文雄案するに、此考案を以て上古の菩提樹の久しく地下に埋沒して在りしことを知るべし。)

英人イーストウイク氏印度案内記孟加拉部百九十一頁以下に云く、

伽耶は人口六萬六千八百四十三人あり、佛陀伽耶は伽耶を距ること七英里なり、(一英里は我十四丁四十間許、初めの五英里は樹影なしと雖も、道路は善し、終りの二英里は車馬を用ひ難し、歩行せざるを得ざるなり、阿輸迦王の菩提樹に周らせし垣の西北に古き小さき堂あり、其中に佛の立像を安置す、千八百七十六

年(明治九年)緬甸王三士を派遣し、佛陀伽耶佛堂の修復を監督せしむ、其明年一月此三士其地に著し、二重の塀を築きし際、種々の古物を掘出だせり、而して菩提樹の保存にも着手せり、同年印度人ラーヂェーンドララーラ、ミトラ氏其地に到りて緬甸人の業を監督し、盛なる報告書を作れり、

其報告書は題して佛陀伽耶と云ふ、即ち佛陀伽耶誌なり、此書は西曆千八百七十八年即ち明治十一年、印度カルカッタに於て刊行せしものにして、大本一冊なり、本文二百五十七頁、別に目次と地圖及び古代の建築等の圖五十一片あり、我東京駐劄英國公使館より東京大學へ一部を贈致せり、添ゆるにカニンガム氏等の古事學報告書四冊を以てせり、當時の大學總理加藤弘之氏より参考の爲めにとて此等の五冊を余に示されたり、因て先づ佛陀伽耶誌一部を通讀し、其要を鈔録せしことあり、今之を左に抄譯して讀者諸君に報せんと欲するなり、佛陀伽耶誌第九十二頁以下に菩提樹及び金剛座の事を詳記して云く、

菩提樹は佛陀伽耶に於て人の尊敬する所の者の中最も神聖なる者なり、釋迦曾て其下に坐して満足智を得しを以ての故に、人此樹を見て最大恭敬を加ふ

るなり、婆羅門教徒は此樹を以て婆羅門神が自身に植えし所とす、然れども佛教徒は之を錫蘭王ドウグドハガミニの植えし所と云ふ、此王の名は女性の形なり、因て此話は釋迦に乳糜を供養せし處女善生に關係するものと云ふことを得べし、さて此の樹は原と四邊と齊しき平地に立ちしものなるべし、然るに其長大陰鬱なるに及んでや、村民恐らくは土を其四邊に積み、高壇を築きて此樹を保護せしものなるべし、此壇は一尺半より高からざりしならん、而して人民が日夕の涼を納るゝ爲めに會集談話する適當の場處なりしならん、時此村に到りし隱者は、常に此高壇を以て寓處と定め、又學者は信徒に對し、此壇上より宗教並びに道德の講話をなせしものなるべし、此の如くにして時月を経るの間だに、此處は宗教布衍に關係あるものとなり、神聖なる場處の隨一となれり、此れを印度諸處に在る多くの神聖なる樹木の歴史とす、而して現今印度の各地方に於て此類の樹數百株あり、因て菩提樹の歴史も亦然りと謂ふことを得べし。

其後信徒が常に樹根上に水を灌ぎし等よりして、菩提樹の新根が地上に發生

すること相續せり、而して其新根を覆ふ所の土を保護し、且つ壇上まで達する所の水を防ぐ爲めに、一發明を生じ、樹幹を圍んで小輪(即ち小圓堤)を朽工の細工を以て作ることに到れり、千八百九年(文化六年己巳)にブチャナン、ハミルトンは、金字塔の形をなせし五つの階級を作る所の五輪を見られたり、此は年時を經るに従ひ作り添えしものなるべし、千八百六十三年(文久三年癸亥)には樹根が此五階級の最上にまで發生せり、而して去年(此佛陀伽耶誌を作りし前年即ち明治十年)古樹の傍に新樹を植ゆるに當り、其新樹の爲めに従前の金字塔の頂に圓筒状のものを築くことの手術を見出だせり。

千八百六十三年(文久三年癸亥)に樹垣の北邊の境崩せし時、前に謂ふ所の壇の十二層を見得るに到れり、又去年(明治十年)同き垣の西邊の多分を壊ち、新垣を築くに當り、余は壇の四層を見たり、壇の每層其厚さ一尺四寸より一尺七寸に及ぶ、而して最上には薄き石灰層を以て蓋ひし一寸五分の厚さなる混合物の一層あり、今時の高平場は原との地平より高きこと二丈四尺、故に必ず悉皆にては十六層の壇ありしものなるべし、さて五階級を合して其高さ七尺六寸、而

して其上に加ふる所の新圓筒状のものは高さ三尺六寸なり、此等の三點を合計すれば其頂上は原との地平より高きこと三丈五尺なり、故を以て其上に生植する所の菩提樹も漸次に其高さに及びしなり。

若し同一の樹が古代より今日まで此地に存在せしならば、混合物を以て作りたる壇の階級や他の階級は各凡そ八十年宛の年代を示し、而して壇の年代にも明なる目的を得ることなるべし、然れども此樹は屢變に遭へり、即ち少くとも三度は伐り倒され、而して幾度も恢復されたり、但し此樹を恢復する方法は、古樹を伐り倒して、其地位に新樹を植ゑしには非ずして、種より生せし樹苗を、古樹の腋か或は朽腐せし跡に植ゑ込みしなり、因て隔絶せる他處より持ち來りし異樹には非ず、唯親樹より新に發生せし芽なりと假定せしむるが爲めなり、之に依て此所爲を發見せらるゝことを防ぐ爲めに、古樹の幹を蓋ふことの必要を見出だせり、而して壇の成立は全く不規則なり、夫故に階級に依て年代の説を論定することは不可得なり、唯此地(佛陀伽耶)の甚だ古き場處なることを證するに足る者とす。

西曆六百三十七年(舒明九年唐貞觀十一年丁酉)玄奘が此地に到りし時は、樹下の壇は高平場より分明に見え、其上に石の座ありしこと其記に明かなり。曰く菩提樹壇の正中に金剛座あり云云(西域記第八卷十八番右以下の文を引けり)。今時の假定にては、右の石は現今グーギーシユヴリー天女の堂に在るものと同一なりと云ふ(若し然らば金剛座即ち金剛寶石は、今時は婆羅門教徒の奉ずる所の天女堂中に在り、佛陀伽耶誌には此石の細圖あり)。

菩提樹の歴史に就て玄奘は云云せり(西域記第八卷十八番左以下を引けり)其の中無憂王(即ち舊譯家は阿育王と呼び、新譯家は阿輸迦王と云ふ)の菩提樹を伐りしことは、尼波羅國より英領印度及び英佛二國に流傳する阿輸迦傳にも見ゆれども、設賞迦王の此樹を害せしことは、ホッヂュンソン氏が尼波羅に於て集めし佛教梵書中に其説を見ざるなり。カニングム氏は此を紀元後六百十年(推古十八年隋大業六年庚午)に在りし事と測定せり。

第十九世紀の始に當り、ブチャナン、ハミルトン氏は此菩提樹を見しに、定めて一百年を経しものなるべしと雖も、尙十分なる勢力を有せし由、マールティン氏

の東印度史第一冊七十六頁に見ゆ。カニングム氏は千八百六十一年(文久元年辛酉)の古事學報告第一冊五頁に云く、有名なる菩提樹は今尙現存すと雖も、頗る朽腐す、即ち一の太なる幹と、西に向ふ三の枝とは尙緑なりと雖も、其他の枝は皮なくして腐蝕せり(以上前に既に之を記せり。此緑なる枝は恐くは若き樹に屬するものなるべし、如何となれば明かに同一ならざる樹木が集合生長する數多の樹幹を其他に見るが故にと云へり。千八百六十三年(文久三年癸亥)に余が見し所にては、菩提樹は朽枯腐蝕し、二百年弱を過ぎし程のものなりし、其時は幹は西の方に傾き、二個の緑なる枝と三四個の枯れたる枝の株を有せしなり。然るに千八百七十六年(明治九年)には右の菩提樹は朽枯し、大風の爲めに吹き倒されたり、而して今は凡そ三尺程の高さなる樹苗其地位を領す。

又右菩提樹の牀の金字塔の階級の北邊の上に婆羅門教の神像を安せり。第一は摩醯首伐羅(此に大自在と譯す)四臂を有す、徳利と乞鉢と珠數と蓮花とを持てり、此像の右の下なる手掌に蓮花の標印あり、而して左右二邊には各婦人の隨侍者あり。第二は通常なる形相の章首紐の像、男女の二隨侍あり。第三はハラ

(男神)とパールグライ(女神)となり、此女神は其主即ち男神の膝の上に坐し、其兩手を男神の頂上に置けり、又男神は其一手を女神の胸の上に置き、一手を女神の腮上に置けり、此像の臺石に今代の緬甸語の碑文あり、第四はガネーシャ天なり、又東邊にはパドマパーニ(此に蓮花手、或は執蓮花と譯す、此れ西域記に謂ふ所の觀自在菩薩歟)と一鬼の像あり。

右鈔譯了る、尙佛陀伽耶の古寺は、玄奘の時は無論佛教徒の所有なりしも、滄桑の變に遭遇し、今は婆羅門教中の一派シグイト即ち大自在天派の所有となり、寺主の稱號をマハントと云ふ由なり、故を以て金剛寶石も同教徒の奉ずる所の天女の堂内に移せしものなるべし、因みに頃日英國より送致せし、在倫敦亞細亞學會雜誌千八百八十四年(明治十七年)七月刊行の冊に附録とせし、同會第六十一年報百四十四頁以下に、英國牛津大學校梵語學博士モニエル、ウイリアムス氏が其前年五月十九日右學會の記念會に於ての演說案を掲載せり、此博士は文雄が尙牛津に在りし時、明治十六年十一月比該地を發し、印度に到り、翌年三四月比英國に歸られたり、其演說中左の一條あり、實地を経験せし人の說にして、英書に見ゆる者の、余が目に觸れ

し中のや、珍らしきものと覺ゆるが故に、之を鈔譯す。

余が佛陀伽耶に到りしことを陳すべし、余が考にては此地は唯今にては印度の希有なる地方の隨一なり、而して恐くは全世界中最も感心すべき土地の隨一なるべし、誰も知るが如く此處に神聖なるピーバル樹あり、彼年少なる王子喬答摩は、六年の苦行と觀念との後、此樹下に於て佛陀にまで改轉し、此處を以て燒點となして、其信の光線を放ち、今日にては宇内の宗教中最も多き信徒を有するに到れり、曾て千八百七十六年(明治九年)に余が此處を訪ひし時には、尙目立ちたる高塔も保存せられ、其四邊には高平場もあり、而して佛陀の神聖なる無花果樹の正統なる子孫もありし、其時カルカッタに於て英國皇太子ウエルス親王に謁するが爲めに、印度に來りし緬甸國の高位の人人は、此處に於て禮拜してありし、然るに過る二年(明治十五十六兩年)間に於てカニンガム氏と其補助ベグラル氏とは總て此舊觀を變せり、而して此結果に於て彼等は實に少なからざる仕損じをなせしものなり、古の寺は尙現存すと云と雖も、もはや之を見ることを得ず、其寺は緬甸國の大なる塔に似て而も黄色に塗り立てし

## 第十四 佛陀伽耶菩提樹片略史

全く新なる煉瓦造りの建築を以て包まれてあり、此新築は中央と兩傍とに塔を有せり、其中央の塔は高さ十九丈六尺にして、七列の尖りたる傘形の飾を頂けり、此建築費は洛又ルービー(或は十萬金と云ふべし多額を指す)に當れり、而して今殆んど成就せり、唯餘す所は入口の上に竹の棧敷様のものあり、其上より前に投げ出す所の飾尙未だ成就せざる而已(中略)さて余が注目せしことあり、錫蘭島より來りし富有なる佛教徒は、輒近此寺の後面に平かなる石片を安せり、其上面には今時の新説を用ゐずして、西曆紀元前五百四十三年(神武紀元百十八年、安寧六年戊午、四裔年表一の六十五頁、此年の下に云く釋迦牟尼卒と云ふ)佛陀涅槃年代の古説を興へし文を彫刻せり、寺の入口の右邊に高さ土の壇あり、其上にビーバル樹生長せり、而して其下には韋首紐と淫婆との像を安せり(前に擧ぐる所の佛陀伽耶誌を參考すべし)此處に於て婆羅門教徒は兩々三々相寄て米の團圓にせしもの(握り飯の類歟)を以て(供物として)敬禮をなし居れり、其同時に佛教徒の巡拜者は近傍に立ちて其樹を禮拜し居れり、此事は佛教徒と婆羅門教徒が互に相關係し、且つ雙方の堪忍し居ることの編合の奇

なる例解なりと余は感覺せり。

以上鈔譯する、佛教の寛大にして他教を包含することは、印度に於ても此の如し、本邦に於ても古來神道を包有し、支那に於ても儒道二教を合攝して圭角なきことは實に古今の史乘に徴して明かなり、佛教徒たる者偏狹に涉らず、心を公平寛大の境に住し、佛の無縁平等の大慈悲心を得奉り、自信教人信、自行化他の義務を怠るべからず、尙又君子は和すれども同せずと云ふことを忘るべからずと云ふこと爾り。

## 第十五 佛涅槃年代考

明治十三年の冬、亡友笠原研壽、余と同じく英國牛津に在り、佛涅槃年代考一篇を草し、之を明教社に投じて其新誌に掲載せり、其緒言に云く、余聞く、古時印度僧の支那に來りしもの、往々貝葉に年々黒點を加ふる等の方を以て、佛滅の年數を記したりと云云。

十三年九月、余倫敦に在り、日々印度事務省書籍館に行き、其所有たる本邦黄葉版の大藏經を閲讀し、増補英譯大明三藏聖教目錄を作りて、牛津大學印書局に於て刊行

せしことあり、而して此大藏經は贈太政大臣岩倉具視公の寄贈せられしものなり。聞く、公明治七年全權大使となり、英京に在りし時、英國海軍附屬教師ピール氏、一日公を訪ひ、印度省書籍館に日本刊行の佛教書を藏せんと欲するの意を語りしに、公之を領し、其明年大藏經全部を送致せられたり。因てピール氏其略目録を作り、藏中の一斑を公衆に示されたりと雖も、纔に三藏目録中若干の書目を挙げし而已にて、未だ全藏の目録となすに足らず。十二年一月余始めて此略目録を閲し、頗る慊然たり。故を以て十三年九月に到り、該書籍館長學士ロースト氏の周旋に依り、印度事務宰相よりの特許を得て、三旬間に全藏を一閱し了り、一々の書目に附するに支那北京の音を以てし、譯書には其書の梵名と譯者の名姓年時とを加へ、藏中一千六百六十二部の概略を挙げ了り、此事たる、固より余が英國に留まり、印度古文學を研究せし餘力の業なりと雖も、亦以て大に温故知新の助となれり。因て今傍論なることを願みず、其始末を述ること左の如し。

余閱藏の際、奇説異傳あれば、輒ち抄録して座右に置き、時に英語に譯して歐米人に示せしことも尠しとせず。其中に佛涅槃年代の異説につき、曾て笠原子の草せし年

代考に擧ぐる説と殆んど同一にして、而も奇なる一傳あり、余英の牛津に在りて之を英語に譯し、博士マクスマユール氏に示せしに、同氏は之を一雜誌に投せしことあり。此傳説は已に藏中に在ることなれば、固より新説に非ずと雖も、古書中の説は讀者往々輕卒に看過するの弊なきにあらざ、故に今其原文を延書として讀者に便し、更に笠原子の年代考と彼此参考せられんことを要するなり。

此傳説は南山の道宣律師の編集せし大唐内典錄より抄出せり。此書本と十一卷あり、今分つて十六卷に作る。明の北藏修宮二函中に在り。全藏一千六百六十二部の中にては、第一千四百八十三部に位す。其第四卷上二十丁右以下に擧ぐる所の全文、及び余の附註左の如し。

善見毗婆沙律

十八卷、道慧ノ宋齊錄、  
及ヒ三藏記ニ見ユ

右一部一十八卷

(前齊武帝の世、西曆四百八十三年より四百九十三年に到る)に外國の沙門僧伽

跋陀羅齊ニ(譯シテ)  
衆賢ト云フ譯す

師資相傳へて云く、佛涅槃の後に優波離既に律藏を結集し訖り、即ち其年七月



十五日に於て自恣(梵にブラウラナ)と云、即ち招待と云語の意なり)を受け、  
 り。香花を以て律藏を供養し、便ち一點を下して、律藏の前(律藏寫本の卷端を謂  
 ふ歟)に置けり、年々是の如くせり、優波離涅槃せんと欲する時(東方聖書第十卷  
 には西曆紀元前四百四十七年とす、後諸師の年代も同書に依る)、弟子の陀寫俱  
 に付す、陀寫俱涅槃せんと欲する時(前三百九十七年)、須俱に付す、須俱涅槃せん  
 と欲する時(前三百五十四年)、弟子悉伽婆に付す、悉伽婆涅槃せんと欲する時(前  
 三百年比)、弟子目健連子帝須に付す、目健連子帝須涅槃せんと欲する時(前二  
 百三十三年)、弟子旃陀跋闍に付す、是くの如く師資相付して、今の三藏法師(其名を  
 擧げず、此れ即ち衆賢三藏の師)に至る、三藏法師律藏を將ちて廣州(今の廣東地  
 方)に至り、舶に上り、返還し去るに臨み、律藏を以て弟子僧伽跋陀羅に付す、羅は  
 永明六年(西曆四百八十八年)に沙門僧倚と共に、廣州竹林寺に於て、此善見毗婆  
 沙を譯出す、因て共に安居し、永明七年庚午の歲、七年當に八年に作るべし、然ら  
 ざれば干支と合せず、即ち西曆四百九十年也、且つ譯出の明年安居せしとなら  
 ば前の六年は當に七年に作るべし、七月の半を以て、自恣を受け、竟り、前師の法

の如く、香華を以て律藏を供養し、訖り、即ち一點を下す、其年に當りて計るに九  
 百七十五點を得たり、(二點は是れ一年なりと、  
 趙伯休梁の大同元年に廬山に於て苦行律師弘度に値ひ、此の佛涅槃後衆聖點  
 記を得たりしに、年月は齊の永明七(當に八)に作るべし、年に訖れり、伯林、弘度に  
 語りて云く、永明七(八年)より已後云、何んぞ復た點せられざると、弘度答へて云  
 く、此れより已前は、皆是れ得道の聖人、手自ら點を下せり、貧道は凡夫なり、たゞ  
 奉持頂戴すべき而已、敢て輒ち點せずと云へり。  
 伯休は此の舊點に因りて下推して、梁の大同九年癸亥の歲(西曆五百四十三年  
 に至るに、合せて一千二十八年を得たり。  
 長房は伯休の推す所に依り、大同九年より今開皇十七年丁巳の歲(西曆五百九  
 十七年)に至り、合して一千八十二年を得たり。  
 若然れば、即ち如來の滅後、始めて千年を出で、聖を去ること尙ほ邇し、深く歡喜  
 して慶ぶべし、願くは共に誠を勵まし、同じく遺法を宣べん。  
 以上笠原子の所謂貝葉に年々黑點を加へて佛滅の年數を記すると云ふ傳説なり、

此に依て推考するに、先づ最後の合計に一千八十二年を得たりし隋の開皇十七年丁巳の歳は、即ち我が神武天皇紀元一千二百五十七年、推古天皇五年に當るが故に、千二百五十七の中より千八十二を引き去れば、殘數は百七十五なり。因て佛涅槃の年代は神武紀元一百七十六年、懿德天皇二十六年丙辰にして、東周の敬王三十五年、西曆紀元前四百八十五年に當るなり。即ち西曆紀元後五百九十七年に當りて、一千八十二年の合計を得しを以て、千八十二の中より五百九十七を引去りし殘數の四百八十五を紀元前に於て求むるが故なり。

因みに右神武紀元後の年代を見るにつき、廣瀬乘信氏の補纂せし四裔編年表を閲せしに、年表二の三十七丁より五十二丁に到るまで、即ち欽明八年丁卯以下の上層に施す神武紀元の年數は、一般に一年を誤まれり、即ち欽明八年丁卯は二一〇七にして八にあらざず、齊明七年辛酉は一三二一にして二にあらざるなり。凡そ庚の年は常に滿數なるを以て其前後の誤植を正すべし。

右の如くなれば笠原子の佛涅槃年代考に擧ぐるブエーラル氏の結案たる佛滅は、西曆前四百八十三年、又は二年より同じく四百七十二年又は一年迄の間に在りと

云ふ説に最も接近す。而して博士マクスミューラル氏、ヂエネラルカニンガム氏等の阿輸迦王碑文發見前に、既に進歩して西曆前四百七十七年或は八年に在りと定めたるものとも亦頗る近し。此推理説を主張せし學者の意を示さんが爲めには、曾て笠原子の企てし印度史及び希臘史の關係を辯ずるは必要なりと雖も、事甚だ錯雜すべきが故に、他日或は吾友の遺志を繼ぎ、更に起草することあるべし。

翻譯名義集第三卷二十二丁左、阿輸迦と云ふ梵語の下に、佛の降生入滅年代の異説を擧げて、二十四丁左末行以下に云く、通慧の鷲嶺聖賢錄を案ずるに、佛の生時を説くに凡そ八別あり、一には夏桀の時、二には商の末、武乙の時、三には西周の昭王の時、四には穆王の時、五には東周の平王の時、六には桓王の時、七には莊王の時、八には趙伯休、梁の大同元年に廬山に於て弘度律師に遇ひ、佛滅後衆聖點記を得て推せば、前周の二十九主貞定王亮二年甲戌に當れり。

案ずるに此推當は誤まれり、東周の貞定王二年甲戌は神武紀元一百九十四年、孝昭九年にして、西曆紀元前四百六十七年なり、而して名義集者法雲の見る所の大唐内典錄に數字の異ありしならば如何ともし難しと雖も、若し前に引く所の文を以て

正とせば十八年の相違を生ずるなりと知るべし。凡そ古今の書を閲し、年代の相違を或は會合し或は分別することは、史學上の要點なるが故に、今煩しきを厭はず、縷述すること爾り。若し夫の唐の貞觀中に法琳の定めしと云ふ周の昭王丙寅或は甲寅の歳を以て佛降生の年代とし、穆王壬申の歳を以て世尊は滅を示したまへりとの説の如きは、我宗祖見真大師も之を用ゐたまふが故に、未學敢て取捨すべきに非ずと雖も、泰西人の推理説、已に近時發見の阿輸迦王の碑文に符合し、今復支那の古傳説に接近するを以て、彼此參考せば其益或は虚からざるべしと信するなり。

以上衆聖點記の説を擧げ了り、次に翻譯名義集第三卷に依り、古來支那に於て佛の生時を説くに、凡そ八別あることをも記したり。然るに其後佛陀伽耶誌を閲讀せしに、佛出世の年代に付き、西藏、錫蘭、緬甸等に傳ふる所にも頗る異説あることを見出だせり、因て聊か之を鈔出し、讀者諸君の參考に供せんと欲するなり。即ち佛陀伽耶誌第二百三十頁以下に述る所左の如し。

佛陀の隱遁處(佛陀伽耶を指す)の事を誌す書に於て、年代に付き第一に論すべ

きは佛陀の生滅の年代なり、但し此事に關する傳説は頗る區々にして、其間殆んど二千年の相違を生ずるに到れり。

上古の印度人は、已れが宗教に僻するを以て、佛陀が祖先以來の宗教を弄捨し、最も能く其志を達せし反對者なることを恨み、且つ嫌ふが故に、後世に到りては佛陀の年代に關する傳説を求むるにつき、第一に人の着目する所なりと雖も、未だ曾て佛陀の歴史を記するの勞を取りし者は無かりしなり。已に歴史を記せず、故を以て、復た其年代をも記することなし。固より上古の印度人も、其著書に於て釋迦の名を擧ぐることにありと雖も、唯人を欺き惑はす而已、即ちマクシミユール氏の上古梵語文學史二百六十三頁に云く、印度人は釋迦を其父の父とし、又其子の祖父とせり。此は印度人が釋尊の年代に注意せざるより、往々此の如き次第の立たざる説あるに到ることを云ふ。因て印度人中婆羅門教徒の古書に付ては、佛出世の年代の確説は得難しと知るべし。

次に西藏人は、已に久しく佛教に歸し、今尙盛に信奉すと雖も、未だ曾て始祖の年代を辯定せんと欲せしことなきもの、如しチョーマ氏の西藏語文典百九

## 第十五 佛涅槃年代考

十九頁以下に依れば、西藏人の教書中に佛涅槃の年代の異説は少なくとも十四別ありとす、其次第左の如し。

第一、西暦紀元前二千四百二十二年(帝嚳廿二年己丑、四裔年表に依れば、西暦紀元前四千四年に天地を開闢し、肇めて人物を生じて亞當あり、子孫相傳千有餘年云々、二千三百四十九年に到り洪水あり、百五十日にして始めて平らぐと云、而して其年は支那にては少昊四十年壬子に當るとなり、然れば此年代は其以前七十三年なり、尙第一より第十一説に到るまでは、皆本邦に於ては所謂神代の間なり、藤井宣正氏の佛敎小史卷之一第十二章には四裔年表の誤を指摘せられたり、因りて今之に従ふ。

第二、同二千一百四十四年(夏相二年丁丑)。

第三、同二千一百三十九年(同八年壬午)。

第四、同二千一百三十五年(同十二年丙戌)。

第五、同二千三百十年(殷武丁十五年辛未)。

第六、同二千零六十年(周康王十九年辛巳)。

第七、同八百八十四年(同夷王一年丁丑)。

第八、同八百八十二年(同十三年己卯)。

第九、同八百八十年(同十五年辛巳)。

第十、同八百三十七年(周共和五年甲子)。

第十一、同七百五十二年(周平王十九年己丑、此説は翻譯名義集に擧ぐる八説の第五に當る)。

第十二、同六百五十三年(神武天皇八年戊辰、周惠王二十四年)。

第十三、同五百七十六年(神武紀元八十五年、綏靖六年乙酉、周簡王十年)。

第十四、同五百四十六年(神武紀元百十五年、安寧三年乙卯、周靈王二十六年、孔子生後六年)。

次に支那人は凡そ西暦紀元前第一世期の終に於て、始めて佛敎に歸せし者あり(案ずるに此れは秦及び前漢の時代を指す)、而して支那譯最古の佛書は紀元後六十七年に成れり(後漢の明帝永平十年迦葉摩騰、竺法蘭、四十二章經を譯す)、然れども支那人が常に歴史上の年代を明記するにも似ず、佛入滅の年代に於

ては一定の説なきもの、如し馬端臨が(文獻通考)此書は泰西人の常に引用する所に引く所に依れば、佛滅年代の異説中最古のものは西暦紀元前千百三十年とす(殷紂廿五年辛未)但し法顯の記する所に依て考ふれば、此年代は千零七十年より千零二十年までの間に在るべきものとす。又クラプロト氏の依る所の説にては、九百九十九年を佛生の年とし、九百四十九年(周穆王五十三年壬申)を佛入滅の年とす、因て佛の在世を五十年とするなり。

文雄案するに、本文に法顯記する所と云ものは、法顯傳二十九紙右以下、師子國即ち錫蘭島に到りし下第三十紙左に云く、成佛在世四十五年、説法教化、令不安者安、不度者度、衆生緣盡、乃般泥洹、々々以來、一千四百九十七年云々。

緬甸人は西暦紀元前六百二十八年(神武天皇三十三年癸巳東周襄王二十四年)を以て佛降誕の年とし、五百八十九年(神武七十二年壬申東周定王十八年)を佛入涅槃の年とす、因て佛の在世を四十年とするなり。但し佛陀伽耶に二個の緬甸語の碑文あり、其第一に依れば阿輸迦王即ち阿育王が即位の年、西暦紀元前二百六十三年より二百十八年前、西暦紀元前四百八十一年を以て佛入滅の年

とす、而して第二の碑文に依れば五百四十三年とす。

暹羅人の傳ふる所の年代は同一にはあらずと雖も、甚だ緬甸人の傳と接近せり。

錫蘭人は佛涅槃の年代に付ては唯一説を有する而已、即ち西暦紀元前五百四十四年(安寧天皇五年丁巳東周景王元年)に當るとす。マハーヴンサと云ふ錫蘭史に依るに、其前年にヴィヂャヤと云へる王新たに其王朝を開きたりと云ふ、此錫蘭所傳の佛入滅の年代は曾て久しく正説とせられ、其正説とする所以の説も多く有りと云へり、尙錫蘭史及び印度のプラーナ書、并に佛教の因縁經等に擧ぐる所の系統譜に依り、王者の歴代に平均の年代を與へて之を考るに、五百四十四年と云説は頗る隨順すべし、而して尼波羅國の佛教徒にも之を正説となす者あり。

然れども現今の古代事物學者は右の説の正不を穿鑿することに到れり、即ち碩學なるマクスミューラル博士は、上古梵語文學史二百六十三頁に佛涅槃の年代に就ての總ての異説を斥けて、此等を會通して一致ならしむることは徒

らに混雜を生ずる而已と云ひ、同書二百九十八頁に到り、總ての事實を微細に検査せし後に於て、錫蘭に傳ふる年代には、明かに六十六年の添入ありと定めて、佛涅槃を西曆紀元前四百七十七年(懿德天皇三十四年甲子、東周敬王四十三年)とせられたり。

又ヂエネラルカニンガム氏は印度の伽耶に在る太陽堂に於て碑文を見出し、たり、西曆紀元後千五百年代に書きしものにして、佛滅後の年代を記するものとす。因て週及び月の名より推算すれば、佛滅は西曆紀元前四百七十八年を以て正説となすべしと、古事學檢閱報告第三卷百二十六頁に見ゆ。但し此説は前説に比すれば、纔に一年の差異を生ずる而已、而して此説果して彼錫蘭緬甸、西藏、支那に傳ふる説よりも正なりや否やは未だ知るべからざるなり。

又前説より一步を進めて、獨逸の學者中に、佛滅の年代を西曆紀元前第四百年代(孝昭天皇七十六年辛巳、東周安王二年)より、孝安天皇九十二年庚申、東周赧王十四年までの間にありと云人もあり。

以上諸説を擧げ了る、其中衆聖點記の説には最も接近の説多しと知るべし。

今試みに佛滅年代の異説を次第して一覽表を作ること左の如し、但し毎行皇國支那西洋の年代を比較す、皇國は神武天皇紀元前後にして、西洋は總て西曆紀元前なり、尙各行下に其説を傳ふる國名或は人名を附記して參考に供すと云ふ。

日本紀元前	支那年代	西曆紀元前
千七百五十二年	帝嚳廿二年己丑	二千四百廿二年 西藏一
千四百八十四年	夏相二年丁丑	二千四百四十四年 同 二
千四百七十九年	同 八年壬午	二千百三十九年 同 三
千四百七十五年	同 十二年丙戌	二千百三十五年 同 四
千 年 頃	殷 太甲ノ時	千七百六十年頃 支那一
六百五十年	同 武丁十五年辛未	千三百十年 西藏五
四百九十九年頃	同 武乙ノ時	千百五十九年頃 支那二
四百七十年	同 紂廿五年辛未	千百三十年 同 三
四百廿四年頃	周成王卅二年丁巳	千八十四年頃 支那四

第十五 佛涅槃年代考

四 百 年 周康王十九年辛巳 千六十年 西藏六  
 三百二十一年頃 同昭王ノ時 九百八十二年頃 支那五  
 二百八十九年 同穆王五十二年壬申 九百四十九年 同六

附言前後の干支は概ね四裔年表に依る。然れども通鑑學要第二卷五紙に  
 は穆王甲寅三十五年征犬戎己巳五十年作呂刑とあり、若し然れば壬申は  
 五十三年にして十四年に非ず、尙我宗祖大師は穆王五十一年壬申とした  
 まへり(六要鈔會本第九卷四十一紙右等)之を要するに穆王壬申は十四年  
 歟、五十一年歟、或は五十三年歟、史傳の異と謂ふべし、又神武紀元後の干支  
 は新撰年表に依る。

二百二十四年 周夷王一年丁丑 八百八十四年 西藏七  
 二百二十二年 同十三年己卯 八百八十二年 同八  
 二百二十年 同十五年辛巳 八百八十年 同九  
 百七十七年 周共和五年甲子 八百三十七年 同十  
 百十年頃 東周平王ノ時 七百七十年頃 支那七

九十二年 同十九年己丑 七百五十二年 西藏十一  
 三十一年頃 同莊王六年庚申 六百九十一年頃 支那八  
 九年 同惠王八年壬子 六百六十九年 同九  
 紀元後

年 同惠王廿四年戊辰 六百五十三年 西藏十二  
 七十二年 同定王十八年壬申 五百八十九年 緬甸一  
 八十五年 同簡王十年乙酉 五百七十六年 西藏十三  
 百十五年 同靈王廿六年乙卯 五百四十六年 同十四  
 百十七年 同景王元年丁巳 五百四十四年 錫蘭  
 百十八年 同二年戊午 五百四十三年 緬甸二  
 百七十六年 同敬王卅五年丙辰 四百八十五年 支那十  
 百七十八年より 同敬王卅七年戊午 四百八十三年 支那十一  
 百九十年まで 元王五年庚午 四百七十一年 緬甸三  
 百八十年 同敬王卅九年庚申 四百八十一年 緬甸三  
 百八十二年 同四十二年癸亥 四百七十八年 カニンガム氏

第十五 佛涅槃年代考

百八十四年 同四十三年甲子 四百七十七年 マクスミューラル氏  
 二百六十一年頃 同安王二年辛巳 四百年頃 獨逸學士某等  
 以上年代の異説三十二種あり

佛陀伽耶誌に佛滅年代の異説を擧げ了りて云く、ワツシルレヅ氏は衆に冠として其著す所の佛教史に於ては、歴史上に書き出だすべき程に確實に佛陀の出現ありしと云とは如何敷として廢棄せしと云ふ、此人は魯西亞國の碩學にして、聖彼得堡府大學校の支那學博士なり、明治十四年九月余此人に伯林、巴里の二府に會晤せしとあり、會て支那に留まりしとありと云へり、尙釋迦牟尼世尊の現に出世したまひしとの有無を疑ふ人は、此人の外にも今尙歐洲學者の間にはありとも聞及べり、尙支那の異説に就ては翻譯名義集第三卷二十二紙左以下の外、世尊降生入滅年代異記と云ふ一卷の板本あり、此等及び其他の諸書に就て之を檢せば、尙發明する所少なからざるべし。

## 第十六 印度佛教の勢力

印度古今の沿革を記するものは英人ハンタル氏の印度史に若くはなし、此史は明治十五年に英京倫敦に在て刊行せしものにして、全部一冊五百四十二頁あり、ハ氏は明治二年には印度英國政府の命を奉じ、英領印度の版圖の測量に従事し、百冊の版圖測量志を編集し、其中九十冊餘は已に刊行せりと雖も、世人一般の手に入り易からず、因て抄略して九冊となして版行せしは明治四年の事なり、其本も殆んど已に乏きを告ぐるに到れり、故に今簡明なる一冊を編集するに到れりとは、明治十四年に書せし自序に見えたり、此の如き大著述者なるが故に、輓近歐人の編集せし印度史中、此史の如きは頗る信を措くに足るものと存するなり。

此史の百三十七頁より百五十六頁までに印度佛教の沿革を略叙せり、此史は西曆紀元前五百四十三年即我安寧天皇六年戊午東周景王二年孔子生後九年を以て釋尊入涅槃の年と定め、夫より西曆紀元後一千年即我一條天皇長保二年庚子宋眞宗咸平三年比までを、印度に實地佛教の現存せし時代として其次第を略述せり。

西曆紀元後第六世紀より第八世紀に到りては婆羅門教漸く印度を支配する宗教となれり、因て同教改革者クマラプハッタ及シヤンカラ阿茶留耶(舊に阿闍梨と



云等が挑撥して佛教徒を嚴刑に處せし杯と云ふ傳説もあれども、印度佛教の衰滅は刀を以て威嚇せしよりは、寧ろ自然の傾頽と宗教上の新思想の流行せしとに由るものなるべし。固より佛教の衰滅は婆羅門教の盛になりしと時を同じくせり。西曆第十一世紀には印度北邊の迦濕彌羅トオリツサ人の如きは尙佛教信徒たりし、而して馬哈默教徒が實地に侵入せし前に、印度一般の人民の信奉せし佛教は、已に印度より隱沒せり。然れども佛教は其本國に在りし時の盛況に比すれば、却て其轉入せし地方に到て、更に大なる勝利を得たり。即ち全世界人口中十分の四は今尙佛教に隨順す。其教の及ぶ所の國々は亞布我尼斯坦、尼波羅、東土耳其斯坦、西藏、蒙古、滿洲、支那、日本、東方諸島、暹羅、緬甸、錫蘭及び印度を合せて、曾て其盛なりし時の驚くべき境界の周圍を標せしことあり。現今露西亞帝國の屬地たる所よりして、太平洋中赤道下の諸島に到るまで、其寺院は殆んど連續して建築せられたり。佛教は已に二千四百年間有力なる反對者に抵抗して生存し得たり、而して今日にては基督教、馬哈默教と共に宇内の三大宗教となり、三大宗教中信徒の數は最も多しとす。印度に於ては佛教の勢力は、其以前に異なる成り立ちに於て今尙現存す、即ち特別

の一派を残せしのみならず、彼婆羅門教が始めは唯婆羅門種族の特有の信條なりしも、遂に全國人民の宗教となりし變化に於ても佛教實に其基礎を與へたり。先特別の一派とは時那教徒なり。此教徒の印度に在る者凡そ五十萬人なり。此教徒は佛教徒と同じく吠陀を以て正依書とせず、唯自身の教義に一致する所のみを用う。祭祀供物に注意せず、品行を端正にし、過去と未來との有様は、別に之を主宰する神明に關するには非ずして、偏へに自身の業に依ること、信じ、綿密に人獸一般に神識ありとす。但し此教徒の佛教徒と相違する所は、禮式作法と所拜の體の上とにあり。固より二教共に已に遷化せし賢聖を尊敬することは同一なりと雖も、時那教徒は其尊敬を擴充し、且つ頗る之が規則を施設す。又佛教徒は多くの佛陀が次第を逐て此土に出現し、而して涅槃に入りたまひたりと許すと雖も、時那教徒に比すれば尙小數の佛を尊敬するものなり。時那教徒は時の次第を立て、二十四時那(此に勝者と云)に配するに、一々の時代を以てす、且つ過去現在未來の三世に各二十四時那ありとす。即ち彼徒の寺院には白色或は黒色の蠟石の極大なるものを以て作りたる此等の聖人の像を安置す。其中現在の二十四時那中特に最後の二時那を尊敬

すること他に超えたり、即ち第二十三時那をパールスグナートフと名づけ、第二十四をマハーヴィーラ(此に大勇と云)と名づくるなり(但し三千佛名經等の三世に各千佛ありと云が如きは、時那教徒の意想外に出でたる大數なるべし)。

又時那教徒は木の生茂せし山と絶景なる幽地とを擇んで巡拜處と定め、白蠟石を用ゐて奇麗に彫刻せし莊嚴ある堂宇や、まばゆき迄に白石灰を以て塗り立てし殿堂を建築して、殆んど其地を覆ふに到れり。ベンゴール(印度の一地方の名なり下之に倣へ)にはバラスナートフ岡あり、カートヒアーワールにはバリタナと稱する寺院あり、又ラーヂユブターナ平原より珠玉を以て成り立ちし島の如くに見ゆる美麗なる建築を以て聳えたるアブ山あり、此等は皆時那教徒の禮拜處の有名なる地方とす。

此教徒は富める人民なり、通例銀行或は卸商即ち問屋の如き業に従事す、古の佛教徒が他方に布教せしが如き精神を有せずと雖も、教徒一同は頗る固結す、而して其慈悲仁愛は無邊なり、曾て佛教の畜類を愍みしより、印度の諸都府に建て置きし獸病院を、今日に保存する重なる扶助者は時那教徒なり。

時那教徒は或は多くの賢聖を以て作り立てたる荒唐なる古神説を以て裝飾せし佛教とも云ふべし、但し時那教は阿輸迦(舊譯の阿育王)と迦膩色迦との二王以前の佛教の信仰の現存するものとはなすべからざる歟の疑問あり、一説には時那教徒は單に佛教徒が印度教即ち婆羅門教と相和して自の滅亡を免れ、遂に婆羅門教中に立つる所の四姓の中に於て其身を立つるに到りしもの、殘餘なりとす、又一説には時那教徒を以て阿輸迦王告示文中に謂ふ所の尼乾太の不斷に相續せしものとす、彼徒は其教祖グロドハマーナを以て佛(釋尊)の師匠歟或は同代人とすること、を要す、而して巖石上所刻の文(阿輸迦告示)及び南方佛教經典(即ちパーリ語經藏)に依れば、尼乾太は佛教に關係なき獨立宗派歟、或は實に佛教に反對せし宗派の如くに見ゆるなり、因て西曆紀元前二百四十四年比に當る阿輸迦王の信奉せし佛教は、實には尼乾太歟、或は時那教より出で來る所の者なりと云ふ程の理論あるに到れり。

然れども時那教の實地の形勢に就きては、之を呼んで賢聖を禮拜することを以て都合能くし、且つ一宗派の特別なる需要に適する爲めに、全國普通の宗教を狹隘に

せし所の佛教なりと謂ふことを得べし。  
 さて印度に於て最も尊ぶべき佛教の遺物は、別段なる體に於て存するには非ずして、印度人民の一般宗教上に於て見出ださるゝなり、即ち一には人は皆兄弟なりと云ふ主義、此事佛已に説きたまひしを重ねて主張する所に於て、一々の印度教即ち婆羅門教の新派は起り來れり、二にはアサイラム即ち身を匿し罪を免かる所を設くること、現今韋紐派(韋紐天を重もに尊崇する婆羅門教の一派)に於て四姓種族律例を犯せし者や、寡婦或は逐ひ出されたる者の爲めに之を設置す、三には一般人類に對して温和慈愛なること、此れ印度に於て歐洲に在ての貧人を養ふ爲めの法の代りとなり、而して半は嘲笑に屬する所の温和なる印度人(マイルドヒンドウ)と云ふ名稱、此は歐人が印度人を嘲弄する名目にも高尚なる意味を與ふるなり。

### 第十七 從軍布教使將來の書籍

明治二十八年五月下旬大谷派從軍布教使平松理英、佐々木靈秀、佐々木圓慰の三氏歸朝せり、靈秀氏余に贈るに寫本一冊を以てし、且つ告げて曰く、此書は從軍中滿洲

の人の贈る所なり、未だ之を閲讀するに暇あらず、他日幸に書中の事を話し給へと、余諾して手を分ちしも、爾來東奔西走席殆んど煖かなるに暇なかりき、頃日閑あり、佐々木氏より得し所の書籍の一斑を録出して、以て大方の人に示さんと欲す。今得し所の書は題して觀音濟度本願眞經と云ふ、刊本を謄寫せしものなること明かなり、卷初に一序あり、觀音古佛原叙と題す、其初めの一段を延書すれば、曰く、天下善書廣し、聖經賢典丹經子書古人道天上に成り、法世間に留まる、字々珠璣、句々牟尼ならざることなし、元圃に入らば美搜るに勝へざるが如し、然れども書愈多くして、人の惺き者究めて少なし、豈書の善からざるならんや、抑其旨深く、其義蘊に、其辭奥にして、以て上智の訓と爲すべく、以て中下の廻と爲すべからず、以て文士英俊の觀と爲すべく、以て愚夫愚婦の勸と爲すべからざるを以てなり、吾思ふ、深きを以て論ずることは淺きを以て論ずるに若かず、人に因て以て教を施すことは身を以て教を施すに若かず、道に就て道を論ずることは曷んぞ事を以て道を論ずるに若かんと。

さて叙の終りには時永樂丙申歲六月望日書とあり、案するに永樂丙申とは明の太

宗永樂十四年にして、我朝の稱光天皇應永二十三年なれば、慧燈大師誕生の翌年にして、西曆千四百十六年なり。又叙の文中に自身の本行を録して之を朝元洞の内、石室門の中に藏めて、以て後の見る者の廣く流布を爲すを待つと、あるは自序なり。次に西天達摩祖師題讚長篇一首と孚佑大帝呂祖題讚六首あり。其次に又叙あり。其中に曰く、余此を授かるを得たり、敢て此一宗の功徳を成就せざらんや、奈んともすることなし。經は西天の梵字に係り、東土の人此字を識る者少なし。余急に家に歸り、譯寫書正し、刊刻して世に行ふとありて、終りには昔在大清康熙丙午歲冬至後三日、廣野山人月魄氏沐手敬叙於明心山房とあり。此序文の中に觀音佛祖自ら本行を叙すの文字あり。

次に觀音古佛原本讀法十六則あり。其初の四則を延書すれば左の如し。

一本願真經は闡道の書なり。當さに道法心印金剛法華と作して之を讀むべし。其言、天道人道備載せざることなく、入世出世縷陳せざることなし。玄機を剖露して關する所最も重し。讀む者須らく手を淨くし、香を焚き、誠敬開誦し、讀み畢りて卷を掩ひ、高く供して褻視することを得ざるべし。此を知る者は方に本願

真經を讀むべし。

一本願真經は善惡の金鑑なり。當さに感應篇功過格と作して之を讀むべし。善惡昭彰、因果顯然、天堂地獄、只行ふ所を看れば、苦海無邊、頭を回らせば、是れ岸なり。誠に善心を感發し、逸志を懲創するの良劑なり。此を知る者は方に本願真經を讀むべし。

一本願真經は暗室の燈、考金の石なり。因果は本と善に福し、淫に禍するの理なることを言ひ、修煉は實に本に返り原に還るの道なることを講ず。此經を解悟すれば、一切の惡孽惡念目を惕れしめて心を驚かし、旁門曲徑闢かずして自ら破れん。此を知る者は方に本願真經を讀むべし。

一本願真經は一切の演義傳奇俗本、彈唱歌曲に比せず。此等の書卷徒らに人の耳目を悦ばして身心に益なし。此經に論ずる所は皆善惡因果、言ふ所は皆性命道徳にして、那の無益の論を作さざるなり。此を知る者は方に本願真經を讀むべし。

右の如き十六則を列ね、了りて、觀音大士の像あり、開經偈を其左側の上部に細書す、

其次頁に記する所は左の如し

觀音夢受經

南無觀世音菩薩、南無佛、南無法、南無僧、與佛有因、與佛有緣、佛法相因、常樂我淨、朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念佛不離身、天羅神、地羅神、人離難、難離身、一切災殃化為塵、摩訶般若波羅蜜。 後附齋期

- 正月初八 五月初三、十七 九月初九、廿三
- 二月初九 六月初九、廿三 十月初二
- 三月初六、十三 七月十三 十一月十九
- 四月廿二 八月十六 十二月無齋期

閏月 同前

本文は上下二卷に分ち、後學弟子陳智成重刊とあり、篇を分つこと十二、曰く、慈航下世投胎第一、花園受苦得藥之道第二、白雀寺武火焚燒第三、斬絞歸陰徧遊地獄第四、以上上卷、以下卷、還陽山中伏虎第五、香山温養聖胎第六、莊王惡滿上帝降旨冤魂尋報第七、妙善公主元神顯化揭榜救父第八、駙馬公主勸開齋第九、香山還愿妙善公主勸父

修道第十、駙馬香山求道第十一、丹書下詔道成受封第十二是なり。跋文の前半は左の如し

濟度本願真經は乃ち觀音古佛著はす所の原本なり、自ら本行を叙し、始末備さに陳す、文顯にして語明、辭藻を事とせずして善惡の勸戒あり、能く智愚をして見ることを楽しみ、聞くことを樂ましむ、余少年往て普陀に方丈の中に朝し、此編を見ることを獲たり、之を住持の長老に詢ひしに曰く、此書相傳へて觀音佛祖の手著と爲す。

此跋の作者は東陽主人とせり、此の如く一部の顛末を閱し去れば、單に小説なりと雖も、表紙の題號の下にも慎重勿褻の四字を附記して、讀者をして改過遷善の功を奏せしめし書なるが如し。因て憶ひ起すとあり、明治二十年四月余上海より天台山に到り、歸路杭州を過ぎ、西湖を渡り、上中下の三天竺寺に詣せしに、此等の寺の本尊は皆觀音大士なり、杭州蘇州の間水路遇ふ所の舟、往々婦人を滿載し、木魚と鉦とを叩き、南無阿彌陀佛を高唱し、天竺進香の黃旗を掲げたり、今日と雖も同一なるべし、本邦に於て觀音大士を信仰する者と其淺深の差果して如何なるを知らざるなり。

## 第十八 布教の困難

明治三十年七月以來十一月の初に到るまで、各地方を巡回して一派の布教を試み併せて佛教普通の演説をもなしたり、其足跡の及びし所は東海東山北陸西海の四道にして、其國は伊勢美濃尾張參河駿河信濃越後佐渡と筑前肥前肥後筑後豊前豊後日向薩摩の十六國なり、固より一派の僧俗を正所被とする巡回たりし上は、たゞ他宗派若しくは無宗教と自稱する人々の其席に在りしことを知ると雖も、別に新説を吐くべき限りに非ざること、は説者の辯解を待たずと信じて、専心一意に會て師父より聞きし所を覆説せしに、往々説者に對して書を寄せ辯を費やし、此の如きは平常僧侶の爲す所なり、何んぞ新案を出だして聽者を満足せしめざると迫られたる人あり、是れ余の地位を知らざるが故なりと思ひ、演説に於て聊か説教に云はざる事を述べ立れば、敢て翁媪のみにあらず、年少の人にも此の如きは已むに如かずと罵る者あり、蓋し説教を聞きて折角有り難しと感せし所に、演説を以て其信仰の程度を退かしむる歎の恐あるに由るものなるべし、是に於てか布教の困難と

云ふことはいよ／＼胸中に感觸して、席を開く毎に中心自ら戰々兢々として、もはや言ふこと無からんと欲せしこともありたり、故に經驗ある先輩の説を聞かんと欲すれども、東奔西走容易に其直語を聞くことを得ざるなり、是に於て平生の持論に由て演説するの外なしと決して此困難に打ち克つことを試みたり、因て録出して大方の批評を請ひ、且つ其良法を聞かんと企望するものなり。

持論とは何んぞ、孟子言はずや、言は通きに在り而るを諸を遠きに求む、事は易きに在り而るを諸を難きに求む、人々其親を親とし、其長を長として、天下平かなりと、是れ能く古今の通弊を論破したる格言なり、固より之を宗學研究又は其他の學術の調査にまでも及ぼさんとは非ざるなり、唯布教の目的は一人たりとも多數の者に容易に教義を知らしめ、謂ふ所安心立命の位地に達せしむるにあれば、徒らに高尚に偏し、又は細密に涉りて、聽者をして望洋の歎あらしめて可ならんや、人命は不定なり、議論未だ半ばならざるに病魔已に其背背に達し、細科未だ辯じ終らざるに死王已に其大命を奪は、之を後に悔ゆともはた何ぞ及ばんや、况んや平生業成を宗旨とする者に於てをや、故に説教もや、演説に近きこととして、従前の法話法談

に其耳の慣れざる者にも了解し得せしめ、演説も亦勉めて平易に辯述して未だ説教を聞かざる者も之に由て安心の域立命の地に立つことを得せしめんと欲するなり。此は固より容易の業に非ざるが如しと雖も、心誠にて之を求めばあたらすと雖も遠からず、人をして我が説く所の教を信せしめんと欲せば、先づ自ら信せざるべからず。是に於てか、自行化他の語あり、自信教人信の句あり。此等のことは本書を讀むほどの人には知らざる者なきことも余は固より之を知れり。然れども知らずして不善を爲すも其人己に不善の人たることを免れず、况んや知りて之を行ふこと能はずんば、其良心に愧ぢざることを得ざるに於てをや。世間滔々自ら欺きて而して後に人を欺く、己に其良心に愧ぢず、佛祖の冥鑒を恐れず、天地の公道を守らず、言語益す、巧みにして心術彌よ、卑劣に陥り、説者は唯聲色の美醜、音節の巧拙、身體の裝飾の完否に注意して、自身の信徳の果して缺けたる所なきや否をも察せず、聽者の最良を得んことをのみ務むるが如く、聽者も亦説者の信徳如何は第二點として、先づ其音聲を一種の音樂の如くに心得、恍惚として其要領を得ず、唯一日能く十數席をも聞き得たりと誇りて、唯時間を費さば報謝の經營を怠たらざる者と

自信するが如し、故に説教の席には時間に關係なき老朽人の睡眠を帯びて聽聞する者殊に多し、此輩に對して説く者尤も自身の心を警覺せずんば、何の時か他人をして警醒一番生死の迷夢を覺ますことを得せしむべき、恐懼反省せざるべからず。梵網經に十重禁戒を説て之を犯す者を波羅夷罪とす。波羅夷を譯して極惡と云ひ、又は無餘と云ふ。泰西の梵語學者は此語を解して追放の義とす。即ち僧侶の分限を奪ひて排斥すること、云ふ意義ありとするなり。其第六戒を自讚毀他戒とす。無戒名字を口實として好んで此等の經戒に虧負する者は、己に正依の大經の金言に背く者なり。大經に曰く、其れ心を至して安樂國に生れんと願ふこと有る者は智慧明に達し功徳殊に勝れたることを得べしとは、眞宗の眞諦門の教なり。又曰く、心の欲する所に隨ひ經の戒に虧負して人の後に在るとを得ること勿れとは、眞宗の俗諦門の誠ならずや。此經の戒とは大經に説く所の五善に對する五惡なることは勿論なりと雖も、廣く諸惡莫作の通戒に鑑みて、慎むべきことならずや。然るに説者の通弊に於て尤も其勢力ある者を自讚毀他とす。此亦翁媪を悦ばすに足れりとして、延て年少者に及ぼさんとするが故に、年少者は未だ其堂に升らずして、己に其門牆の間

より背き去らんとする者なきに非ず、此の如くにして入室提携の同朋を得んと欲することは亦至難の事業と謂ふべし。故に説教の席には殆んど少壯者なしと云ふが如き地方を見ざるに非ず、是れ演説に安心立命を説くの必要を見出だせし所以なり。演説と云へば少壯者に對する事と自他共に許す所なり、因て此を機として其死生の大事を注意すれば、却て勞少なくして時に功を奏すること無きに非ざるなり。嗚呼布教者にして眞に生死事大無常迅速と知りて、平生業成の安心を決定したらんには、此心深く信することなほし金剛の如し、異學異見も別解別行も亦畏るゝに足らざるなり、此即ち我れ助けずんばまたいづれの佛の助けたまはんと思召して無上の大願を發し、阿彌陀如來の佛心を廻向せられたる他力信心の行者の眞面目なるべし。余が十餘歳の時に隨侍せし故稻葉道貫師の如きは或は此標準に遠はざりし人と謂ふべき歟。其他にも世間には蓋し此類の人尙有るべし、唯余の淺識未だ屢其人を見ることを得ざるを遺憾とす、慚愧奮勵すべきの至りに非ずや。

頃日感ずる所あり、假名聖教を拜讀して類文三四を得たり、因て之を鈔出して説者

聽者の頂門の一針とせんとす、請ふ讀者と共に再三讀過して拳々として其慈訓を服膺すべきなり。

歎異鈔第六章に曰く、

一、專修念佛の輩の我弟子人の弟子と云ふ相論の候らはんこと以ての外の子細なり。親戀は弟子一人もたず候ふ、其故は我が計らひにて人に念佛を申させ候は、こそ弟子にても候はめ、偏に彌陀の御催しに預かりて念佛申し候ふ人を我弟子と申すこと極めたる荒涼のことなり。附くべき縁あれば伴なひ、離ることのあるをも、師を背きて人につれて念佛すれば往生すべからざるものなり。なんと云ふこと不可説なり。如來より賜りたる信心を我物顔に取り返へさんと申すにや、かへすもあるべからざることなり。自然の理りに相ひ適は、い佛恩をも知り、亦師の恩をも知るべきなりと云云。

口傳鈔上卷に曰く、

一、弟子同行を諍ひ、本尊聖教を奪ひ取ること然るべからざる由の事。

常陸國新堤の信樂房、聖人親の御前にて法文の義理ゆゑに仰を用ひ申さる



に由りて、突鼻に預かりて本國に下向のさざみ、御弟子蓮位房申されて云く、信樂房の御門弟の儀を離れて下國の上は預け渡さるゝ所の本尊聖教を召し返へさるべくや候ふらんと、中んづくに釋親鸞と外題の下に遊ばされたる聖教多し、御門下を離れ奉る上は定めて崇仰の儀無からん歟と云云、聖人の仰に云く、本尊聖教を取り返すこと甚だ然るべからざることなり、其故は親鸞は弟子一人も、たす、何事を教へて弟子と云ふべきぞや、みな如來の御弟子なれば皆共に同行なり、念佛往生の信心を得ることは釋迦彌陀二尊の御方便として發起すとみえたれば、全く親鸞が授けたるに非ず、當世互ひに違逆の時、本尊聖教を取り返へし、附くる所の房號を取り返へし、信心を取り返へすなど云ふこと、國中に繁昌と云云、かへすゝ然るべからず、本尊聖教は衆生利益の方便なれば親鸞がひつびをすて、他の門室に入ると云ふとも、私に自尊すべからず、如來の教法は總じて流通物なればなり、然るに親鸞が名字のゝりたるを、法師惡くければ袈裟さへの風情に厭ひ思ふによりて、たとひ彼聖教を山野にすつと云ふとも、其處の有情群類、彼聖教に救はれてことゝく其益を得べし、然らば

衆生利益の本懐其時満足すべし、凡夫の執する所の財寶の如くに取り返すと云ふ義あるべからざるなり、よくく心得べしと仰ありき。

改邪鈔本卷に曰く、

一、弟子と稱して同行等侶を自尊のあまり放言惡口することいはれなき事。

光明寺の大師の御釋には、若し念佛する人は、人中の好人なり、妙好人なり、最勝人なり、上上人なり、とのたまへり、然れば其旨に任せて祖師の仰にも、某は全く弟子一人も、たす、其故は彌陀の本願をたもたしむる外は、何事を教へてか弟子と號せん、彌陀の本願は佛智他力の授けたまふ所なり、然れば皆とも同行なり、私の弟子に非すと云云、之て依て互に仰崇の禮義を正しくし、昵近の芳好をなすべしとなり、其義なくしてあまつさへ惡口をはく條ことゝく祖師先徳の御遺訓を背くに非ずや知るべし。

右の三文は自讃毀他の小慈小悲の人師を誡めたまふ慈訓なり、又聽者の心得あり、左の如し。

改邪鈔末卷に曰く、

一、本願寺の聖人の御門弟と號するひとくの中に、知識を崇むるを以て彌陀如來に擬し、知識所居の當體を以て別願眞實の報土とすと云ふ、いはれなき事、(上略)ほのかにさく、かくのごとき、の所談の言語をまじふるを夜中の法門と號すと云云、またさく祖師の御解釋教行證にのせらるゝところの顯彰隱密の義といふも、隱密の名言はすなはちこの一途を顯露にすべからざるを隱密と釋したまへりと云云、これもてのほかの僻韻歟、かの顯彰隱密の名言はわたくしなき御釋なり、それはかくのごとくこばみたる邪義にわらず、子細多重あり、ことしげきによりていまの要須にあらざるわひだこれを略す、善知識において、は本尊のおもひをなすべき條、渴仰のいたりにおいてはその理しかるべしといへども、それは佛智を次第相承しまします願力の信心、佛智よりもよほされて佛智に歸屬するところの一味なるを仰崇の分にてこそあれ、佛身佛智を本體とおかずして、たいちに凡形の知識をおさへて如來の色相と眼見せよとすすむらんこと、聖教の指説をはなれ、祖師の口傳にそひけり、本尊をはなれていづくのほどより知識は出現せるぞや、荒涼なり、髣髴なり、たい實語をつたへて

口授し、佛智をあらはして決得せしむる恩徳は、生身の如來にもあひかはらず、木像ものいはず、經典くちなければ、つたへきかしむるところの恩徳を耳にくはへん行者は、謝徳のおもひをばらにして、如來の代官とあふいでわがむべきにてこそあれ、その知識のほかは別の佛なしといふこと、智者にわらはれ、愚者をまよはすべきいひこれにあり、あさまし〜。

以上の四文を讀み了らば、勢ひ必ず慧燈大師の訓誡を思ひ出ださるゝなり、即ち左に鈔出せん。

御文一帖目第一通に曰く、

故聖人のおほせには、親戀は弟子一人もたずとこそおほせられ候ひつれ、そのゆへは如來の教法を十方衆生にとさゝかしむるときは、たい如來の御代官をまうしつるばかりなり、さらに親戀めづらしき法をもひろめず、如來の教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり、そのほかはなにををしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり、さればとも同行なるべきものなり、これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきておほせられけり。

見真大師の心中は眞に光風霽月の如しと謂ふべし。此外御傳鈔上卷第三段の、流罪の逆縁に依て邊鄙の弘教を得たまひしまでを師教の恩致なりと喜びたまひし語と、歎異鈔第二章の結末の、「このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」と、きつぱり言ひ放ちたまふ確乎たる語の意を玩味すれば、何んぞ區々として他人の鼻息を窺ひ、汲々として聽者の歡心を買ふに及ばんや。富貴も淫することあたはず、貧賤も移すことあたはず、威武も屈することあたはず、是を孟子は大丈夫と呼べり。金剛堅固の信心決定の人は、男女貴賤智愚老少共に綽々然として此餘裕なかるべけんや。余輩固より之を善くすと云ふに非ず、唯願はくは之を學ばんと云ふ而已なり。文を以て意を害することなくんば、則ち幸甚なり。但し布教の困難に克つべき方策は尙多かるべし。今は其一斑を書記するばかりなり。

### 第十九 羊公の鶴

寂照堂谷響集は正續各十卷ありて元祿中に瑞應の老僧正泊如運啟和尙の著なり。

泊翁の博覽強記なりし事は當時高泉悅山二師の題詩あり、左の如し。

道人襟度本靈通 無著無礙萬法融 如谷無心呼即應

隨呼隨應卒難窮 高泉

僧中班馬擅才名 博古窮今見老成 大小隨機皆應答

猶如空谷響傳聲 悅山

正集の第二卷に羊公鶴の一條あり、明治四十年の干支丁未に縁ある雅談を此書に採りしに、唯此の羊の字あるのみ、因りて原漢文を延書すれば左の如し、以て此書の體裁をも知るべきなり。

客曰く、凡そ技能の聲譽に逮ばざるを羊公の鶴と稱するは何んぞや。答ふ、世説排調の篇に云く、劉遵祖少ふして殷中軍に知らる、之を庾公に稱す、庾公甚だ忻然として使はち取りて佐とす、既に見て之を獨榻の上に坐せしめて共に語る、劉その日殊に稱はず、庾公小しく望みを失ふ、遂に之を名けて羊公の鶴とす、昔し羊叔子に鶴あり、善く舞ふ、嘗て客に向て之を稱す、客試みに驅り來らしむ、氈氈はたゝきとして肯て舞はず、故に稱して之に比す。

今の時、世間往々羊公の鶴あるべきなり、已に此奇談を録出す、因みに余自身に關する大間違なる話を附記して、買ひ被りなき様に有り度き企望を述べれば次の如し。  
明治三十九年一月六日の讀賣新聞に、

南條文學博士曰く、人間が睡眠時間を食るのは一種の我儘で、我輩に云はすれば、絶対に睡眠しなくとも、人間の健康状態に差支ある事はなからうと信ずる。現に我輩が英國に居つた頃、試験の間際で、八十日間一睡もしなかつたが、別に健康を害さなかつたのみならず、却て頭腦が明晰になつた。爾來睡眠時間は三時間と定めたが、其れさへ自分では長過ぎるやうに思つて居る。世間では物忘れをするると云ふ人があるが、我輩は未だ嘗て其覺えがない、どうかして一度位物忘れをして見たいと思つて、がつかりして居つても忘れる事が出来ないから不思議だ。

余は一月六日の朝此の一項を讀んで、殆んど絶倒したので、同居の者には之を示さず、固より無實なる作り話にして、誰の悪戯なるやを知る要なしと思へども、諸方より實否を問ひ來る者ありて、煩しさに堪えずして同月九日に左の如き書狀を日就

社に投せしに、同月十二日の讀賣新聞に之を掲載せり。

拜啓益御多祥奉賀候、陳ば本月六日貴社發行の讀賣新聞第一萬二百六十號第一頁第五層の中央に御掲載の「南條文學博士曰く」の一項は何れより御聞込相成候哉承知致度候、私は右様なる事を申したる覺えは嘗て無之候、英國に留學致候事は明治九年八月より十七年三月迄の間に有之候得共、別段に學校に入りし事は無之候間、随つて八十日間一睡も不致して試験の用意を致す必要は無之、毎夜十二時には必ず就床致し、毎朝は五時六時の間を以て起き候様に致居候事にて、唯今は右よりも一時間早く眠に就き候次第に御座候、六日以来友人よりも尋越候者有之、全く別人にて右様の實行者も有之候事に候歟、虚名より思はざる虚言を吐き散らし候様に友人間よりも感せられ候へば、不本意の至りに御座候間、乍御手数數御返事被下度候、因みに先年も他より博士全傳と申す小冊子を賣り附けられ候事有之、然るに其中に小生は越前福井に生れ、年十八にして大般若經を讀みて感ずる所ありて佛門に入れりと相見え申候、然るに小生は美濃大垣に生れて、而も眞宗大谷派僧侶の第三男にして、大般若經は

## 第二十 笠原研壽君を憶ふ

英國留學中三十歳以上にて初めて一覽致候者に有之、此等は總て難有迷惑の事ばかりに御座候、兎も角も去る六日の貴社の新聞紙上の南條の二文字は某々の誤歟、左なくば彼一項は御取消相成度候以上。

右の書狀の終りに、卅九年一月九日南條文雄日就社御中とせしに、其鄙名の傍らに「ふみ」と假名を加へたるも誤りにて、小生は常に「ぶんいう」と漢音を以て音讀し居るなり、或る地方の人には「ぶんのう」と讀む者あり、此は文は漢音、雄は吳音（おう）と讀むより起りしなり、此の如き相違は古今の傳記には頗る多かるべし、冗漫の語、一笑柄に充つるを得ば幸なり。

## 第二十一 笠原研壽君を憶ふ

余の笠原君と初めて相見たりしは明治五年の六七月の交、西京大谷派本山寺務所に在りて、余は記室長より掌儀に進み、其後繼として君は記室長となりし時なり、是より先き石川舜台氏金澤に在りて慎憲塾を開き、加越の青年を教育せられしに因りて、君は其塾頭となり居られたり、明治三年十月起草の修體説と題する一文は慎

憲塾説第壹號に出づ、余は僧墨遺稿と笠原遺文集の卷初に編次す、後ち石川氏本山改正の爲めに、入京せられし時、君等も同じく入京して、北野の春日潜庵氏の塾に入りて、五年の夏に到りし事は、其後君より之を聞きたり。

五年の冬には君も掌儀及び改正掛助勤等の役務を余と同じくし、其後は日々並座又は對座して、専ら文書の事を掌どり、六年三月に到りて、余は法主に隨ひ、越前に到り、又東京に來り、八月以後又其職務を同じくし、十二月余は病母看護の爲めに越前に歸り、八年四月再び本山に歸りて録事となりし時は、君は東京に在りき、同年八月頃君も亦本山に歸りて、再び職務を同じくし、九年一月余先づ西京を去りて東京に來り、淺草別院内の寺務出張所と神田猿樂町の眞宗教務院とに隔日の出勤を爲して、英國留學の期を待ち居りしに、六月の初め君突然東上して、咄嗟に其事を辨じ、倫敦の公使館に赴任の大越成徳君に同行を依頼して、同月十三日の夜笠南二名横濱を發せしなり。

是より先き君は聊か佛語を學びかけしも未だ會話杯の練習を試みし事なく、余は全く外國語に對しては一丁字をも解せざりし、故に大越君は三人前の耳と口とを

活用して、兎も角も八月十一日英京に達することを得せしめたまひき、此の同君の友誼は死すとも忘るべからずとは笠南二名の雅言する所なりき、而して余は今も之を忘るゝと能はず、十年二三月頃までは倫敦のガウワル街のロブソン氏の三階の一室を借りて笠南同居して、毎朝横山孫一郎君に就て英語綴字書の如き初歩の書を學び、傍らへアル氏又はモリソン氏の教授を受けしも、語學の進歩の遅きは同居の故なりとの、諸友の忠告を容れて、君はハンプステード岡のハム氏の家に入りて、留まること二年なりき、余はモリソン氏の家に入り、十二年二月に先づ去りて牛津に到り、十月君も來りて余と同居し、それより初めはマクドネル氏に就き、後にはマクス、ミューラル博士に就て、梵語文學を専攻し、十五年七月に到るまで、笠南は殆んど二人同體の如く起居動靜を同くしたりき、因りて君の最も愉快を感せし時日を云へば、明治十二年十月より十五年六月までとす、十四年九月笠南同行して、伯林の萬國東洋學會に赴き、歸路マ博士に從つて、巴里に赴き、留まること四旬、種々の梵本を寫し、英に歸りて牛津より劔橋に赴き、法華楞伽の梵文の寫本を校合し、又牛津に歸り、遂に稱友尊者の俱舍註の謄寫を余に代りて君の擔任せしまでは、頗る活潑

なりしが如きも、其實は君の病氣は自身には已に十四年以來感じ居られし事は、十五年七月余が梵本法華校合の爲めに倫敦に在りし時に報じ來りし信書に明かなり、余の此書を落手せし時の落膽の情は到底筆を以て記述し能はず、以て今日に到る次第なり、其信書を鈔出せば左の如し。

(上略)本日醫師タックウエル氏當府に住すに趣き診察を受け候處、小生儀は彌々肺病に係り候由にて、醫師の勸めにては當冬は必ず當國に留る可からず、早々歸國可致との事也、右醫師はマクス氏の家醫の由、昨日午後博士態々小生を携へ同家に至られたれども、醫者は不在なりき、○小生問云く、生もし當冬を當國に經可からざれば、當秋こゝに留るも差支なきか、醫云く、支度出來たら直に去るべし、○小生云く、印度を旅行し得べきか、醫云く、それは本邦へ歸りた上に再度出懸ける方に可有之、○右は醫家の論也、(中略)但し右様に申しても何も別に病氣は驚く程の事なし、生の不快は三ヶ月已來、或は一ヶ年已來のことなり、平生食を節し、身を虐使せざりし故に、今日まで無難なりしなるべし、近日は少々體の弱を覺れども、君の當地を御去りの時より已來別に變りたることなし、

今日改めて醫者の申渡を受けたのみにて、別に急病を起したるには非ず、御安心可被下候、唯今養生すれば病根も枝葉を繁盛するに至らざるべしと云ふ所なり、生も父母を懐ふの外は決して歸國を望まず、愚父も先頃の奇病は宜しき由故に、近日は先々腰を据へて居たりしに、今度は此方より歸國を企つるに至りたり、生も敢て病氣も死も天數なら之を恐るゝ心もなく、世間の不定なる相をツラ／＼考れば、五十年の命を三十年にて止めるは、猶水泡の一時早く滅するが如し、但しこれは人間世界の通論にてはなければ、人が歸國して宜敷からうと云ふときは早々飛び去る方に可有之と存じ候(下略)。

明治十五年七月二十六日夕

笠原研齋

南條文雄殿

過日御送越の法華經序品は早々博士に見せ申候

右の次第にて同年九月君は遂に倫敦を發し、錫蘭に留まること二週にして歸朝せられたり、余送別の詩あり。

偏驚吾友趣歸裝、同在天涯六載強、歐語纔通書百卷、梵文細寫紙千張、孤身有志巢

枝鳥、二豎無情當道狼、京洛相逢當不遠、淳風坊裏舊菲堂。

然るに明治十六年七月十六日君は東京大學病院に於て歿す、九月余は友人菅了法君の病を英國南海の濱に訪ひし時に訃音を得たり、菅君追悼の詩先づ成れりき。

悼僧墨上人

桐南菅了法

大器由來期晚成、雲游十載一身輕、秋風白露牛津里、夜雨青甍龍動城、元識死生真有命、忽疑天地却無情、百年空照教門史、日本之僧研齋名。

余も亦一篇を得たり。

去年今月上歸途、記子玲峴貌已凋、求道一句尋孤島、學文十載在名都、素心同慕顯、契跡交意會期管、鮑徒、歿壽果知真有命、東來萬里亦良圖。

十七年三月余は義母の病を聞きて、決然牛津を去り、大西洋を渡り、北米を経て、太平洋を横断すること二旬、舟中無聊の餘、笠原君を憶ふの長詩八十句を得たれども、今は略す。

十七年七月十六日頃には余は歸りて西京に在り、其前日笠原君の諸友を招きて一周忌の法會を修し、詩を作りしも今は之を見出だすことを得ず、君の遺子保護時に

余の家に在りき。

十八年七月十六日には余は東京大谷教校に在り、僧墨遺稿を編次して小冊子とし、讀經の後、之を諸友に頒ちたり。

廿四年七月十六日には余は越後三條別院に在り、笠原君の遺文の隨一たる、佛教學徒將來の方針と題する長文を朗讀して、一笠原を失ひて千百の笠原を得んと大聲疾呼して、米北中學の學徒等を獎勵したり。

廿五年八月十一日越中城端別院に到り、始めて笠原君の實父惠壽老人に晤せし時には實に言ふべからざる痛悼の情ありしことは今尙胸中に歷然たり、其夜惠林寺に赴きて老人を慰め、別院に歸りて絶句數首を賦したり。

三十二年七月東京に在りて笠原遺文集一冊を編纂發行したり、此中には僧墨遺稿に漏れたる長文二篇を編入す。

三十四年十月には余は東京より越中城端に赴き、笠原君十七回忌辰法會の延修に詣り、懷舊三十韻詩を賦せしことあり。

之を要するに笠原君は嘉永五年壬子に越中東彌波郡城端町惠林寺に生れ、明治十

六年七月十六日に東京大學病院、即ち今の東京帝國大學第一醫院に病歿せられ、享年三十二歳なりき、其性行は先師マクス、ミューラル博士の言はるゝ所左の如し。

笠原研壽は實直勉強の勢力を以て梵語に達し、少くも佛教の聖教を其原語を以て讀み得るに足るまでに到れり。

笠原の牛津に在りしや、其起居甚だ單純、更に愉快歡樂の事に其身を委せず、而して少しく閑散の行歩をなせし而已、烟を吹かず、酒を飲まず、小説と新聞紙を讀まず、日を逐て其業に従事し、時ありて數週間我と其同學南條文雄とを除き、其他の人と面晤せざりし、笠原は雅正に英語を話し、且つ之を書せり、而して少しく羅甸と佛蘭西語とを學び、聊か歴史と哲學との最好の英書を讀めり、笠原は日本に歸りし後最も有用なる人物の一人たりしなるべし、如何となれば歐洲開化中の善美なる所を貴重し得し、而已ならず其自國の華美の幾分をも保ち、必ず徒らに泰西の氣風を摸擬する者にはあざざりしが故に、笠原の行狀は完全なりし、即ち我欲なき人の自然の舉動なりし、而して其品格に到りては我は唯此語あるのみ、曰く、我久しく此人を監視せしと雖も未だ會て一の詐偽あり



第二十 笠原諸君を憶ふ

るを見ざりし、而して疑ふらくは此四年間我、牛津諸生中、或は此惘然なる佛教僧徒よりも清浄にして且つ貴ぶべき精神を有せし者ありし歟と、佛教は如此の人を以て誇るに足れり、然れども多年の業遂に其果を結ばざることを思へば實に痛ましき哉、况んや三千二百萬の日本佛教徒中一人の善良文明なる佛教僧徒の爲し得たりし善事の多少如何を想察するに於てをや、實に傷むべきの至りなり。

嗚呼今日は明治四十年十二月十六日にして本年最終の笠原君の捨命日なり、因りて常に忘るゝこと能はざる同學友人の事に就て録出すること此の如し。

靜思錄 終

明治四十一年三月十三日印  
明治四十一年三月廿三日發行

靜思錄 附  
(定價金四十錢)



著者 南條文雄

發行者 山中孝之助

印刷者 岡功

印刷所 株式會社 國光社

發行發賣所 上宮教會 出版部 井瀨堂

關西賣捌所 株式會社 積文社

東京市京橋區築地二丁目廿一番地  
東京市京橋區築地二丁目廿番地  
大阪市東區南本町四丁目



醇庵 鈴木券太郎先生著

○犯罪論及女性犯人

●刑罰全一冊總クロス美本 定價金一圓五角 郵税金八錢
●紙數五百五十ページ餘 郵税金八錢
犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何者か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪心理学、犯罪心理学、犯罪社会学の見地に據り、罪の根本哲學を明立し世の法曹家の犯罪及犯人定義に一大動搖を興へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特状を詳説し其人相、毛髮、乳房、生殖器、首、手足、感覚、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商榷し或は模範の理に依りて先天犯者熱情犯者其他の分類下に於ては各其特質を列挙し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を究て遺花の癡を閉き罪情の細に入り女性の秘密を暴露し其罪惡を檢察する處觀察犀利思案超凡洵に之れ科學の精華文學の上乗なり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮濛を避け一語一句悉く根柢あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理論深遠風神學界の一大文章此書を指して現世紀の一大産物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也。

前東京高等師範學校教授 小山左文二先生著

○日本文法の解語及び練習

全一冊 三頁十ページ餘 定價金二角 郵税金八錢
大學理科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受檢者、或に文部省教員檢定受檢者參考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受檢者の參考書として、著者苦心の作に係る。解説周到にして明快、較するところの練習問題實に一千五百餘、添ふるに明治三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學校入學試験文法及び明治十八年以降本年まで二十年間に於ける文部省教員檢定試験文法問題の全部を以つてし、一々適切にこれを解説指導せり。

文學博士 三宅雄二郎先生著

○小泡十種 全一冊 定價金四十五錢 郵税金六錢

流れては浩渺なき大河となり、故じては繽紛限りなき飛沫となる、小泡の激湍が益し近代稀有の快著なり。

久米邦武先生著

○上宮太子實錄 全一冊 洋裝美本 定價金七十五錢 郵税金八錢

本書は高麗邊疆を以て史界獨歩の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇抜なる見解とを以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實傳を詳叙し、荒唐不稽なる従来の傳説を擊破し前人未發新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心として政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋ね其の特色を説きて刺す所なく、論は東西に及び、議は古今を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書たり。興國の氣運今や然して人は皆な我が文明の眞相を知らしむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

ベークマン先生原著 杉村縦横先生補譯

○改訂強肺術 全一冊 定價金四十錢 郵税金四錢

肺病を恐る、ものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、吹米に於ける最新式の民力養成法を讀め、此書に六の特色あり。
第一、時間を要せざる。
第二、費用を要せざる。
第三、場所を要せざる。
第四、努力を要せざる。
第五、言文一致なる。
第六、總ふり假名付なる。
故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し、容易に實行し、其功に其實に其功を収め得べし。

新公論社編 ○附録學生消夏法

○男女學生氣質 全三冊 定價金廿錢 郵税金二錢

該書は坪内雄蔵、柳橋潤子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、木田庸一、南條文雄、小杉天外、山崎錦三郎、前田登雲、井上四郎、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、月川瓊花、鈴木券太郎、石黒忠憲、運瀬龍水、中川謙次郎、南岩倉具威、柳橋一郎、寺田勇吉、ノオスター、坂本盛徳、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤唯堂、境野實洋、中島徳藏、下田次郎等の大家が、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

黒岩周六先生 講演 丙午出版社編

○人生問題 全一冊 定價金五十五錢 郵税金八錢

人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を説き、碩學之を論じて、而して懷疑の雲霧密に、苦悶の人愈々多からむとす、然るに現代思想界の泰斗、黒岩先生、自ら人生問題に達着して、疑問の源泉を探り、大に其眞趣を得て、茲に此書あり、叙る所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、迷に來つて此福音に接せよ、庶幾くは平穩と満足と活力とを得て、温く日光ある人生に關着することを得ん。

文學博士 松本文三郎先生著

○宗教と哲學 全一冊 定價金四十五錢 郵税金八錢

本書全篇十有餘章まづ第一に宗教と哲學との根本問題に起し宗教道徳研究と信仰次第を逐つて遂に健全なる宗教の基礎に哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得るなり。

獨逸博士 ボール、ケーラス先生著 鈴木大拙居士譯

○阿彌陀佛 全一冊 定價金卅五錢 郵税金四錢

阿彌陀佛とは何ぞや、是れ佛敎の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に、これが解釋を試む宜なりその吹米讀書界に好評噴々たることや弊堂頃者十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり、豈佛の有無に感ひ心の不安に悶ふる人のみ、これを讀むべしと言はむや。

文學博士 前田慧雲師著

○修養と研究 全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢

博覽高識教鞭を帝國大學に執りて幽を閉き微を穿ち温厚篤實感化を東部の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研究に於ける佛敎教理上の大論文と修養に關する深厚なる談話とを編輯したるものなれば一度本書を讀んか、親しく先生に接して指導を受けるの感あるべし。

文學博士 前田慧雲師著

○蓮如上人 全一冊 定價金卅八錢 郵税金六錢

佛敎界に最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力敎眞宗の大成就者たる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、燃犀の史眼とを以て、上人の時代、性格、教義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、微に入り、細を穿ちて、詳傳せられたるものにして、上人の眞面目は、歴々として讀者の眼前に活躍し、純他力敎の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし。

井 洲 堂 發 賣 書 目

文學博士 南條文雄師著

○修養錄 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

濃厚篤實、而も道心堅固の聞えある、南條博士の實踐的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つと六、節を分つと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて、本書の中にある。人生問題の解決に悩める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

文學博士 南條文雄師著

○感想錄 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

本書は博士平生の感想なるものにして、或は古人の訓誡を示して後進を誘致し、或は博士自身の感話あり偉人才能の逸話あり時に便路に因て教を垂れ時に武進を語り時に信仰を談じ加ふるに修養十則を以てす實に之を精神修養の好指針品性陶冶の良資料なり。

文學博士 南條文雄師著

○忘己錄 全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

佛教の信仰は己を忘れて佛陀の大慈悲に歸命するにあり、本書は博士多年の靈的實驗に徴し、他方宗教の眞髓を説いたる者なり行文平易にして所説懇篤なり博士の聲咳に接する思ひあり一體よく讀み返すを慰む。

文學博士 南條文雄師著

○道人道 全一冊 定價金十五錢 郵税金四錢

人の道とは如何なるものぞ本書は博士が儒教の骨髄たる仁義五常の道より宗教の極致たる經典の所説とを對照し、可憐切に人道の大意を示されたるものにして、博引旁證加ふるに適切な譬喩を以て談話體に何人にも解しめく説かれたるものなれば、布教師の至者たり修養の資たる傳道的好施本なり。

忽滑谷 快天 師著

○怪傑マホメツト 全一冊 定價金五十錢 郵税金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗地腹絶倒すべき者、詩趣津々たる者、校に送らるす本論には宗教家として、マホメツトが追索搜尋の中に隱忍黙耐する預言的高風を叙し更に將軍として、其が千里の馬に跨り、屍山血海を踏破する雄姿を描き進んで、其が政治家としての怪腕鬼術を述べ、最後に、其が個人として起居動靜の或より困門の秘事に至る迄悉く詳記して、袞々赤々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

曹洞宗管長 森田悟山禪師序 加藤咄堂 峯玄光兩先生共著

○禪觀錄 全一冊 定價金三十錢 郵税金四錢

禪とは何ぞや、曰く言ひ難し、本書は言ひ難きの禪を説き盡して餘蘊なく更に發して、武士道の根柢となり、綴つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し、遠話あり漫筆あり、神韻縹緲一讀巻を讀く能はざらしめ覺えず快談を呼ばしむ。

建仁寺管長 竹田默雷禪師著

○默雷禪話 全一冊 定價金五拾錢 郵税金六錢

切實なる活法あり時に無邪氣なる憤發あり一度本書を讀みんか、禪師の聲咳彷彿として紙上に活躍せり若し夫れ禪師獨特の三十棒に至りては、偶發と輕薄の現代學者を罵倒し盡くして完膚無きしめ覺えず快談を呼ばしむ。

原 坦山禪師著 荒木磯天講述

○禪學心性實驗錄 全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

本錄は禪門の奇傑故坦山老師が三十有餘年の實驗に基き、迷悟の本體を腦脊の二體に歸し、感病の同體を論じ、腦脊の異性を道破したる者にて、禪學及び生理學心理學上大革命を惹起すべき新説なり老師が一代の功過は併りて此一書にあり。

文學博士 村上專精先生著

○自信錄 全一冊 定價金五十錢 郵税金六錢

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり、吾々己の實驗を語り、句々心の奥底を披露す、まづ筆を「人生の目的」に起して、「目的の成否」を明にし、「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく、盡く盡く盡く進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて、疑なく敬虔なる佛教育者の態度は此書によつて知るを得ん。

井 洲 堂 發 賣 書 目

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○禪學講話 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

運切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨髄を體練したるものは禪也。痛切快語以て人生の眞意義を示し、處世の妙諦を説く者は禪也。本書、人生の髓以下各章、明快の說、有餘の筆、眞の眞髓を發揮して論述なし。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○禪の妙味 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

上篇は精神淨靜の妙味を論じ、苦樂昇沈の中に處する實學の工夫を示し、百年の煩悶を一掃すべく下篇は親性の妙味を説き、唯心觀あり萬有一體觀死生邊脱觀に及び千古の惑を破るべし眞に禪學者の眞師たり。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○批判禪學新論 全一冊 定價金五十錢 郵税金八錢

本書に收むる所唯心論現象即實在論物心合一論萬有一體論安心立命論の五章は禪學の根柢を論明して、餘蘊なく以て禪學史上一新時期を劃するに足る、最後に禪語略解を附し初學者の參照に便にす。

井 測 堂 發 賣 書 目

加藤咄堂、境野黃洋兩先生共著  
文學士 田 宗 惠 師

○佛敎講話 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

本書加藤氏の組織的佛敎境野氏の歴史的佛敎田氏の實踐的佛敎の三講話より成り三方面より三氏が佛敎を觀察し何人にも解し易く講述せられたるものにして教理、歴史、道徳等舉げて盡さざるなき好著なり。

東洋大學講師 釋清潭先生著

○寒山詩新釋 全一冊 定價金五十錢 郵税金八錢

是れ佛の是れ仙の是れ狂漢の得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語の是れ詩語の是れ佛語の得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることを著者精深雄大の學と才とを以て一筆勿斷彼が面目ここに於て露出す寒山詩神を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし。

故清水默爾先生遺稿

○紫風全集 全一冊 定價金貳圓 郵税金拾貳錢

清水君は敎界の元勳島地默爾師の第二子にして其篤學能文既に世に定評あり往年大志を擲きて印度に留學し佛敎梵典の研究に従ひ又大谷光瑞氏が佛蹟大探險の壯舉に加はりて功績頗る大なる者ありしが不幸にして未だ大に其所得を世に施くに至らずして異境に崩歿す知友之れを哀しみ其生前述作せることを集めて茲に之を公にす論文あり俳句あり漫筆あり書簡あり悉くこれ金玉の名文君が天才的詞藻の端として輝けるを認め得べし。

楚人冠 杉村廣太郎先生著

○七花八裂 全一冊 定價金六十錢 郵税金六錢

著者曰此書は著者が名に畏れず戀に泣かず半錢の債を預けず半圓の債に底はれず天上天下一點半毫も他の駭付感壓を受ることなくして權に我が見得底を披露せる者過去十三年間の英文詩收めて此の一巻の中に在り著者の如く覺乏し著者の如く墮落せんと欲する者は讀ぶ此書を讀め。

大内青樹先生著

○佛敎の根本思想 全一冊 定價金五十錢 郵税金六錢

持論なる佛敎の根本思想を捕へ來りて縱横に解説し雄辯滔滔言辭平明宇宙人生に關する諸種の疑問を解釋して快刀亂麻を斷つる感あり益茫たる佛海此好指針を得て初めて渡るを得む。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○鍊心參禪道話 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

本書は禪理を經とし道義を緯とし古今の說話を交錯したる禪學道話にして或は滑稽風逸抱腹絶倒すべき者或は悲痛哀怨萬斛の涙を流すべき者或は勇壯快活肉動骨鳴るの概ある者或は羅殿方正古聖先賢と伍を同うして立つ感ある者あり言語談笑の間自然に道に入らしむ禪學中破天荒の大文字也。

理學士 石川成章先生著

○自然科學と佛敎 定價金十五

科學宗教共に是れ人生の管轄心界光明其間をんや著者獨特の視筆を呵し多年の漢書を綴諸士夫れ此妙旨を味ふに後るゝ勿れ。

建仁寺管長 武田默雷禪師著

○續默雷禪話 全一

本書は臨濟の師家武田默雷師の談話百則を其の禪臭なき所却て棒喝あり教訓あり修養ありら禪機を拈じ來らん。

文學博士 前田慧雲師著

○禪榻茶話 全一

短篇長語五十餘篇修養の要諦を説き信仰の旨を述べしむ。

加藤咄堂先生著

○通心經講話 全一冊 定價金卅錢 郵税金四錢

佛敎八萬四千の法門を收めて二百六十二字に單み、宇宙の神秘天地の妙用説て到らざるなく、人心の源底、信仰の要義示して盡さざるなし、著者平易の文を以て之を講述す、眞にこれ修養の資、佛の南針たり。

文學博士 村上專精著

○誠のしるべ 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

建仁寺管長 竹田默雷禪師述

○禪機 全一冊 定價金四十錢 郵税金四錢

活殺自在は禪の機鋒にして與奪縱横は老師が手腕なり兵家之れを用て其玄妙を盡し商家之れを用て其妙を究む日常行中此禪機あつて初めて活社會に活運動を試みるべし本書は諸方面に涉りて應用せらるべき禪機を示したる者にして何人かを問はず三讀すべき近來の活書なり

文學士 渡邊又次郎先生著

○最新論理學 全一冊 定價一圓卅 郵税金八

本書は新學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特にせる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔平易なるの中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大家な欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし。

井 測 堂 發 賣 書 目

井 沕 堂 發 賣 書 目

加藤咄堂先生著

告

(明治四十一年五月)

# 大死生觀

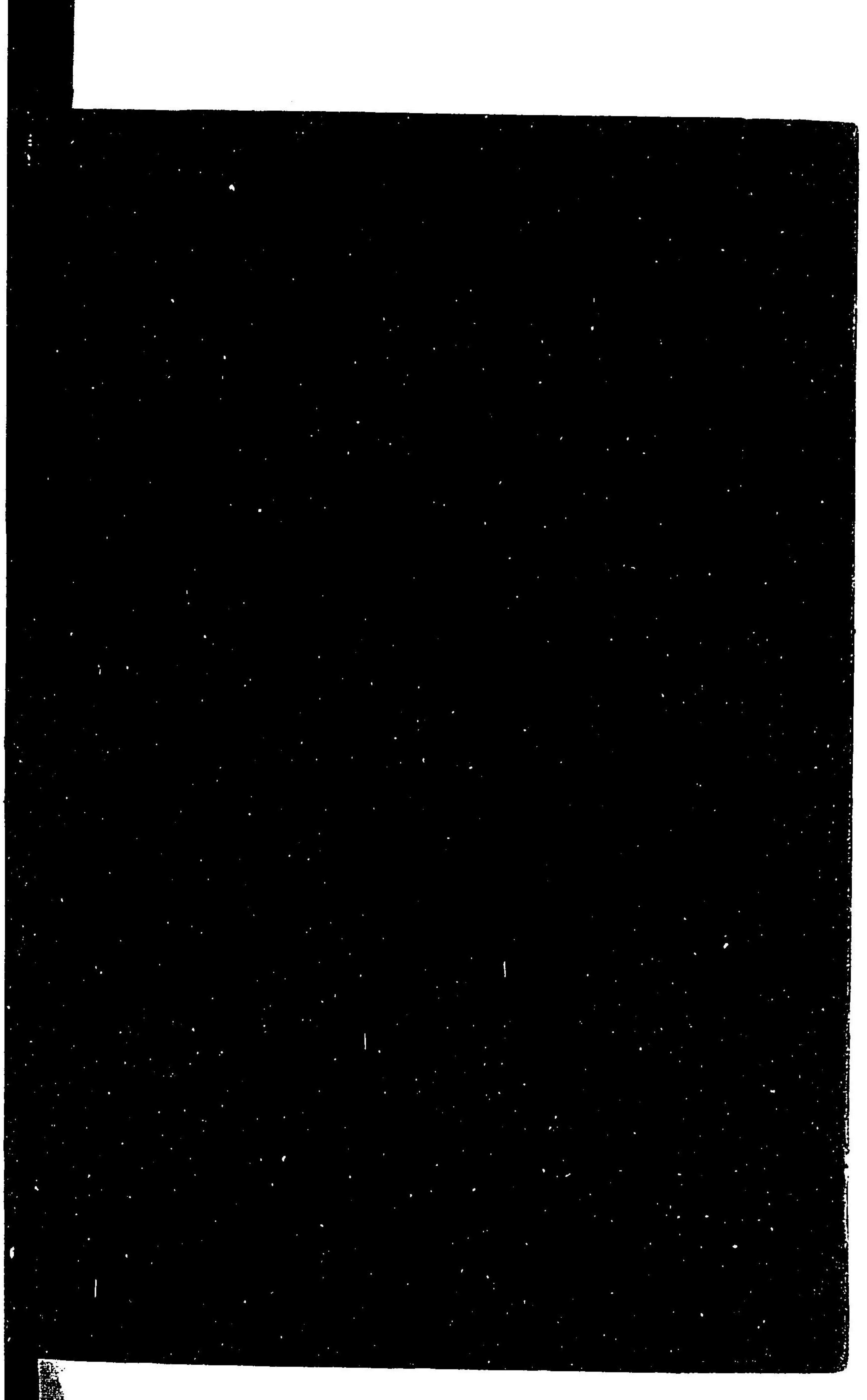
全一冊

● ●

死生は人生の根本問題にして又千古未決の難問たり、著者鑿きに死生觀を著し、今一神話傳説に質して原始人民が如何に之れを解せるかを見、進んで世界各宗教の信仰と、マジョリイ(哲學者が見解に開ひ、更に詩歌小説に現はれたる死生の觀念を窺ひ、英雄豪傑偉人傑士が死生に處するの實歴譚より地獄、極樂、幽靈の存否に至るまで、凡そ死生に關する諸種の思想と事實とを集めて近世科學の判斷に照し、超科學超哲學の信仰に入り、自殺、情死、殺人、葬祭等の倫理的價值を判じ、終に此千古未決の難問を解釋して吾人の心裡に一道の光明と慰安とを與へ、如何にして死生に處すべきかを示す、行文流麗、趣味横溢、何人も讀むべく何人も解すべし、請ふ一本を購ふて修養の材とし處世の箴とせよ、本書は實に系統ある一個の死生辭典なり。

324

74





013688-000-2

324-74

静思録

南条 文雄/著

M41

ABA-0159



